

川柳塔

創刊大正十三年 通卷一〇七三号
平成二十八年 十月一日発行 (毎月一日発行)



日川協加盟

平成二十八年度 六賞発表

No.1073

十月号

詩歌とともに67年！ 伝統と信頼の飯塚書店刊行の川柳書籍

【最新刊好評発売中！】

スポーツ川柳

編集部編

リオ・オリンピック、盛り上がりましたね。あの余韻を今度は川柳で楽しんで下さい。川柳ならではの視点でユーモアと機知に富んだ、スポーツをテーマにした作品を集めました。

128頁 オールカラー 1000円(税別)

●大好評既刊川柳書ベスト3

現代川柳のバイブル

名句一〇〇〇

黒川孤遊 編著 四六判184頁 1200円(税別)

駄洒落、言葉遊びだけでなく文芸としての川柳作品ベスト1000を、川柳作家として活躍の元産経新聞記者が鋭い眼力で選び抜きました。



楽しみながら上手くなる

穴埋め 川柳練習帳

田口麦彦 著 四六判240頁 1600円(税別)

例句の空欄に入れる言葉を考えるだけで自然と川柳が上達する本。初心者からベテランまで練習できる。

川柳入門はじめのはじめ

田口麦彦 著 四六判224頁 1300円(税別)

川柳の素晴らしさを豊富な例句とともに探求。秀句の作り方も解説。後世に残る川柳を作りましょう。

【ご購入はお近くの書店か直接小社まで】



第十七回 四万十川柳全国大会

小 島 蘭 幸

栄光の日も一日は二十四時

薫 風

第四回大会の選者、橘高薫風先日の色紙は、第一回の選者、磯野いさむ先生の色紙と並んで展示されました。懐かしい色紙を鑑賞していると、一枚の色紙が目の中に飛び込んで来ました。

瀬にひたす尻は真桑瓜の幼な尻ら

兜 太

俳人、金子兜太氏の色紙でした。黒々と大きな字で書かれていますので圧倒的な存在感がありました。

幡多信用金庫主催の四万十川全国大会は、川柳と共に、俳句、短歌も毎年開催されているのです。歴代の選者の色紙がずらりと展示してある光景は、正に壮観で美しいものでした。

第十七回四万十川川柳全国大会は、幡多信用金庫の大会議室で八月二十七日、午後一時に開会されま

した。私は、「私と川柳」と題して、川柳との出会い、柳人との出会い、句碑、句集との出会いについて話をさせて頂きました。続いて入賞句十句と、ご出席の皆様の入選句の選評を致しました。

病院から四万十川はあゆ漁だ

千穂子

国はどうあろうと君とハイタツチ

望

きようだいが五人もいるとひまがない

小学二年生 あつき

大会賞の千穂子さんは、川柳を始めたばかりと聞いて驚きました。出句全て良かったのです。秀作の望さんの作品は、大会前夜の懇親会で、もうすぐ初孫がお産まれになると聞いて、そうか、そうだったのかと納得したのでした。あつき君の作品は、小学二年生と聞いて、もうビックリでした。男ばかりの五人兄弟、「ひまがない」には、ほっとする暖かさもあるのです。大会終了後、懇親会でいただいたビールは、本当に美味しかったです。四万十川の幸を堪能して、美しい花火を見る事も出来ました。ホテル十階の特等席で花火を見てみると、どこからか薫風先生の声が聞こえてきました。

「これから四万十川川柳全国大会を応援してやってや…」。

座右の句

白牡丹白に徹して迷いなし

(みつ子)

私の句

鬼を待つ一人できぬかくれんぼ

川本真理子

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「曾爾・秋祭り」

■巻頭言 第十七回 四十万川柳全国大会

カタカナ語の仕事

小島 蘭 幸 …… (1)

川柳塔(同人吟)

仁 部 四 郎 …… (2)

川柳塔の川柳讃歌

小島 蘭 幸 選 …… (4)

自選集

木津 川 計 …… (43)

■エッセイ

織田作から8ミリそして川柳へ

米 田 恭 昌 …… (47)

温故知新

西 出 楓 楽 選 …… (48)

水煙抄

麻 生 路 郎 …… (68)

新川柳鑑賞

路 郎 賞・川柳塔賞・愛染帖賞

橘高薫風句抄

吉 村 侑 久 代 …… (79)

平成二十八年年度

路 郎 賞・川柳塔賞・愛染帖賞

檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

英語 de Senryu

吉 村 侑 久 代 …… (80)

誹風柳多留一二篇研究

吉 村 侑 久 代 …… (80)

カタカナ語の仕事

仁 部 四 郎

例えば、川柳塔平成二十八年六月号の温故知新(高杉鬼遊川柳句集より)の十七句のなかに、「キリギリス」「ヘッドホン」「ユダ」「キタ」「ミナミ」と五つのカタカナ表記がある。

「革命に遠く漫画とヘッドホン」のポインントは、「革命に遠く」にあるのだが今日の作者なら、「漫画」はあつさり「マンガ」になるところであろう。今日では、「ケータイ」「スマホ」という展開になったのが「ヘッドフォン」ということであろうか。

実は、「ブーツなりリーゼントなりヤングなり」という句が昭和54年の佐賀新聞読者文芸で活字になったのが私の川柳の第一歩であったのだが、「ブーツ」は戦後であり、「リーゼント」は戦前にもあったことで、「ヤング」は戦前なら「若い人」か。若者。だったわけである。

唐津の句会によく来ていただいて御恩の深い高杉鬼遊先生の句と私の初心の句を並べたのはいささか憎越というものが、カタカナ語が川柳の表現として多種多様な仕事をしていることに今更のように関心を抱いているので、この稿を書き

愛染帖

檸檬抄「疑う」

主幹・理事長の選任について

北野哲男

新家完司選

(82)

一路集「もてなす」

安土理恵共選

(86)

初歩教室「手本」

根岸万子選

(89)

インスピレーション・ナビ

印象吟

菊地政勝選

(90)

川柳塔鑑賞

山口光久

(91)

水煙抄鑑賞

大西泰世

(92)

『麻生路郎読本』余滴

(37)

山崎武彦

(94)

せんりゅう飛行船

⑦⑨

古久保和子

(96)

■句集紹介『ネオンきらきら』井丸昌紀著

楽原道夫

(98)

九月本社句会

新家完司

(99)

句会燦燦

前 たもつ

(100)

各地柳壇(佳句地十選/片山かずお・久保田千代)

岩崎真里子

(101)

十月各地句会案内

岩崎真里子

(102)

柳界展望

岩崎真里子

(103)

■編集後記(ひとこと/磯島福貴子)

朱夏・勝弘

(104)

座右の句

紫陽花を褒めればツンと花しようぶ

(俊秀)

私の句

ふるさとは代替わりして遠くなり 足立 つな子

始めたのである。

「きりぎりす半分鳴いて風が吹き」という吉川雉子郎(吉川英治)の句と「百

点の妻に疲れるキリギリス」(高杉鬼遊)の句のおもむきの違いが川柳のおもしろ

さであり、「キタよりもミナミが好きな河内弁」(高杉鬼遊)では、「北」「南」で

はサマにならない。

カタカナ語は、時代の姿をよく映す川柳の仕事の一端になって更にふえていく

ことであるが、『川柳2000年』(川上三太郎・読売新聞社)から明治・大正時

代の句を二句ずつ拾ってみた。

苦学生シャツまで濡れる雨に遭い

汗かきのメリヤス皮をはがすよう

キヤラメルを持って迷子は手を引かれ

新世帯ポンプは僕が押してやる

「キヤラメル」には漢字がないのもお

もしろい。

ところで、カタカナ語は元は英語であ

ったとしても、スペルは別というものも

あると蛇足と私の駄句を出して、この稿

を終わることにしよう。

グラマーで英語教師の実力差

グラマーの話社会化許される

蛇足の蛇足で言えば、英文法と社会

現象としての「モンローウオーグ」とい

うことである。



小島蘭幸選

橿原市 居谷真理子

生き下手が考えごとをする真夏

強烈な闘志を秘めた薄ピンク

面構え正しき鰻を一尾買う

人妻という芯を持つやわらかさ

クーラーを切る原爆忌 敗戦忌

戦争の記憶が足首を握る

鳥取市 森山盛桜

悩むのは止めませんかと根無し草

蚊帳の中まだ純真な僕がいた

活躍は遙かむかしという火箸

見得切ってみたが軸足がふらつく

畦に腰下ろしコーヒータムです

一概な僕は素数が性に合う

札幌市 三浦強一

熱中症怖くて走るビアホール

歌声喫茶アコーディオンの青春譜

ゆっくりとだが確実に呆けてゆく

石の上何年になる五七五

平均寿命越えた余生はケセラセラ

後は良きに計らえと書く遺言書

米子市 吉田陽子

追わないでおく逃げたことある道だ

螺子山を全部つぶしてから鬱

シングルの姉が一番祭り好き

新盆のふわり揚羽が会釈した

百日草咲かす私の応援歌

一人なら焼き茄子なんて作らない

鳥取県 斉尾くにこ

果てもなく小さな家の物語

味付は計算されたおバカさん

フィクションとリアルの同居する茶店

問診がさぐるころの緯度経度

一生分はめてもらって着払い

財産は信頼なのにまたなくす

大阪市 谷口 義

夏の雲放任主義の母がいた

大抵は珈琲を飲む喫茶店

その気になってバス停に立っている

散髪に一度行きたい葱坊主

おばあさんになりすぎないようにしたい

新聞をばつと開くと雲の峰

和歌山市 木本 朱夏

花柄の傘なら去年捨てました

暮れてゆく夏と宛名のない葉書

誰かの目の中に映っている秋よ

仙人掌に花咲きやはり誰も来ず

こだわりがあるスリッパの右左

平蔵と呼ばれてふてぶてしい猫だ

大阪市 栃尾 奏子

初恋は白い真珠に似て無口

恋をする少女は風のペンダント

流れ星次はあなたに差し上げる

ジェラシーが揺らす炎のイヤリング

嫌なこと包んで空はスカーフだ

女みな一足は持つ赤い靴

河内長野市 山岡 富美子

秋風がそろりと十字路の辺り

チャンネルで巡るわたしの漫遊記

沸点と沸点ぶつかり合う五輪

蛇の目傘くるり未練が乾くまで

パラリンピックあなたに挙手を致します

卵かけご飯が好きな一人膳

篠山市 酒井 真由

ひなげしの卓に散りゆく夜のメール

森深く還りゆくわが魂よ

サン・テグジュベリ 眠れぬ熱帯夜

夢ひとつ身を離れゆく波の音

庭の柿青きを供え魂迎う

風化せし英霊一基香手向く

弘前市 高瀬 霜石

稲刈りを終えてドヤ顔する田んぼ

一生のうちたくさんの神に遇う

うっちゃりが少なくなった大相撲

人間国宝死ねばどんどん高くなる

ドラキュラじゃないのに十字架は怖い

線香花火あれは大人の愛でるもの

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

ハーモニカ妻よ幼い目をするな

ガラス細工の色で観光地に染まる

欲出さず端役の位置に座ってる

語り部はいずこお墓の草むしり

ある予感後ろに亡妹が並ぶ

背泳のかたちで静かに寝ています

鳥取市 両川無限

指うさぎ一番好きな人はだれ
人間の灰汁が波打ち際に浮く
狂わない時計に僕がしばられる
ふところの深さに海が風いでくる
ずかずかと踏絵蹴散らすハイヒール
包んだら嘘がこんなに重くなる

松山市 宮尾みのり

IQはIQボクの道を往く
坊ちゃんを逆手に伊予のしたたかさ
真実一路時代錯誤と嘲われた
放つとっても育つ昔はそうでした
シリアスなドラマは脳が受けつけず
しみ隠す化粧私もまだ女

堺市 柿花和夫

もうひと品ほしい二日目のおでん
手術無事済んで病名告げられる
安全がおもてなしですりオ五輪
盂蘭盆会今年も詫びた親不孝
嫁いだ娘の部屋でばつんと想うこと
手土産のつもりか惚気置いて去に

唐津市 山口高明

傍聴の席で遺影と泣きくずれ
パンザイを唱え死ねるの自衛隊
凶鑑にも載って無いよと深海魚

雷門の大提灯を見て育ち
お六櫛重宝してるバリジェンヌ
鑑定をせずとも女には判る

西宮市 山本義子

残照はおひとりさまに優しいな
健保証と年金いつも仲が良い
お疲れさま赫い夏花いちずなり
平均寿命きてこれからはどない生く
体重が減ると背丈も縮むらし
梅雨あけてよろしうございました杖

岸和田市 岩佐ダン吉

信じると重いひとこと投げてくる
間違いはないですヒト科です以上
四面楚歌それでも僕は歩いてる
大丈夫時どき僕に声かける
プライドを捨てて力が入らない
その内に私の恐さ知るだろう

三田市 福田好文

恩があるこの世に何か返さねば
賽銭に紙幣使ったことがない
天辺の話はしない無位無官
予報士が昨日の嘘を謝らぬ
北国を恋のメツカにする演歌
聞き流す妻の愚痴にもある一理

岡山市 藤成操江

運不運重ね歩いてきた小道
人並という名で払う寄付その他
前列に出ればあたりが晴れてくる
ユーモアに重い話がまぜてある
気後れが先立つ病院の廊下
針葉樹絶えた生家の水の音

大阪狭山市 矢野 梓

ニユースから夫と語る終戦日
クーラーをがらがん利かせ夏籠り
たわい無いお喋り心風いでくる
声出して笑うだけでも元氣出る
夫婦して席譲られて返す笑み
辞書ばかり引いて八十路の手紙書く

豊中市 藤井則彦

胸騒ぐモディリアーニの細面
煮えたぎる怒り鎮めるアメリカン
イチローは今も進化の通過点
最期には指で描こうア・リ・ガ・ト・ウ
急いでも時間が貯まることはない
あの世までポケモンGOを追うつもり

大洲市 中居善信

暖味なものの上に慣用語
生きざまと向き合っている無精髭
腑に落ちんものにボタンの掛け違え

反論へ有無を言わせぬのも一手
弁当箱の隅におもしろい事がある
八十年生きた顔見ている鏡

尼崎市 山田耕治

老人会から赤飯届いたよ
ゴハンよと呼ばれる趣味を持つている
出口調査受けてニユースが待ち遠し
のみ込んだ言葉夜中に疼き出す
眠れぬ夜わたくしを埋める穴がない
つまずいた所に初心落ちていた

河内長野市 山室光弘

冷めた愛レンジでチンといわせた
お言葉に重い使命がほとばしる
イチローは古武士のような求道者
リーダーに女性を選び知る平和
戦いにさわやか残すアスリート
来年も咲けと紫陽花切る暑さ

藤井寺市 増井ヨシ枝

スマホ見る顔はみーんな二重アゴ
子等のおしゃれキラキラ素顔美しい
揉めるのは勝手札状出しておく
墓参り気にはなるけど車椅子
この暑さ電気代など言うでない
何故だろう昔の人に夢で逢う

京都市 清水英旺

長岡京市 山田葉子

俺よりも先に逝くなど命じてる

元氣出せ男やもめの友をハグ

天皇も年には勝てぬと言うてはる

お参りを兼ね本堂で避暑気分

愛撫したい水蜜桃の丸さかな

京都市 藤井文代

称赞の一言で生まれる自信

現実からストン 落とされ嘔む奥歯

泣かないと決めたら不意に追い風が

ウエストきりり自己満足のベルト穴

ライトアップ見せるものだけ照らしてる

京都市 榎本宏子

ダンブカーとすれすれの道ランドセル

攻められる内が華だと猿回し

祈ったらいいことたとありますか

テロニュース亡夫と行った街もある

大文字いつもの場所に父母の霊

京都市 三宅満子

日の丸をしみじみと見るリオ五輪

眠れぬ夜オリンピックに救われる

君が代が歌える私日本人

お国訛で語る球児の爽やかさ

よろめきは恋ではなくて加齢です

豆を煮ているのを忘れないように

風向きがぐるり説教降ってくる

住職のお参り室が片付いた

ひとつでもチャネル合えばよしとする

足踏みを少し元気が湧いてくる

八幡市 今井万紗子

丁寧に畳んで返す男傘

この笑顔名刺代りに如何です

母と語る時がたつぷりあったのに

十年日記気合を入れて太く書く

何時だって予定は未定外は雨

大阪府 桑田ゆきの

喝采で汗と涙のリオ五輪

火の雨の降ったあの日を覚えてる

花に寄る蝶に世相を聞いている

蟻の列お辞儀交わして何処へ行く

星の秘話子に聞かしおり星月夜

大阪府 野田栄呼

力まずにてっぺんと言う土地に住む

ほとばしる笑の中心三才児

喉越しのよい冷麺で生き心地

酌み交わし気分転換日本晴

割引きを見て外出の機を貰う

大阪府 米澤 淑子

安らかな寝息お先にとは逝けぬ
ほどほどの尺度に合わせ恙なし
透明な扉で野心などはない
ブライドも消し去りそうなの猛暑
新しい卒塔婆の増えて蟬しぐれ

大阪市 井丸 昌紀

カーナビが教えてくれた遠回り
苦手のない男で友はいらない
空店舗守る立派なアーケード
おしゃれたすればするほど笑われた
海の日に山の日休み上手に作る国

大阪市 内田 志津子

スムージー一杯今日が動き出す
スムージー今日の終わりにありがとう
オールA検診自慢始まった
梅酒にもほんのりふわり下戸の夏
初乗りに曲線嬉し田圃道

大阪市 宇都 満知子

出来た句に咀嚼をすれば迷い道
ひとめばれ心の余震だきしめる
人混みをさけて静かな遠花火
好き嫌いはつきり別れますトマト
しがらみも今となっては宝物

大阪市 江島谷 勝弘

左右見て生きていますよしなやかに
挑戦をします今日からスマホです
ヘソ曲がり自覚はするが直らない
へとへとビール飲んだらシヤンとする
束ねる気ないのに文句だけは言う

大阪市 榎本 日の出

三つ星も七つ星にも縁遠い
九条が戦火を無くす保証なし
趣味という強い味方に惚れてます
口出さず息子がくれた赤いバラ
手を変えて別れを惜しむ家族葬

大阪市 榎本 舞夢

食事会花火の音に旨み添え
リオ五輪原爆の日とテレビ漬け
天皇のお悩み解る同世代
墓参り新しい顔増えて夏
薪能夜空に舞いて涼を呼ぶ

大阪市 大川 桃花

獣より学習力の無いヒト科
電話で済む話姑来ると言う
生き甲斐をいきなり聞かれ思案する
芸名の由来の裏にある逸話
ダブルの痛み老いの試練に見舞われる

大阪市 大 治 重 信

大阪市 古今堂 蕉 子

はえかわるトカゲの尻尾が羨まし
美しき人に似合わぬ大欠伸
黒揚羽芙蓉の花に声を掛け
古き日も昨日の如く終戦日
抱きしめて愛しき人の軽きこと

大阪市 奥 村 五 月

試着室値札合わぬと妻が呼ぶ
福耳と言われる耳は聞こえない
録画見てアウトがセーフなるルール
遺産分け優しい姉が鬼になる
定年後掃除洗濯主夫となり

大阪市 笠 嶋 恵 美

熱中症一步手前の日日続く
親がわり長電話聞く役目かな
天神祭火花があがる寄付の音
ワンダフル竹葉亭で暑氣払い
女性都知事思わず拍手バンザイも

大阪市 熊 代 菜 月

手をとめて思い出たどる更衣
追いぬかれ小走りになる日暮れ時
芸一つ持たぬ私の座りだこ
傘寿には傘寿の夢がまだ残り
かにかくに今日もリハビリ快復期

機嫌見て頼んであげるからと母
指切りの重さ知らない幼稚園
挑戦の顔美しいリオ五輪
ひいらぎもばらもぬるま湯育ちかも
手前味噌これにはまって生きている

大阪市 近 藤 正

辞めるべき時は近いと宣いし
炉の悲鳴聞こえぬふりで再稼働
身を切ると言いつつ裏で助成金
やまゆり園つらく悲しい十九人
共闘は大義を活かすリスク

大阪市 坂 裕 之

新しい気持ちこそ乗り越える
ゆとりある暮らしの中にある差別
お土産を持って来た彼要注意
言ったってどうにもならん事ばかり
協力を求めるからは正座して

大阪市 佐 藤 忠 昭

薔薇の字はトゲが邪魔して書きにくい
檸檬の字膝が気になり字が滑る
鬱の字は画数多く手が疲れ
女の子婆になるまで七変化
町人も昔の人は毛筆だ

大阪市 田 浦 實

棚田の四季先祖残した宝物
散歩にもちよっとおしゃれに気を使う
イチローのバットはきつと如意棒だ
月一の床屋でしばし若返る
ゴミ捨ては僕の仕事のなってきた

大阪市 津 村 志華子

歳月は音なく過ぎてはや卒寿
こだわりを捨ててゆったり生きて行こ
蹶いた段差に罪は着せられぬ
温もりに飢えてひとりの物思い
マロングラッセ仏と午後のティータイム

大阪市 津 守 なぎさ

はかどらぬ予定クーラー依存症
温泉を予約たのしみ倍加する
今日も採るゴーヤの力すばらしい
ほとばしる汗も威勢のギャル神興
宅配便わかつているが斜に構え

大阪市 寺 井 弘 子

晩学の視野に広がる好奇心
カルチャーに背伸びしている定年後
贅沢を知らぬ暮しも悪くない
夏祭り君の浴衣に目がおよぐ
ああ言えばこう言う妻のつむじ風

大阪市 寺 本 実

空襲を知らない子らの花火好き
英霊を忘れ草むす真田山
人生の岸で小舟を待っている
寄り添って腕からませてみる花火
異教徒の命は軽しマホメット

大阪市 中 井 萌

ジェラシーも闘争心も瘦せてきた
お宝はお前だけだと妻を指す
愛という得体知れないもの求め
ちゃんと生きちゃんと死ぬ為ちゃんと今
眠られぬ夜は孤独を持て余す

大阪市 原 田 すみ子

生きてます爪ものびるしゴミもでる
丁寧に生きて煮干しが好きになる
性格が孫にも見える長女次女
物差しは自分伸縮をさせつつ
猛暑日は更に度を増すなまけ者

大阪市 平 嶋 美智子

八月忌まふたの裏でカンナもゆ
原爆を話す先生声細く
楽しかった勉強のない二学期が
急ぐ時ジグザグ杖が邪魔をする
健診でひっかったの八十路坂

大阪市 藤田 武人

竿竹も豆腐も道で売っていた
限界を知り誘惑に負けた国
柏手を打つと感じる神の息
木洩れ日の優しさ一人占めをする
船旅を夢見てドレス買って待つ

大阪市 藤原 千恵子

白い杖道をゆずってすれ違ふ
アニメより子等の喚声笑みが湧く
悩み欄読んで自分を省みる
もう採算合わなくなったバイキング
国宝の琵琶の奏者の寂びた味

大阪市 升成 好

前向きに生きる工夫をして達者
なるほどと思う地形にある城址
没頭のページが呉れる無重力
輝かぬ手だが合掌できる手だ
その瞬間不意にとび出すオノマトペ

大阪市 吉内 タカ子

熱中症そう騒ぎなさんな後わずか
暑いけど歩いて行くでカラオケ屋
老いた脳五輪チャンネル刺激待つ
百日紅おもい出させる彬の碑
人はひと私色で楽に生き

大阪市 若本 安代

星の数増えてふくらむ盆踊り
学び方毎日パズル解くように
息抜きも手抜きも下手で損な質
女ですこだわる朝の身嗜み
その笑顔特効薬になりました

堺市 奥 時雄

ご訓示で秘書の原稿読み違え
プロポーズ敬遠される美人秘書
ワンマンを手懐けている美人秘書
役得も仕事のうちと議員秘書
悔しさを撥ね返すバネのびたまま

堺市 加島 由一

妻の好きな朝顔咲いて七回忌
月の舟妻待つ星へ漕いでいる
風鈴は浄土に届く音になる
煽てると男リハビリにも励む
間に合ってファンファーレ鳴るリオの空

堺市 源田 八千代

柵を捨て都知事就任あっぱれだ
しなやかな体操演技見惚れます
夏休みの想い出作りミュージカル
早朝に出掛け日中避けている
盆迄に猛暑で枯れる墓地の花

堺市 齋藤 さくら

寝不足が続いて昼寝リオ五輪
お茶しましよ 言える相手が居てくれる
くよくよとするだけ何も変わらない
百歳の笑顔に平和折りたいたい
言い訳が虚しくなってくる夕日

堺市 坂上 淳司

袋の中で指握り合う競り市場
泣かれるより凄いぞ妻の無言劇
菜の花毎に歩き遍路を継ぎ足して
オバマ作鶴の土産が舞い降りる
煽てられ弾んでしもた後の悔い

堺市 澤井 敏治

泣かなかったよとお泊まり授業からの孫
哲学の道をスマホが闊歩する
老人の溢れる街に住み慣れる
ちちろ虫君も月見か爛の酒
通過する駅に咲いてる秋ざくら

堺市 遠山 唯教

御参りをして持て成しをする先祖
健気にも電子レンジで生きている
職人が美意識をもち手を抜かず
ラケットのガット張替えやる気だす
もらえるなら病気のほかはみな貰う

堺市 内藤 憲彦

想定外も有って人生愉快なり
会議中腹の虫だけ眠らない
呆けぬよう人より派手なシャツを買う
リストラで辞めた会社が新記録
健忘症が二段飛ばしで追ってくる

堺市 村上 玄也

難民のごと熊が出没する人家
育英資金ローンと化して痛ましい
スフィックスになってすました顔でいる
争点にせず改憲派票稼ぐ
心地よい涼風いずこかで雷雨

堺市 矢倉 五月

上得意様限定と餌が来る
コーヒーざらい別れ話のあの日から
肉じゃがを嫌う男でナルシスト
蛇行しています向き合いますいずれ
空遙か恋しき人の名も遙か

池田市 栗田 久子

リオの感激流す涙を見ましたか
ポケモンGOもう野放しにしておけぬ
つつがなく過ぎれば一人居の自由
川床は超一級の涼らしい
枝豆のおいしさこれは罪だろう

和泉市 横山捷也

河内長野市 植村 崑代

補聴器をつける自慢だった耳
長生きのコツの説法若僧侶
心音が乱れています終戦日
蝶になるまで待ったプロポーズ
妻の背が大きく見える盆踊り

茨木市 島田 誠一

河内長野市 大島 ともこ

爆買いのついでに駄買つて欲し
勝ち組が億ションで見る蟻の列
取つて置きの酒で旧知と夜もすがら
胃カメラに泣いた褒美の異状なし
検査入院だんだん病人めいてくる

茨木市 藤井 正雄

河内長野市 梶原 弘光

若き日の父母に背いていた頁
あやしてる方を撮りたいカメラアイ
新市制おらが畑も三丁目
突き放す言葉の裏で泣いている
栄転を送るホームにいる嫉妬

貝塚市 石田 ひろ子

河内長野市 木見谷 孝代

スパーで涼を取ってる炎天下
鈍になるわたし庇っているわたし
残高にふと考える我が寿命
遊ぶのも結構エネルギーがいる
今日の日を感謝で閉じるお仏壇

こけるなよこけたら笑うぞ泣くもんか
やさしくされると涙が出ています
一日中外の暑さがわからない
夫とは時々会って擦れ違ふ
治る訳ない病氣と戦っている (難病)

小出ししてパワー温存年の功
三猿にならない平和な嫁姑
住み慣れた我が家で全治六ヶ月
元氣なら何とかなるよ笑う母
人生に無駄など無いとバラサイト

真実は一つこころの中にある
窮地にも何食わぬ顔してみたい
退院の前日見やる終電車
同郷のよしみと寄つて来る地酒
古希過ぎてがたびししない窓になる

故郷へキャンプするよな大荷物
つくつくほうし未練残さぬように鳴く
昼夜が逆転テレビ漬け五輪
潮風が帰巢本能刺激する
変わらない景色に安堵する故郷

河内長野市 黒岩靖博

無駄遣いする程ゆとりない暮らし
競い合い娶った妻に操られ
妻の毘にはまって諭吉召し捕られ
今でしよう介護の母をリタイアで
無呼吸で行きつ戻りつあの世まで

河内長野市 谷久美子

財布の紐緩め鰻でパワー付け
穏やかな暮しに慣れて間が持てず
示談金どつさり積んで仲直り
相談をしてもするりと躲される
奥様は凄いですねと褒めておく

河内長野市 辻村ヒロ

気がつけば妻一色の我が家です
友の家猫七匹に迎えられ
若い頃美人だったと言われても
不摂生が露骨に病つれてくる
隠れんぼ意地悪メガネ出でおいで

河内長野市 藤塚克三

下手なりに続けてみたい好きな道
だらしない暮らしに打った句読点
私利私欲俺はなれない丸い石
力抜き孫に優しい風となる
ワンテンポ遅れて妻とリズム合い

河内長野市 松岡篤

先立つた友に挨拶したい盆
もう一軒家建つ程の家具家財
消費税下がったとこで目が覚めて
不器用な男ダジャレで自己主張
その理想ちよっと下げると楽ですよ

河内長野市 村上直樹

折り鶴の土産ヒロシマ忘れまじ
真実と嘘の狭間であえぐ葦
終活のゴング鳴らした朋の葬
十年日記抱えて挑む卒寿越え
キラ星の中から選つたのにと妻

岸和田市 雪本珠子

夕暮れの光移ろう時が好き
雨の日はやさしい言葉はしくなる
人生を四季にたとえて今は秋
娘が逝った日から時間が止まつてる
猫にまで気遣いされる老い独り

四條畷市 吉岡修

癖球を得意としてるへそ曲り
騒ぎ得ゴネ得渡世おもしろい
二浪したおかげ売り手の年卒業
あの世ではきつと男が強いはず
コントならなんばでもネタ落ちてます

吹田市 太田 昭

手花火が燃え尽きるまで亡母とい
眠らせた昭和の屏ノックする
生きるのに少し疲れた曼珠沙華
シナリオを書き替えてゆく子の巣立ち
一皮を剥いて都会の闇に入る

吹田市 木下 敏子

バランスを取って奇麗な輪をつくる
生き甲斐はやはり一句を捻り出す
自転車はもう止めました八十路坂
極楽の席あるかしら私に
好きなことだったら足も動き出す

吹田市 須磨 活恵

ふるさとの海が恋しい蝉しぐれ
独りとは自由で気楽で淋しくて
まっすぐに融通きかぬもちと困る
友が来てジョークで暑さふっとばす
それまでは元気に居たい二〇二〇

吹田市 野下 之男

フランスに行きたくないと小さい声
印度では五十度と聞き辛抱せ
ラグビーも七人制で軽くなり
山鉦が下になにと熱い町
がんばればなまずもいつか鱈なみ

吹田市 山本 希久子

萩桔梗秋の散歩はスキップで
傘寿を越えた道がだんだん狭くなる
つぎはぎの余生何とかなるものだ
旬を食べしつかりと打つ句読点
流れ星忘れ上手に生きている

高石市 浅野 房子

蝉時雨とうとうと聞いている昼寝
エンドレスもうこの辺が潮時か
延長戦見ている方も疲れます
あと一口喉につめぬがむせるのだ
涙ふきそれぞれの道歩み出す

高槻市 井上 照子

出来ぬこと歳の所為だと悔やんでも
母もまた老いをこらえて生き抜いた
いつの間に大事な耳が役立たぬ
この身古い友古い電話なだめ合う
あさがお見事開いた初々し

高槻市 片山 かずお

ナスで牛キュウリで馬の盆飾り
室外機の熱気を浴びせられる路地
思う数値が出るまで血圧を計る
大波小波それぞれ持っているリズム
指一本握らせ赤ちゃんをあやす

高槻市 島田 千鶴子

川風に暑さしばらく和らぎぬ
盆踊り昭和のリズム響く路地
ユーモラスな仕種かわいいハニワ群
図書館の椅子寝心地がいらしい
手のひらにどんぐりひとつ秋入日

高槻市 初代 正彦

青春と蘇鉄猛暑もなんのその
明日発つ息子へ包む親心
寝不足もやはり気になるリオ五輪
ガタきてるのにゴルフ予定をまた入れる
錆びた脳磨いてくれるアイバッド

高槻市 杉本 義昭

目の鱗落ちる言葉で蘇る
栄転と左遷があつて今日も酔う
グチャグチャになったメロンの愚痴を聞く
二人きりスローライフも味なもの
うやむやにしてはくれない赤いバラ

高槻市 富田 美義

飽食に溺れ都会の隅で餓死
鍵っ子で育ち都会で独り老い
憧れた筈の都会で青テント
親切をサギと疑う世を憂う
大都市は暮らし易いか蚊が増えた

高槻市 富田 保子

ありがとう言われて少し日々楽し
向日葵に貸してあげよか夏帽子
出来不出来あるが孫らの目玉焼
いいにおい今夜のおかず肉じゃがよ
許せない一言があり奮起する

高槻市 原 洋志

結果論ロングシユートは美しい
生き延びた傘が見事に干してある
生い立ちを包む大きなバスタオル
まだ誰も開けたことない非常口
何もかも時代のせいにするメタボ

高槻市 安田 忠子

朝一番植木に水をやれる幸
休刊日物足りないがほっとする
横町を曲がれば謎が解けました
すれすれに追い越して行くオートバイ
もう少しこの世にいと慕参り

豊中市 江見 見清

歳をとるだんだん欲が地味になる
結果よりプロセス褒めて育てる芽
蟬の声ボスの合図かピタリ止む
スイッチが壊れたお喋りが止まぬ
休診日の医者姿を見間違ふ

豊中市 松尾 美智代

夫の背追ってきたのに見失う
気がつけばとなり知らぬ人がいる
弁解をしてほしい時あるんです
私からはごめんなさいとありがとう
平凡な夫婦の長い物語

豊中市 松村 里江

枯れても女紅一刷毛の身だしなみ
鈍行の窓側私もう詩人
指で撫で埃の有無を見るイケズ
洒落つ気も食欲も無くウツごもり
土壇場で男の強さ見せつける

豊中市 水野 黒兎

耳奥に玉音がなお残る夏
なぜなぜと問う子ぐんぐん伸びてくる
自分史の華となるべし妻の章
陽炎の中からぬつと父ゆらぐ
肌荒れは母の勲章畑仕事

富田林市 片岡 智恵子

オリンピック日々メダルの数が増えてゆく
ひとりひとりの笑顔が嬉しテレビから
眠っているうちに大腸癌検査
無花果の熟れておいしい終戦日
花一輪遠くになっていく父よ

富田林市 関 よしみ

八月は取りどりの鶴折っている
鬼灯は熱い心にキュッと鳴る
鬼やんま擦れ違いざま会釈する
盛り塩に心を入れるのも町家
青い青い檸檬が悟してくる迷い

富田林市 中井 アキ

表札にまだ薄らといると亡夫
木洩れ日になって友情確かめる
この道と決めたあの日の夏帽子
思考力粉碎に来る八月忌
家族に戴く愛情と云う荷物

富田林市 肥山 一文

教え子が無事に進学はつとする
乾杯で孫の結婚お祝いを
人間の弱点をつくほめ殺し
人間の意地が弱点広げてる
豊かさを求めすぎてる人多し

富田林市 山野 寿之

大空が私を包む四季の風
古い無邪気青春の歌若い声
断捨離の最後に過去を焼く日記
やあやあと上げる片手の散歩道
胸の底吐いたら青い碧い空

寝屋川市 籠島 恵子

寝屋川市 森

茜

昭和史が位牌になっていようだ
かげろうを追うより今はスクワット
気を使い過ぎて買えなくなる土産
許すというより忘れてたのが本音

寝屋川市 伊達 郁夫

花よりも育てる土にある誇り
大吉の賞味期限が気にかかる
金で済む話と聞いて怖くなる
笑みひとつ男結びを緩くする
言い過ぎた後は黙って爪を切る

寝屋川市 富山 ルイ子

小池さんの足ひっぱることないように
東京都女性の知事が素晴らしい
女性への大きなうねり素晴らしい
共稼ぎ炊事洗濯みな女
生きている意味考える傘寿すぎ

寝屋川市 平松 かすみ

ハラハラと見てる青信号へ三輪車
測定は三歳若くありがとう
四股踏んで寿命の足しにしています
誕生日台風来ないよう祈る
ストレスか友から来ます長電話

らつきようと梅干し無事に着く便り
あらかたを済ませひと先ず心太

緑陰はしたしく息をととのえる
ひと言のがんじがらめへ蟬が鳴く
ナイシヨナイシヨひそか裸になる猛暑

羽曳野市 安芸田 泰子

同病の友達出来て元氣出る
腰痛が癒えず自転車錆びたまま
方言が軋び出てくるクラス会
敬老の宴過ぎれば又独り
約束を後悔している小指

羽曳野市 宇都宮 ちづる

すっぴんでクラー部屋に引き籠もる
庭花火子等の素肌を好む蚊よ
タオルマフラー巻いてお洒落な汗をかく
夫への不満十七文字で吐く
テレビ音10が15になる二人

羽曳野市 徳山 みつこ

なつメロが酔わす昭和の明と暗
「お気持ち」に花まるの束縛げたい
再審無罪時の重さと喜びと
ヨチヨチと世間を学ぶ元教師
ご先祖にみな笑顔を見えたらう

羽曳野市 中 川 ひろ介

歲月のごと夜空にひらく遠火花

晴耕も雨読もせずに昼寝する

炎天下絵手紙で来た切り西瓜

騙す方が偉そうにする還付詐欺

ハッハッハー 鷗哥の笑ひ妻の真似

羽曳野市 永 田 章 司

金メダル当然だろうプレッシャー

私設秘書常に覚悟の尻尾切り

大臣になる前チエックスキャンダル

きれいな事で済ませて後にわだかまり

悪い癖似ないで良いにそっくりだ

羽曳野市 藤 原 太 子

深読みが一人相撲を取っている

詩一つ心の窓をノックする

胸張って弱気な心遠ざける

子と相談言った途端に電話切れ

あまのじゃくへちよつぱり逆を言うてみる

羽曳野市 三 好 専 平

コンピニとスーパードけになった村

右左上下表裏のない小石

鍼灸師おばあちゃんの愚痴聞いている

折鶴が太平洋に橋をかけ

焼跡派みんな戦争きらいです

羽曳野市 吉 村 久仁雄

メダルより無事の帰国を乞う五輪

防犯カメラ耐えて真実見続ける

人として過不足なくて魅力なし

オシャレ好きだから続ける山ガール

人生の想定外に鍛えられ

東大阪市 北 村 賢 子

溜め息はつかない幸せが逃げる

振り向けばほめられたこと二つ三つ

蟬しぐれあつさり消えたいわし雲

炎天へ心をこめて募洗う

生きた証し明日へ残す老いの坂

東大阪市 佐々木 満 作

玉音の焦土に平伏した無念

特攻機帰らぬ父の八月忌

分水嶺明暗分けた生と死と

がん告知あつという間に友が逝き

鬼灯が爆ぜて土用が風いでくる

枚方市 海老池 洋

うな重でひとり暮らしの土用丑

ひんやり枕の助けも借りて熱帯夜

向日葵の海へ弱音を捨てにいく

親と子の会話奪っていくスマホ

散歩とて仕事になった定年後

枚方市 小林 わこ

言い勝つて気まづくなつて涙出る
試行錯誤ともかくにも私流
辛いことはかりですでも前を向く
あと出しのジャンケン勝ちたいのホント
お留守番孫に上手に遊ばれる

枚方市 丹後屋 肇

我が家計妻に任せて恙無い
ネオンの灯直ぐ酔っぱらう戎橋
プライドを脱いで涼風胸に抱く
氏神の石段義肢が上り切る
仏壇の妻が手招き雲の峰

枚方市 寺川 弘一

人生はとことん尽きぬ数え歌
作者不詳のシナリオで生かされる
ロボットは汗も涙も流さない
鬼ごっこことん逃げて困らせる
子の住む町の天気予報を見落とさぬ

枚方市 二宮 山久

一合で事が足りまうさ晴らし
手をつなぐ世界平和のリオ五輪
指切りをかわした右手洗えない
腹わって話す本音の酒の席
日記帳三日坊主でメモ帳に

枚方市 二宮 紫鳳

信じあうぬくもり確かな介護の手
これからはおまけの人生共白髪
おしゃべりが弾んで増える万歩計
孫という妙薬を待つ老いの午後
とび切りの笑顔の孫とツーショット

藤井寺市 伊藤 アヤ子

長崎の平和の祈り蝉しぐれ
盆に帰るそれとも暮か迷つて
赤々と燃え尽きる迄大文字
色褪せた父の帽子にある威厳
越えられない事は無いはず夫婦です

藤井寺市 太田 扶美代

この人の味方にならばなれそうだ
好物を並べわたしの愛とする
おばあちゃん選挙行こうというメール
くどくどくどくどわたしが老いてゆく
抽出しの中に特等席を持つ

藤井寺市 鈴木 いさお

メンデルスゾーンの森で聴く挽歌
愚を重ね未だ悟りの外にいる
真つ新な画布から溢れ出るオーラ
フルムーンの宿で潮騒聴いている
丹念に髭剃り今日は逢う日なり

藤井寺市 高田 美代子

楠公の旗掛け松があるお寺
達観視すれば小さな事ばかり
四角関係此の世は兎角ややこしい
忘れた筈のロマン一つに寝つかれず
ぬるま湯につかり機嫌の良いお酒

藤井寺市 田付 絹枝

真夜中の月下美人に感無量
トンネルを抜け出た蟬の大威張り
ストレスも笛の音色に吸い込まれ
スーパ―のお休みコーナー花盛り
玉の汗入道雲の得意顔

藤井寺市 津田 シルク

私の血税議事堂でひるね
亡母の宝は検閲された手紙
半世紀たってもたまに出る訛
隣のゴーヤ越境して来て実二つ
生活のリズムを変えて在介護

藤井寺市 吉田 喜代子

級友も逝き廃校の木に蟬集く
里の寺墓も疎らに寒寒し
雨蛙にわしの眩き聞かれたか
元氣だと電話の声で決められる
白内障予防ルンルンサングラス

藤井寺市 若松 雅枝

眼鏡補聴器拡大鏡も揃えとく
はいはいと電話の声に艶がある
此の子も何れ僕のお墓を見てくれる
それぞれが胸中隠し卓囲む
追伸の母の一言愛滲む

松原市 森松 まつお

回復に三日はかかる二日酔い
誕生日なのに朝から大掃除
ロボットの知能にとても歯がたたぬ
お隣の風鈴年中鳴っている
句会終えラッシュを避ける縄のれん

箕面市 酒井 紀華

砂時計去ったお人を数えてる
雨が好き心を洗うハーブティ
不揃の野菜がうまい友の味
タバコ吸う指がせつない別れるとき
八月の空を忘れてならぬ原爆忌

箕面市 出口 セツ子

高齢になると運転恐くなる
完べきな人より弱い人が好き
ふと疑問持つと崩れてゆく土台
親も子も嘘はつかないのが家訓
生き方の答を捜す万華鏡

箕面市 広島 巴子

熱關に涙うるうる甲子園

懷メロに涙はらはら身に染みる

お供えの花庭で待つ盃蘭盆会

盆休み昼寝に先祖あらわれる

友と会う夏バテじゃない食べっぷり

八尾市 高杉 千歩

食べて寝て暮らすカレンダー八月に

ベッド周辺文具揃うて辞書がない

パソコンも辞書なし苦吟ケアハウス

介護度が上がる悲しいことである

締切りを気にする間は大丈夫

八尾市 寺川 はじむ

人間ドック ツケを嘆いているカルテ

今日は天国明日は地獄を泳ぐ秘書

そっくりと言われタレント好きになる

小泉流そっくり真似て知事の椅子

どうせとは思うが欲しい長寿薬

八尾市 宮崎 シマ子

母のパレット淡い朝顔なお淡く

一人前に熱中症にとらわれる

お盆済み亡夫に手間はとられない

ステンドグラス妻は妖しい光出す

今日のテーマ今日こなさぬと明日がない

八尾市 村上 ミツ子

立秋へエアコンずっとオンのまま

骨折の痛み思考力をうばう

買物へ娘にしつかりと支えられ

リオ五輪無二のライバル金と銅

がんばれニッポン真夜中の応援

八尾市 山根 妙子

鉄棒は歓声聞いて目を開ける

発展が生態系を壊すゴミ

スタートは皆いとしい子の筈が

鮮明な記憶焦土に向日葵が

むつりの分を補いしゃべる妻

神戸市 上田 和宏

立ち話車がそつと迂回する

墓の蟬読経にリズム合わせ鳴く

熱中症で痛い熱いと草花も

核を知り人類今や曲がり角

意思表示足腰膝でするダンス

神戸市 奥澤 洋次郎

悒鬱を晴らす願いの宝くじ

振り返る後に誰もいない秋

夕風に閉じ込められた港町

ラブソング歌うのやめた機関銃

孫話し勝負のついでに日暮

神戸市 富永恭子

蜘蛛の巣が歩く速度を鈍らせる
旅立ちへ髪を束ねているところ
倍倍に増えて野の百合夏の涼
猛暑にも負けず堂堂かばちゃは黄
鉢花が中に入れてと泣く猛暑

神戸市 能勢利子

割り勘でも友が欲しがる領収書
責任の所在暈して一人前
にこにこ顔不運も逃げて行くみたい
気が塞ぐ時は人間ウオッチング
ラッシュアワー両手をあげて保身する

神戸市 松井文香

十八歳初投票も親子連れ
折折にささやかなれど祝膳
好い児ぶるのはやめました肩が凝る
婆ちゃんの出番鍵っ子にはしない
命令がないと動けぬ子の危険

神戸市 山口美穂

怠け心を是とし酷暑に堪えている
ご先祖さまと対話わたしの盆供養
杖さま様今日もお世話になりました
敗戦ですまだ言いつづける八十二
百円ショップで散財気持切りかえて

神戸市 山崎武彦

薄味に馴らされ妻の掌の中に
税金を値切る勇氣はありません
家族の輪その中心に車椅子
観覧車くるり二人の小宇宙
被災地に土足で上がるレポーター

明石市 梶谷和郎

何度でも使い回しをする初心
逃げようが古いの二文字が背なに棲む
スーダラと生きた昭和が懐かしい
神の域踏み越え創る青いバラ
捏造に積み木は崩れ客は去る

芦屋市 黒田能子

困ったなどつちも好きで選べない
きつと何か楽しみのある曲がり角
アイディアの主婦の手作りヒットする
神の試練だ現実を受けとめる
楽しまん二人の今の持ち時間

芦屋市 竹山千賀子

アリバイに使った母が姿見せ
孤独死の裏でもがいている自由
歳重ね朝の目覚めのありがたさ
子等の声聞こえる街に住む安堵
ビル谷間窮屈そうに陽が落ちる

尼崎市 市坪武臣

師の恩が行く氣にさせる同窓会

不満でも爆発させず深呼吸

ごめんねと言えば笑顔になれる筈

皇室の画面に見入る和やかさ

足腰が弱ってきたぞ四股を踏む

尼崎市 加川靖鬼

子沢山でいつも揉まれている強さ

駅長にしたい立派なノラの髭

メロディーが静かに急かす新幹線

うす味に慣れて言葉も丸くなる

ノーマークでしたあなたの震源地

尼崎市 藤井宏造

客待ちのタクシーちよつとだらけてる

落ち武者のように顔出す不発弾

褒めすぎぬよう褒めるのも難しい

夫婦岩大きい方が妻に見え

古稀むかえさあもう一度脱皮する

加西市 金川宣子

冷蔵庫支給日前に掃除する

気が合つて一会の酒に誘われる

反抗期母の愛から抜け出して

ランドセル孫と選んで予算超え

子や孫の便利使いでボケられず

川西市 大坪一徳

選挙には行くが入りたい人いない

タバコ税貴方の為と値上げされ

タバコ銭弁当買える程になり

汗淋漓球児の夏が今日終わる

日記には良き妻なりと書いておく

川西市 山口不動

墓参り飲もうと返事二人から

蟬の生大合唱で今燃やす

携帯とボトルを持って夏散歩

雷雲は一駅隣通り過ぎ

熱中症案外楽に逝けるかも

篠山市 北澤稠民

レントゲン撮って見せたい親心

老いの坂夫婦のテンポそろいかね

節目なくずるずる過ごす老いの日々

新しい靴は見事に足を囓む

すれ違いほのかな香りがついてくる

三田市 足立つな子

お中元時間指定の人任せ

梅雨あけと同時にセミの声を聞く

水の事故悔やまれて尚孫おもう

ポイント五倍つい手がのびるお買い物

申年の娘から届いた赤下着

三田市 石原 歳子

洗濯物動きもしないこの暑さ
暑いから痛みをこらえ医者行かず
マンションの手入れも終り音も無し
小さい秋私のそばに来て欲しい
一本の水引草に足を止め

三田市 上垣 キヨミ

国想う陛下の篤い胸を聴く
くねくねと人生航路未だ未完
京の旅お流れにした温度計
新盆の友にはかない命の灯
球児らの氣迫老いにも慄もらう

三田市 上田 ひとみ

逢える日を数えてばかり夕暮れは
ていねいに重ねています好きな彩
計画通りなんてつまらないはず
守りたい君が言うからまた涙
はつきりと答えるひとの涼やかさ

三田市 尾崎 一子

原爆忌と五輪一番長い日
恩しゅうを越えて平和宣言八月忌
炎天の甲子園り才燃える夏
孫と住み居ないと淋しくなる母性
笑顔ひとつやさしく包む人の芸

三田市 北野 哲男

盆準備オーラ出ているお婆ちゃん
ぐらぐらと生きて米寿が近くなる
薬屋根の頃には星があふれてた
分校の跡に私の風が吹く
常識に少し疎いが詩人です

三田市 久保田 千代

グウばかり出す子にチヨキを出してやる
これ以上曲げたら私の色消える
タイミング合わず一言言えぬまま
考えを変えると空が見えてきた
空間を見つめベットの長い昼

三田市 多田 雅尚

水遣りは朝顔よりも先ゴーヤ
セールスにわざと弱点聞いてみる
リオ五輪眠れぬ夜に火を付ける
打ち水を避けて舞子を通り過ぎ
男には無駄なポケット多く有る

三田市 野口 晶子

大丈夫あなた好みの花で咲く
土壇場で居直る母とへこむ父
主戦場神はさめざめ泣くばかり
生き延びるために霞も食べている
反抗期不味いタバコも酒も飲む

三田市 堀 正和

生きんな朝から元氣セミの声
ご無沙汰だ味噌汁つきの朝ごはん
ペットまでサプリメントの世話になる
農道を走る軽トラ年期もの
アハハハなんと気楽な外野席

宝塚市 田中 章子

四年後は涼しい夏であって欲しい
ひとつ歳とるごと赤さ増すドレス
川柳を続けていい事ありますか
五輪を見すぎて締切り日が近い
指を折るばあちゃん何をしてるのか

西宮市 秋元 てる

手荒だが心の温さが沁みて来る
やがて逝く気配も見せず老母おしゃれ
老いて尚ゴールの美学など口に
褒め所探して父似と言うておく
突然の帰宅に猫が首傾げ

西宮市 足立 茂

黄金の波八十路が守る過疎の村
タッチの差で終電が出た千鳥足
ザル法で私服を肥やす政活費
失恋が主治医にばれた心電図
立ち飲み屋で庶民の味を知る富豪

西宮市 緒方 美津子

山の日や御巢鷹山にレクイエム
鬼灯や亡母の声する厨窓
首飾りではもうかくせない首の皺
改めて大事と思う両隣
嫁との溝水を流してくれる孫

西宮市 亀岡 哲子

冷奴掴みそこねる指となり
ナツメロに子の青春が甦る
丹田の底で育てている自分
今更に割の合わないグルメ旅
涼風が立てば行こうか齒科眼科

西宮市 西口 いわゑ

炊飯器今更ながらありがたい
颯爽と歩いていいなあ娘たち
八月の雲日本人を揺り起す
それぞれの個性みとめてくれた母
百日紅あつと言う間の一周忌

西宮市 福島 弘子

泥棒には自己責任とリオ五輪
文春が疑問を解いてくれました
真夏にも熱いおしほり喜ばれ
ウエルカムと草餅の出る山の宿
出来るならあのひとことを消したいね

西脇市 七反田 順子

頑として路傍の石である誇り
何億年化石で耐えてデビューする
ひらめいた名案湯舟に流される
愚妻と言うけど頭上がらない
おにぎりはしかと握って母の味

南あわじ市 萩原 狸月

カラオケの主役進歩のない演歌
ポケモンと夜遊びをするいい大人
幸運はテロに遭わずに帰る旅
プロポーズうなずくまでの貢物
マイホームローンできしむ屋根柱

奈良県 安福和 夫

ITのお蔭で減った行き違い
価値観の違いを越えてこそ和合
情報の進化良識忘れがち
手のひらのゲームで人が右往左往
ハト探すゲームソフトはできないか

奈良県 谷川 憲

三宅選手バーベルに類 銅メダル
全員が揃うまで待つ村時間
あんな誰にこやかな顔が問いかけ
同じ種植えたのに顔違う瓜
少年に恩師のことばずっと生き

奈良県 渡辺 富子

にこにこと母の繰り言聞くゆとり
一瞬のすきを狙っている病魔
音たてて幸せくずすメール来る
夢掴む靴をびかびか光らせる
まほろばの古事記の里で神と住む

奈良市 阿部 紀子

鳥人間これぞ青春炎天下
人力で飛ぶプロペラ機湖の上
キリストが両手広げてリオ守り
リオ五輪エコで華やか聖火台
難民のチーム編成粋な事

奈良市 大久保 眞澄

わがままでやんちゃのままに認知症
ポケモンになって閣議をのぞこうか
金持ちっぽく書く記名式アンケート
腰くだけ私もソフトクリームも
難解旬外国産に見えてくる

奈良市 加門 萌子

消し忘れ互いに連れのせいにして
そのうちに解る連れ合いの有難み
四年後のオリンピックは熱地獄
さあこれから耳に蛸かなTOKYOと
世界的女性リーダー目を見張る

奈良市 辻内 げんえい

古来稀 今や仲間が山といふ

この猛暑でもやはり続ける一万歩

ご近所さんかも夜中の救急車

夏バテしてられぬ孫と遊ばねば

殻破りとび出す孫にエールする

奈良市 山本 昌代

どうのこうのうるさい子らが居る幸よ

信頼のふたりの影が睦まじい

雨上がり優しくなっている尾っぱ

ふる里のリズムに和む箸の先

千切れ雲ちよつとくちびる矢らせた

奈良市 米田 恭昌

マイナスイオン森で満喫するカラス

幸せは五体満足老妻も居る

もう少し生きようきつと面白い

核を持つ地球宇宙の問題児

拉致問題北の返事はミサイルで

生駒市 飛永 ふりこ

かき氷汗も戸惑うてんこ盛り

男でしょ値打ち下げますくどくどは

ボランテニア愚痴の中にもある学び

くたびれもシフォンケーキで和の集い

ハンモック猛暑忘れて風に入る

香芝市 大内 朝子

玉音へ鳴咽の亡父と泣いた日よ

生前退位お気持ようくわかります

手でふせた蟬の感触子に戻る

ガン疑惑晴れてスキップしたくなる

もう少し生きてていいよ神の声

桜井市 安土 理恵

本気だから「うん」と言うまで粘るから

おいてけぼりの蛍かボツと闇の庭

こだわりはあるけど亡姑の杖借りる

身の程を杖が教えてくれました

耳に火をつけられてから眠れない

和歌山市 磯部 義雄

何よりの葉見舞いに来る孫ら

部下達が百面相と言う課長

内定が決まり息子の弾む声

嫌な顔しないで嫁が下の世話

この喧嘩親が出て来て火に油

和歌山市 上田 紀子

女子会の誘いも来ない暑い夏

今日の事丸く治めて水を打つ

人生はこんなものだと言う答

足すものも引くものもなく夕日落ち

温度差の違う二人のエコライフ

和歌山市 喜田 准一

人の幅話す言葉に奥がある
飛び方もそれぞれと知る赤トンボ
ハンカチの白に混じった嘘ひとつ
土壇場が大事仕事もスポーツも
旨い話は少し薄めて飲めばよい

和歌山市 楠見 章子

パソコンもスマホも無いが孫を待つ
打ち水でひよひよいと虹の橋をかけ
イヤリングそうかそうかとゆれている
夏木立夢二と逢った美術館
エンドレステープになった蟬時雨

和歌山市 坂部 紀久子

まだ昭和ひばりの唄を愛してる
パソコンを開けばいい事ありますか
他人の言葉に耳を貸さない立ちあおい
常備薬主治医に命托してる
不意打ちの蜘蛛の巣にまだ負けません

和歌山市 武本 碧

曇天のユーウツ弾く大笑い
君の影近づくほどにハイになる
暗雲かとみれば鯨の飛行船
見えないものがふと見えてきた夜明け
椎の葉に盛って旅心を癒やす

和歌山市 土屋 起世子

縄電車出発します盆供養
無愛想な医者 of 言葉に安堵する
その時の気分でメニュー決めてる
生きてこそこんな可愛い曾孫抱く
愚痴小言言わず可愛くなる老母

和歌山市 福井 菜摘

根性を貧乏神にきたえられ
見栄はらず素直に生きた土踏まず
八起き目のファイトが神の目にとまり
飽食のこの世に思う過去未来
うれしい日いろんな彩の風に会う

和歌山市 福本 英子

リオリオと今年の盆は忙しい
寝不足が続く一と夏の我慢
小細工をして疎まれる老いの知恵
独りでもまだ住んでます卒寿すぎ
締め切りが迫ると俄然沸く勇氣

和歌山市 古久保 和子

シャープペンか細い音でまた折れる
大の字になれば小さなことばかり
さるすべりも夾竹桃も炎天下
信号待ちは少し手前の木陰
バスを待つ夕日を連れて帰るから

和歌山市 堀

富美子

永らえて曾孫抱く日の手の温さ
それからは美味い話にそっぽ向く
部屋中の花一輪に癒やされる
酸いも甘いももう迷うものはない
病院の梯子も世話を焼かせない

和歌山市 松尾 和香

ふるさとへ近く高速延びて行く
青い空水しぶき上げ遊ぶ孫
思い出にひと彩添える誕生日
ゆとり出る暮らし年金ありがたい
三歳児歌って祝う卒寿かな

和歌山市 松原 寿子

辿り着けないままにバズルが埋まらない
ぬくい瞳に重い心が溶けていく
揺れるから心に杭を打ち続け
歌流れ癒やされてゆく海がある
交差する編針想いこみあげる

海南省 小谷 小雪

水槽の金魚哀れをさそう顔
軒先に風鈴吊し君を待つ
音だけでもひんやりさせる遠火花
誰にでも優しくしてね鳳仙花
軽快なエンジン音で父帰る

海南省 堂上 泰女

花火大会昔は優雅だったのに
ファインプレーすりやイケメンに見えてくる
生真面目という私のエンブレム
クーラーもレッドカードを出す猛暑
犠牲者を悼む日本にある礼儀

紀の川市 宇野 幹子

哲学書催眠剤が入れてある
化石にはなるまい赤い靴をはく
一円もまけてはくれぬ切手代
何処へと消えた二匹のはぐれ蝶
とつくりの追加でさらり泥を吐く

紀の川市 北山 絹子

あなたより少し遅れて風に乗る
天を突くような男の自己主張
真実がないから人に嫌われる
風に立つ男の顔が炎えている
童謡を聴けば心が無垢になる

紀の川市 楠原 富香

色あせた写真の中に過去がある
活気ある町は子供の声がする
親戚も疎遠になった野辺送り
避難所に活気届けるボランティア
年の功光る知識が無量大

紀の川市 辻内次根

線香の煙たどれば蟬の声

振り向くと窓のガラスに独りいる

玄関に何時も緊張感がある

身長が二センチ減っていたシヨック

夏の日を浴びて真夏の色で咲く

田辺市 岡本 昇

米作り止めても錆びた鎌を研ぐ

おしゃべりでスパイス利かす定食屋

露地物の野菜が稼ぐ道の駅

着こなしのセンス磨いてセール買い

縁の下で流した汗は報われる

鳥取県 石谷 美恵子

夏野菜うらの畠に助けられ

出つくした笑い袋を満たさねば

石投げた張本人は腕を組み

自問自答 答がみんな甘くなり

派手に振る舞いスランプは覗かせぬ

鳥取県 岩崎 和子

涼しげに病室の夫眠ってる

見舞っても声も出さずに目をつむる

今日もまた声も聞かずに帰路につく

汗まみれ洗っては干し繰り返し

冷房の音聞きながら猫眠る

鳥取県 竹信照彦

孫の名を付けた木枯らしてはならぬ

年齢の重みもたまた足にくる

年齢を重ね存在感軽し

どこからか土用のうなぎ湧いて出る

あちこちが痛むと素敵に生きられぬ

鳥取県 西谷悦子

環境のちがいが喜劇としておこる

鏡見て髪梳き顔はあまり見ず

熱い風呂悪いと知って入ってる

台所川柳部屋になっている

子守した孫が結婚するさみし

鳥取県 松川行男

冬が好いばやく夏にも又期待

当たりますよう窓口で聞く軍資金

二度目には暑い挨拶省略す

連休が取りやすいよう海の日を

膝小僧旅の仲間は黙り込む

鳥取県 山下節子

ドッカンと母の宅急便が来た

凶星つく母の瞳は泣いていた

下向いてメールで話す人ばかり

スランプを幾つも越えて今の幸

父としたキャッチボールが基礎にある

鳥取市 池澤大鯨

片棒をかつがされ雄役どころ
次々と水子とあわせ九人生む
オリジナルと言えどヒントは他から受け
種芋があつて小芋のころころと
鷹が鷹ほんとに生んで面白い

鳥取市 加藤茶人

すつきりと辞表を書いた夢枕
三食に昼寝が付いて午後はお茶
カリスマの等身大はまあ小柄
親孝行その分私にはきつい
バーゲンに大和撫子置き忘れ

鳥取市 岸本孝子

もたもたとしてたら傘寿越えていた
折れそうなところに酒という薬
彩りもいいが大事な旬の物
弁当に強い味方のプチトマト
八十歳こっそりバックしています

鳥取市 岸本宏章

「平和の日」にしたらどうです終戦日
マイナンバーカードが僕の証明書
もたもたと降りてもバスは待ってくれ
有名人の証サインの字が読めぬ
候補者は不在合区の選挙カー

鬼一匹魔除けに飼っているのです
お手紙を下さい胸に雨が降る

わたくしを透明にする朝の風
狂わない時計がわたし追いつめる
祭から祭りへ生きてきた金魚

鳥取市 棚田大

ありがとう今日も朝には目が開いた
メリハリは明日からよと今日も言う
ドラマでの悪事の手口学ぶなよ
平和な世センスが違い戦生む
海の日に俺の日作れ川叫ぶ

鳥取市 谷口回春子

句読点うつてはならぬところ打つ
嫌な世だと難癖つけるへそ曲がり
ぐつとくる寡黙な母のひとりごと
子も親も羨が欲しいご時世だ
孫出世亡母の遺言兜脱ぐ

鳥取市 永原昌鼓

きらきらと若人集うリオ五輪
きらきらと二十歳の瞳明日を見る
またやった自分のミスに腹が立つ
図星だね選挙なしでも決まる顔
頑張ろう老後に咲かす花もある

鳥取市 中村金祥

ポケモンGO異様な景色見てしまう
スマホ持つ後ろ姿は隙だらけ
ライバルに急所をつかれアッハッハ
ユーモアは忘れぬ今日も門を出る
子の気持ち親思うほど悪くない

鳥取市 夏目一粹

咳一つしたが流れは変わらない
これからもこれまで通り浪費する
クーラーのいのち炎天下に果てる
やさしさは良薬こころ癒やされる
念仏か嘆きか蟬の声あわれ

鳥取市 西川和子

木漏れ日のちよつと眩しいハンモック
猛暑日の続くトマトの出来具合
立秋のひと雨降って種を蒔く
衰えを愚痴り合ってる立話
セピア色並べて思い出に耽る

鳥取市 平尾菜美

つゆ草が背のびはいやと這いまわり
長期戦強いられ草が伸び放題
よい習慣つけばあわてぬたじろがぬ
空の声きいたか父が虚勢張る
命綱信じる父が沖に出る

鳥取市 福西茶子

心地良い居場所カレーの芋になる
羽衣のようにスケスケ着て真夏
ヤドカリの転居はいいなシンプルで
深い意味ないがデートはスニーカー
変声期ですかまさかの鼻濁音

鳥取市 前田楓花

もう一度感動欲しいリオ五輪
新聞はテレビ欄から逆さ読み
月一度子供が来たらいい方だ
戦争の名残を残す山の穴
女風吹かせてほしい東京都

鳥取市 山下凱柳

定年後左団扇は夢の夢
マドンナがこうも変わるか同期会
何気ない言葉火の海なる予感
自助共助最後は公助される身か
海の日山の日俺には縁がない

鳥取市 吉田孔美子

水のもで家族ぐるみの競馬好き
使い切りサラブレッドの予後知らず
風吹く祭の鯛を釣っている
日本酒は酎に替えたと量も減る
風向きを変えたい 横腹を突く

熱帯夜慰めに聴く虫の声

鳥取市 吉田 弘子

耳の蟬木の蟬日長競い合う

うつぶんを晴らす日記が遠のいた

あの歳でステキなロマン少し妬く

近所中老人ばかり日が暮れる

倉吉市 猪川 由美子

選りによつて元職員が弱者刺す

何されるか施設入るの恐いです

夫逮捕妻の責任どこまでか

政策無いが知名度高く当選す

副作用恐くて予防接種せぬ

倉吉市 牧野 芳光

皮下脂肪脱いでも暑さには勝てぬ

風鈴を鳴らして父母が帰る

極楽だろうか悩みが何も無い

ひと花を咲かせるために雨に遭う

ライバルの笑顔の底の根は深い

倉吉市 山中 康子

診察がすみかみしも脱いだ気分

園児に見習うかわい「今日は」

エアコンの悲鳴聞こえるこの猛暑

一人とや何度淋しい思いする

はみ出てる尻尾一声かけたいが

寝てると思い悪口言い放だい

スーパーで家の在庫を思い出す

ご機嫌が直るをはかる砂時計

お互いの音が気に入り酒すすむ

ほどほどにウソとホントでくらしてる

米子市 後藤 美恵子

序列での大臣の椅子よく転げ

ヤッホーと叫べば青いこだまする

胸の奥語れるひとを探してる

喋り過ぎ飲み放題の時間切れ

全自動のトイレの慣れに気をつける

米子市 竹村 紀の治

だんだんと大事になつてくる明日

経よりも説法よりも先ず胡坐

亡妻の日傘を借りて万歩計

やけくそで喰う激辛担担麵

一万歩達成祝し大ジョッキ

米子市 中原 章子

心地よい一言脳が覚えてる

最高のドラマを演じ先に逝く

ブランドのトマト美味しい寒暖差

手応えがバナナとリンゴ続けさせ

ボランティアした敬老を今は受け

米子市 成田 雨奇

松江市 藤井 寿代

馴れてきて部分入れ歯がすぐ入る
暑いなとしゃべりはじめる散髪屋
電源が切ってなかった黙っとく

四十日経ってから行く美容院

タイマーが鳴れば椅子から立ち上がる

島根県 伊藤 寿美

母の味噌汁男は決して忘れない

ふと添え木欲しいと思う立葵

生き過ぎたと思う独りの立葵

乗り越えた苦勞優しい人にする

古い家に住んで独りの祀りかな

松江市 石橋 芳山

羽ばたきの飛距離が年毎に縮む

考えていみせんどこまでも砂漠

ほっとけばいいのか明日の空模様

孤独から抜けだせそうもなく寒い

息継ぎに腹に吸い込む青い空

松江市 小川 注湖

ママの手の刺繍赤富士描き出す

食べ残し二合三勺世を思う

心配だった合格通知チューをする

水溜まり飛ぶか回るか八十路足

自分史に元氣喜ぶ言葉書く

エンドレス狂った果実食べてから
午前二時メールを開く魔女になる
岸だろわか湾だろわか舐めてみる
ちぎれ雲あとの祭りが効いてきた
ごめんなさいにぎやかすぎる一周忌

松江市 松本文子

ドンと花火揚げる祭の寄付集め

月に居た頃はよかった兎泣く

向こう岸からペットボトルや宇宙ゴミ

痩せること出来るかテストしてみよう

温泉で寛ぐ女たちの笑い

出雲市 伊藤 玲子

疲れたと言えぬ楽しい旅帰り

また一人柳友逝って気が細る(森茂美さん逝く)

胸の止まり木淋しい鳥が寄ってくる

耳搔きで威張った虎を眠らせる

隣からブドウとチビの外交官

出雲市 岸 桂子

妥協して心淋しい日を送る

気まぐれにかけた情けの後遺症

自分史に切り抜きたい場所がある

忍従の跡は写真にうつらない

美しい月がわたしを歩かせる

出雲市 小白金 房子

此の夏をのり切る土用うなぎ買う

島に夏歓喜が集う牛の声

野あざみを一株残す草刈り機

なすきゅうり夏の主役を膳にもる

朝露が真珠と光る風の詩

出雲市 多久和 敬子

真つ直ぐに歩く明日の風に乗る

ロボットが昭和の私置き去りに

この暑さ続けば私枯れてゆく

ネット社会昭和生まれは置き去りに

出雲弁上手に喋る宇宙人

出雲市 竹 治 ちかし

聞けば皆胸に地雷を抱き生きる

年金の暮らしも数に入れる寄付

疑ってから神様と距離が出来

現実に触れて悩みの出たホープ

知る人が亡くなり噂だけ残る

雲南市 松本 昌

稲出来たされどT P Pで輸入米

趣味ここに金のかからぬ事はなし

後期高齢に吹いて欲しい千の風

モノクロの世界不幸な夢ばかり

右左ないスリッパのような人

岡山県 池田 たか子

愚痴を言うゆとりは知らぬ蟻の列

アナログの前頭葉のねじを巻く

空爆の音が消えない上げ花火

満天の星が見たいと娘が帰る

ひまわりの笑顔が消える弱者の死

岡山県 田中 恵

控え目に羽黒とんぼの舞う静寂

笹舟で思い出一ツづつ流す

泣き虫の蟬が朝から来て騒ぐ

安眠を網戸の風に予約する

幸福度計る基準は風まかせ

岡山市 工藤 千代子

幸せと思う暦が風に揺れ

耳鼻科まで自慢話がついてくる

夏動く蟬が静かになったから

古稀間近空気の切れた音がする

朝刊は休み何をして遊ぼうか

岡山市 丹下 凱夫

ブラットホームでヒマワリよく笑う

6 Bじゃ濃すぎる僕の影法師

猫にやるはずのメザシを俺が食う

肝心なことは聞きもらしている老身

気に入りのスニーカーです一万歩

岡山市 永見心咲

竹原市 石原淑子

あいまいな態度きりんの首が待つ
わたくしを試す秤が揺れ動く
ひまわりのバイタリティーを生む甘雨
自画像がそこそこ見れる様になる
人間の弱さが核をあたためる

岡山市 前田恵美子

美容院十も若くは無理ですか
顔の染みこんなとこまで母に似る
顔の皺私の生きて来た迷路
自信持ち自分の顔とまだ言えぬ
病院を出ると空気が光り出す

笠岡市 藤井智史

青のりを歯に挟ませて嫁に来る
古里の軸足外し嫁に來い
人間ができて嫁さんもらいたい
ふらふらなふりで飛びこむ君の胸
お先にどうぞ登坂車線で掴む運

広島市 岸本清

幼子を見る妻の目はとろけてる
カープ勝ち宮島さんが鳴り止まぬ
聞く耳はないな頬杖ついている
笑顔など誰でもできることなのに
正座からあぐらに変えて気も和み

ジリジリと被爆体験見て聞いて
平和祈願世界へオバマ語りかけ
スミツコが好きな私を見てる孫
九歳の夏挑戦のスイミング
進化論恐竜展を孫と観る

竹原市 岩本笑子

直角に曲がると夏が真正面
三歳のメールアメリカの孫よ
人生はドラマ時々昼寝する
病院の広さ迷子になる広さ
どうぞどうぞ朝の薬は十二錠

宇部市 平田実男

表札へまだ生きている七回忌
清濁を合わせて飲める生き上手
お祝辞のところどころに含み針
過労死がうらやましいと寝たつきり
また一人逝って淋しい住所録

防府市 坂本加代

夢覚めて自信どこかへ消え去った
応募して結果くるまでピンク色
聴こえて来るテレビの音と独り言
手間賃は計算しない朝市へ
疲れた日猫と並んで横になる

仏花一日三度水替える

東かがわ市 川崎 ひかり

蟬時雨島にも増える無縁墓
賞品にもらうと嬉しお米券

帰省待つ島の地酒と一夜干し

漁船待つ島の女の腕まくり

ストレスの色に染まっている吐息

松山市 栗田 忠士

真っ正直だからあなたを騙せない

四季咲きのバラの多情を持て余す

本物にたどり着くまで皮を剥く

石一つ抱いて刹那を生きている

松山市 古手川 光

今でしょ気合いを入れる蟬しぐれ

三〇〇〇安打達成しても高ぶらぬ

忙しい昼甲子園夜はリオ

呆けたんです宇宙人ではありません

夏バテを癒やしてくれるチチロ虫

西予市 黒田 茂代

尖らない程度勝ち気もほどほどに

造花より好きです庭の四季の花

鈍行は自分見詰める為にある

ときめきの始まり初夏が駆けってくる

淋しさの始まり晩秋の錆色

一杯のドロ水ごくり平和です

高知市 小澤 幸泉

長生きの薬トマトにかぶりつき

原発の魔力歯止めがかからない

尽くしても尽くしてもなお遠い人

ふるさとの「お化け煙突」とおすざる

義母看取り白蟻どつと顔を出す

唐津市 坂本 蜂朗

白蟻と共に引き継ぐ古い家

妻無口十分にとる車間距離

ぐらぐらと揺れて男が計られる

黄信号少し乱れた厚化粧

熊本県 岩切 康子

雨つづきせめて食事に太っ腹

被災地はメールで心通わせる

仮設での笑顔の友に安堵する

カナカナの声聞きながら朝仕度

許し乞う亡母の墓前に灯を点す

熊本市 杉野 羅天

震災後宴会続く業者さん

ガレキ残り再出発が重くなる

暑過ぎる思考回路を止めて見る

寿司にコーラ確かアメリカそうだった

仕事柄神経質な顔歯医者

沖繩県 森山文切

壁に投げ付けた粘着質の耳
号砲が鳴って飛び立つスズメたち
咳を飲み込んで孤独を回避する
ややこしく解釈されて駄目になる
腹痛は昨日の好奇心だろう

札幌市 小沢淳

灼熱の暑さ列島黙らせる
たっぷりの暇も暦に急かされる
煽てられ最後にババを引くはめに
思い出の写真ちびりと吟醸酒
句集より僕に川柳放浪記

青森県 松山芳生

惜別のことばに涙てんこ盛り
空は青昂るころ折り返む
思い出はみんな違った味で
決断は自信裏はとれてある
禁断の恋に無言の吾亦紅

黒石市 相馬一花

がつくりと肩を落とした下克上
被災地ですぐに決めた避難先
賽銭まかぬと神仏そっぽ向く
袋とじ欲しくて悩む教育者
生活に慣れてしまった平和ばけ

弘前市 稲見則彦

あの頃の少女古希の坂
五十回忌祝っています家族会
チャンネルを争っていたのも昭和
フィルムが入ったままでもう二年
わたくしの秘密を知っているわたし

弘前市 岡本花匠

空蟬やうつつを笑うコルセット
撫の実の不作で注意山親父
ネプタ点灯小虫集まり苦笑い
子の論し身にしみじみと老いの福
独活和えて今宵の肴酒すすみ

弘前市 今愁女

灯扇のねぶたも茶毘に風は秋
送り絵の妖しい美女が暗に消ゆ
リオ五輪甲子園とで暑い夏
首にタオルショートパンツもテレビづけ
ときたまに終活のことをも思い

弘前市 須郷井蛙

名作をビデオ未消化山にする
お守りは俺を見守る護衛艦
歯磨きをしたはず医師に注意され
時間さえあればと思う拭き掃除
インドアの仕事山ほど農作業

弘前市 高橋 洋子

息継ぎが下手で溺れる人の海
敗者復活接ぎ木で生きる老桜
根まわしが確としすぎて身の不覚
大恥をかいて気が付く夢芝居
自分顔飽きもせず見る朝鏡

弘前市 福士 慕情

家へ帰ると家を出て行く妻哀れ
雨風に頓着しない妻の足
警察犬妻の行方を見失う
夜通しの徘徊僕も眠れない
限界か妻の介護の矢が尽きる

さいたま市 星野 育子

十万年誰見届ける核のゴミ
カタカナ語の問いにひらがなで応え
大勢の人と出会えた回り道
恩返し頃合いを見る処世術
有名人より自由な無名人

東京都 川本 真理子

遠き日の五臓六腑に夏の音
子どもには真夏の闇が深すぎて
今は言える当然いるよ妖怪は
指人形いくつもせりふ続かずに
私ってこんな人かと手にたずね

東京都 まえで とよこ

天皇陛下の長靴ぬれますお田植えは
梅雨明けて街にあふれるクールビズ
涼しい涼しいじょうろのしたに花の声
夜明けまでクーラーつけてハーブ枯れ
ホームまであと一段をころびけり

横浜市 菊地 政勝

お祭りの指示をてきぱき出す隠居
三本で締める男の音がする
ヒマワリをゴッホになって描いている
イエスノーはつきり言わず長続き
妥協して波風立てず自己保身

富山県 島 ひかる

昨年の今頃生きていた妹よ
墓参りカサブランカを持って行く
激流へ愛を流した人に遭う
年寄りを諭す行く道だと諭す
繰り返しくりかえし聞く老いの愚痴

可児市 板山 まみ子

生前に遺産をくれと無理なこと
長生きをしたけりや酒を断てなんて
帰省する家は無くても盆休み
眠気には勝てず家計簿明日にする
不出来ですなんて言っても自信作

愛知県 早川 遡 行

この暑いのに激辛をな好み
過去全て水に流して再生紙
想定をした訓練が勇ましい
財政は妻が握っている我が家
久々に会って一升空にする

犬山市 金子 美千代

奥の手を教えて自信ある笑顔
お互いに見て見ぬふりで長続き
豆腐屋のラッパ大儲けはできず
雷ニモマケズポケモンGO進む
アスリートに感動もらい昼寝する

犬山市 関 本 かつ子

最終となるか買い換え冷蔵庫
七並べ敗けてあげるよ夏休み
付いて来た僧のバッグはパーバリ
長生きをしないと孫からだけ言われ
お言葉に姿勢正していた私

(前月分) 富林市 中 崎 深 雪

お前まだすることあると天の声
気がつけば浮き世の義理は野ざらしに
亡き姉もゴッホも愛でたひまわりが
黒猫をピカソと名付け待らせる
パソコンのトップページに亡姉がおり

第24回 和歌山県川柳大会

日 時 11月27日(日) 10時半開場 出句締切 12時
開 会 13時 句会終了予定 16時15分頃
場 所 和歌山県JAビル11階 TEL 073-426-8100
JR和歌山駅表口から向かって左側 徒歩2分
参加費 2000円(事前投句料1000円・当日参加費1000円・記念品・発表誌呈)
※ 昼食は各自お済ませください

事前投句・兼題及び選者 各題2句(雑詠は1句)
欠席予定者も事前投句は投句可。出席予定者も事前投句は投句してください。

柳 話	「川柳と神ほとけ」	日 野	恩 氏
事前投句	「雑 詠」	宅 保	州 謝
事前投句	「 癖 」	山 下	修 子
兼 題	「拾 う」	上 野	美 枝
兼 題	「休 む」	小 谷	雪 子
兼 題	「スタート」	矢 沢	和 女
兼 題	「い つ も」	菱 木	天 誠
兼 題	「有り難う」	河 内	天 笑

事前投句 10月15日(土) 必着

- ①事前投句は所定の用紙(コピー可)により投句先に投句料1000円(小為替等)を添えて送ってください。
 - ②当日出席予定者も上記による自前投句を投句料1000円を添えて送ってください。そのうえ当日出席の際、会場で1000円も納付してください。
 - ③欠席投句が出来るのは事前投句の2題のみで、兼題の出句は当日出席者のみ
- 投句先・問合せ先 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子 方
TEL/FAX 073-423-8930

主 催 和歌山県川柳協会

あの世いいのかいくら待っても帰らない
結局はゴールは出発点だった
きつちりと切手をはった事がない
ジイジイが居ますが如く語る孫
会う度に小さくなったと云う娘

(前月分) 西宮市 牧 瀧 富喜子

川柳塔の

川柳讃歌

(142)

木津川 計

貧富の差じわり広がる世が怖い

岸 本 宏 章

『下流老人』が昨年挙げた貧困に陥る五つのパターンです。①高額な医療費、②高齢者介護施設に定員や低収入で入居できない。③子供がワーキングプアや引きこもりで親に寄りかかる。④熟年離婚、⑤認知症でも周りに頼れる家族がいらない。しかも高齢者の九割が下流老人予備軍だという。加えて低収入の非正規労働者はついに四割を超えました。であつて安倍内閣の支持率は今上昇、産経調べでは55・4%です。宏章さん、僕は泣きたい。

二句入選秀を買ったほどの幸

鳥 ひかる

『今か今かやとと抜かれてホツとする』(山下凱柳さんの句、本誌六月号)の句意がわからず、あれかこれかの挙句「二休何に抜かれ……あつ! 歯を抜かれたのか!」と解釈したら、「違います。選で抜かれたときの喜

びです」とある方がご教示くださった。実作しない僕の不明を恥じたのです。

そんな緊迫の選考で二句も入選したひかるさんのよろこびが今はわかります。よかつた、よかつた。この句大野風柳賞に入賞された。

肩書きが無くなつてから友が出来

大坪 一 徳

四十代半ばの男がボツリと言つた。「同期の入社で部長になったのめいます」。有名百貨店でヒラの彼の煩悶が察せられた。千田琢哉が二十代に与えた「大人の流儀」で言う。「社長になる人間は新人社員の頃から社長の考えを持つている」「奴隷の延長線上に王様はなく、奴隷のリーダーだけがある」。

一徳さんも友情の育ちにくい競争社会を生きて抜いてこられての定年後でしょう。生涯学習の楽しさをぜひ。そこで友情が育ちます。

何処で何してもその他の中にある

坂 部 紀久子

この句のような何してもアカン男が確かにいます。寺山修司は「お芝居と同じように、人生にも上手な人と下手な人がいるのよ」と言いましたが、僕は自分を活かす人と活かさない人に分けられると。「その他」の人は流れのままで。思うに、頭角を現す人は自分の可能性を鍛えます。渥美清も小林稔侍も通行

人役から階段を登りました。藤山寛美も端役で認められました。紀久子さん、自分の持ち味を誰もが活かすように仕向けましょう。

あれども飲んで本音を言わぬヤツ

江島谷 勝 弘

桂米朝さんの「親子酒」のマクラです。「ちよつと盃を一つさしたんが縁で、初めて会った人が十年の近づきのようになる。なんやかんや喋り出して、おのれの仕事から家族や親類、月給から税金まで喋つた挙句、手エ握り合つて泣いてる奴がいてる。おまはんの娘、わいの伴の嫁にくれエ。(泣きながら) 不細工な娘やけど、もろたつてエ」。こんな男もいてるのに勝弘さん、厭なヤツがいますねえ。

泊まつて行け言つ人もなし父の里

松 本 昌

室生犀星の「小景異情」です。「ふるさと遠きにありて思ふもの／そして悲しくうたふもの／よしや／うらぶれて異土の乞食になるとても／帰るところにあるまじや」。そう、帰る所ではありません。大岡信はこの詩を解釈して「故郷は孤立無援の青年には懐かしくて忘れがたい。それだけに、そこが冷ややかである時は胸にこたえて悲しい」と。まして、昌さん、「父の里」は異郷と同じですね。

(上方芸能評論家)

自選集

小島蘭幸

絵か文字か夢か一歳が描いた
一歳のマドンナ七色の声で泣く
ペンギンの真似する一歳の天使
虫の声窓全開にして眠る
深傷だと思う平静だと思う

政岡日枝子

気を抜けばじわりと老いがみえてくる
夕焼けのその遠くから老いがくる
同じ根で同じ顔して長寿です
友達はみな長寿で面白い笑顔
せめて笑顔で老いてく日々を和らげる

三宅保州

何ほどのことやあらんと四股を踏む
あれも駄目これも駄目だと言う主治医
世間とや一足す一が二にならぬ
包帯を巻けば慌ててくれますか
四捨五入しても一本余る指

宮西弥生

めし粒のかけらに昭和期を生きる
男性の眼が落ちつかぬ水着ショー
自画像は一片剥いだ無の悟り
やっぱりねヴィトンエルメス眼がざらり
千年の樹齡触れてもよろしいか

蘭

八木千代

幼なごころに祖母が手がけた養蚕場
桑の葉を食べ柔いろの小さい虫
お蚕はやがて眩しい糸を吐く
透明になろうと吐いているのです
絶えるまで吐くのよ 死化粧だから

両川洋々

自爆テロアラアの罪を問ひ糺す
悔しいが美人の嘘は許そうか
シリコンを入れた巨乳を見が嫌う
百叩きの刑は覚悟でした浮気
自分史の余白でいくつ罪を詫び

板尾岳人

お寿司よしてつちりなを良し縄のれん
兄ちゃんのお嫁に行つた夏帽子
天皇の手柄八月十五日
メダカには相談しないで逝くつもり
僕の骨何処へ捨ててもいいんだぜ

林 瑞 枝

珍客のスビーチに湧いた大拍手
沈む陽の未練が綱にまだ残り
海を背に牡丹は神を抱いて咲き
長生きの猿が雄叫びする故郷
たましいは髪の手まであり生きる

奥 田 みつ子

パパに似た目元可愛い孫二歳
病氣より老いが怖いと九十歳
今朝の空佳いことあるかうろこ雲
パラリンピック努力のあとの限りなし
甲山に入る夕日に手を合わす

川 上 大 輪

電池切れやつと息抜き出来そうだ
常備薬なんです脳に効く言葉
ご意見は冷凍保存しています
行間にあった大きな落とし穴
頷いているがなんにも聞いてない

小 西 雄 々

遮断機も待つ身になれば長すぎる
燃えたけどいつも相手に通じない
火の息も珍しくない父危篤
性格が現れている喧嘩独楽
二人目の曾孫も抱いて有り難う

斉 藤 蒔

巣立つ日の翼へ風も味方する
まっすぐに歩むむくわれなくなつて
永遠の平和を探る太いベン
ドクダミの十字の白に癒やされる
踏まれ上手に生きて小さな花をつけ

新 家 完 司

チャリスマホ歩きスマホとガツチャンコ
何ごとを記そうとする稲光
ライバルのトランベツトが耳触り
たましいを宙に浮かせてひとやすみ
虹の橋超えて老人たちの村

津 守 柳 伸

三食昼寝無理はするなと云うけれど
手伝いに行けぬ真夏のお引越
ヘルペスの痛さ痒さも身に沁みて
熱帯夜10人10色の対暑法
自転車の軋み鈴虫だと思ふ

都 倉 求 芽

ご退後の事情 日本の事情
逢うてみるまでの予感があればこれ
まわり道しても疲れるだけの足
投句練る鉛筆襲う熱帯夜
暑さボケただでも呆けてきてるのに

もう一度大きな声で父を呼ぶ
 丹念に白を重ねて夏を着る
 葬送の曲はゆっくり海ゆかば
 霧が晴れここにも源氏物語
 やさしさに触れて五欲が顔を出す

土 橋 螢

西 出 楓 楽

今のうちに磨いておこう舌尻尾
 にじり口くぐればそこは小宇宙
 胸底にずっと漂う難破船
 記紀万葉の頃から恋は憂し
 膝痛を職業病という和尚

仁 部 四 郎

そこそこの貯金はあるが気が急ぐ
 終活を急ぐか父の歳を超え
 急ぐべきことの一つに墓まいり
 急ぐのはやめたはずでの写経帖
 死に急ぐつもりじゃないが蝉は鳴く

前 たもつ

きれいな町外国人にほめられる
 オリンピック地球支える国集う
 鉄棒の着地で決めた名勝負
 将来暗示ダイオキシンを置き去りに
 一日終え日記に添えるありがとう

第43回堺まつり協賛 誌上川柳大会

全題共選・各題2句

締切 10月20日(消印有効)

投句料 1000円

投句用紙 所定の用紙または便箋(所定の用紙に転記致します)

課 題

「パーツ」 高瀬 霜石・木本 朱夏 選

「跨ぐ」 鈴木 公弘・荻野 浩子 選

「先」 新家 完司・矢沢 和女 選

「配る」 小島 蘭幸・河内 月子 選

投句先 川柳塔さかい 河内 天笑 宛

〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3

TEL/FAX 072-278-4706

第25回 枚方市民川柳大会

日時 10月15日(土) 午後12時開場

場所 メセナひらかた 2F
 (枚方市新町2丁目1番5号)
 TEL 072-843-5551

宿題 「訳」 小霜 真弓 選
 「悪」 正信寺尚邦 選
 「孤独」 中岡千代美 選
 「モラル」 小金澤貫一 選
 「祭り」 柴辻 疎星 選
 「結ぶ」 藤村 亜成 選

席題なし・各題2句

締切 午後1時

参加費 1000円(発表誌呈)

欠席投句拝辞

連絡先 池田 武彦

TEL 072-859-1917

主催 くらわんか川柳会

今年三月、川柳塔なら有志での吟行は、近鉄上六構内を出発して、生國魂神社を経て文楽座、法善寺そして道頓堀まで約二時間のぶらり歩きは高齢者にぴったりのコースだった。生玉さんには井原西鶴、高津の先輩織田作之助の像らが何年か前に据えられ、私も初めてであった。とりわけ鶴橋育ちで、高津へと通学していた私にとって織田作は懐かしかった。高校一年の頃だったろうか、一気に読んだ「青春の逆説」には鶴橋駅、上六駅近辺、清水谷女学校と女生徒ら登場し、一層親近感を覚えた。そして三十数年を経て、すでに8ミリ映画の趣味にのめり込んでいた私は「織田作」を撮ろうと「青春の逆説」わが町」等に出てくる上町界隈、源聖寺坂、口縄坂等をロケハンして歩き、その際坂の画面に句を入れたらーと思い、帰途書店に立ち寄り出合った本が「なにわ川柳この一句」「川柳に見る大阪」である。

それが因で或る日、妻が勝手に申し込んできたのが、NHK川柳教室で講師は橋高薫風先生であった。迂闊にも何も知らずに入門した私だった。以来織田作映画は断念、それでも吟行や各川柳大会をビデオに撮ってきたが、見て頂く機会もなく、十年二十年を経過し画面の諸先生諸先輩はほとんど故人となられて、「この人だーれ」と問われることは必定。これを賞見期限切れと言う。かと言って私の脳裏にはあの方の人が鮮明に刻まれており、これらテープを断捨離など出来る筈がない。

賞見期限切れたビデオのお蔵入り
法善寺ふと織田作に逢えそうぞ
デカダンの風吹きぬける法善寺

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

地球儀を回すと海がこぼれます
核のない夜明けを鳩は待っている
戦場を駈ける未来も過去もない
親も子も孫も馴染みの街の医者
美しい奥さんなどとあほなこと
骨壺をせともの市で見つけよう
哲学も文学も酔う屋台酒
金のない男が軽い北新地
駅前のおどんでノルマ追っかける
好き嫌いわたしにもいるいやな人
意外にも第九を歌う友がいる
ご近所に内緒でメロン食べてます
釈鬼遊わが戒名に惚れている
自転車に乗れます職を下さいな
吉兆も飲み屋も同じ靴でゆく
冷やめしと固いこうこが好きやねん
愛国心よいがポリウムさげなさい



西 出 楓 楽 選

佐賀県 真 島 久美子

人生を語ろう夏のラーメン屋
一流の話に耳が遠くなる

わたくしの胸に蟬時雨が宿る

モノトーン私はここで呼吸する

辛い日の空は見えないダンゴ虫

許したらカロリーゼロになる言葉

瀬戸内市 東 横 ますみ

あの角を曲りきつたら千の風

明日のこと問わぬつもり歩数計

三角がまるになるまで追いかける

音もなく少女揚羽になりました

疑えば指の先から冷えてくる

プライドも野心も盛ってある名刺

松山市 郷 田 み や

返信は冷めないうちに出しておく

贈るのが好きだから貰うのも好き

輪の外にもあった私の指定席

矢印の通り歩いたはずなのに

ひまわりの迷路ゆっくり進みたい

ヒロシマを伝えていくと澄んだ声

松山市 神 野 きつこ

月の子か白い夕顔そつと咲く

エネルギーすべて吐きだし夏の蟬

向日葵も水を欲しがる八月忌

八月になるとはだしのゲンを読む

夕暮れの打ち水嬉し下駄の音

処女作が次の扉をノックする

貝塚市 吉 道 あかね

四万十の水が好きだという蛍

井戸水に瓜も西瓜も待つ帰省

桃を剥く桃の匂が手に残る

淋しさを隠す笑顔もあるのです

売り言葉買って本気になりました

汗掻いてかいて神さま振り向いた

大阪市 森 廣子

ローカル線で向日葵畑抜けて行く
しなやかに咲いてしぶとい百日紅
追って来る罵声は斜め後ろから
陽炎の向こうで過去が行き来する
奇跡が一つ落ちていました森の中
過去は過去囚われないで前を向く

大阪市 田 中 ゆみ子

メタボの裏に少年期の腹ペコ
薬指指輪はすただけのこと
また会える丸い地球だから会える
味噌汁の味ひとつにも家の味
することがない図書館に溜まる
酔うていたことは理由になりません

箕面市 大 浦 初 音

化粧して今日のわたしにスイッチを
口角を上げて笑顔のレッスンを
成りゆきにまかせゆつくり下り坂
大空を飛んだ夢みる籠のとり
いらいらが募ると角が生えてくる
引き出しの中には過去が眠ってる

沼津市 鳥 沢 無 午

人生に貨物列車が通過する
うるささを文字で表現できぬ朝
競争に負けると楽が手に入る

猫ブーム終われば猫が化けて出る

自衛隊ごっこで済めば有り難い
哀しみを担う愚かなナルシスト

鳥取県 橋 谷 静 江

死ぬまでは何かを学ぶ気構えだ
冥土まで学んだ事は持つて行く
部屋の中模様替して喧嘩増え
気持良くめざめた朝に仲直り
楽しんで作る野菜は味が良い
幸せは今です冷えた西瓜食べ

岩出市 村 中 悦 男

もの忘れなのに昔を生き生きと
猛暑にも耐える野草に励まされ
恙ない日々でありたい共白髪
クラーに憩いながらの五七五
笑顔出る程の小さな欲に生き
父母がそこにおいでかハスの花

岸和田市 宮 野 みつ江

山々の向こう木霊はいったまま
終活をする少しづつ少しづつ
思い出も日記も全部燃えるゴミ
還暦のまま仏壇にいる仏
盆三日仏五人と賑やかに
お経よりあなたの好きなジャズナンバー

西予市 西田 美恵子

塩パリパリと母の生き上手
君となら沈んでみたい青い海
外は雨ゆつくり朝寝楽しもう
あの灰汁がこんなに旨い味を出し
燃えかすがまだ情熱は抱いている

松山市 柳田 かおる

幸せつて窓辺に花を咲かせてる
頑張ったからより深い満足度
面倒だと思える時もある絆
重箱の隅っこオナナ対おんな
理不尽へあまりカッカとしなくなる

福岡県 本田 さくら

田舎には噂の好きな風が吹く
美しく老いたし風の吹くままに
お隣とうちの雑草背くらべ
バイク音夜のしじまをかき乱す
初盆で遠い親せき近くなる

沖縄県 宮 すみれ

七色の夕焼けを呑む美らら海
汗だくで墓石清め孫はしゃぐ
いそいそとスカートゆらり恋の町
大空に飛行機雲がラヴと書く
ゆかた着て赤の花緒の自慢げた

シドニー 坂上 のり子

さよならと言えず又ねと去るベッド
虚しさに泣きつつうどん食べている
あなたに会えた喜び神に感謝する
あなたが生きた証し川柳塔にある
マイウエイ走り続けて燃え尽きる

塩竈市 木田 比呂朗

秋空が暫し腰痛忘れさせ
グラスからお猪口にかえる秋最中
逃げるにはとても便利な丁寧語
ブライドを背負う年金軽すぎる
アメリカもドンキホーテを推す民意

男鹿市 伊藤 のぶよし

風はどうあれ回るしかない風車
ソバの花揺れてふる里過疎にする
年輪のひだに馴染んだ人の道
晩学もよし恋も亦よし今生きる
大波小波やつぱり来たか老いの波

つくば市 嶋本 喬

アベノミクスいつになっても道半ば
お気持ちは重く受取め冷淡に
保育所がなくて騒げた昔の児
梅雨明けも心は晴れぬ痛告知
いつ頃か黙って癌が居候

横浜市 巖 田 かず枝

冷房の部屋で老犬高軒
思いやり嘘をつくのもありですか
たとと褒め孫の心を磨いてる
勝者には拍手敗者に励ましを
子も孫も普通でよいと思ってる

横浜市 川 島 良 子

最新かもしれない握手に手を添える
都市砂漠空っぽにする盆休み
グジュグジュと男 スパツと斬る女
孫婦り暫くわたし眠り姫
一番の味方は母の笑顔だろう

佐渡市 高 野 不 二

寝ころんでテレビで花火見る気楽
眠れない眠れないんだという昼寝
叱られた話ばかりの父の忌に
西瓜一つ入れて冷蔵庫をふさぐ
試供品ばかり吞んでいる元氣

豊橋市 藤 田 千 休

未来への扉を開く試作品
遠雷が梅雨の幕引き買って出る
九条の人氣を妬む安保法
占いが僕の未来を決めつける
衣食住足りて煩惱また増やす

大阪市 柴 本 ばつは

このわたしやがては米寿でないしょ
欲ばって生きているのと違います
パンくずで鳩を集めている孤独
中間色きらい原色派のわたし
派手はでが筆筒の中で大あくび

大阪市 高 杉 力

猫好きの膝に子猫がやってくる
要介護抱え二次会欠が増え
言うことを聞かぬパソコンお前もか
長いこと北新地には行っていない
穏やかな下り坂では花を愛で

大阪市 中 島 栄 子

この点滴でついでに頑固治ったら
氣は付くのに老いたお尻が上がらない
MRI棺の中ってこんなかな
パパ残ったら一番悪い言う娘
介護するされるお互い思い遣り

大阪市 平 井 美智子

缶詰を開ける 微かに秋の風
淋しさが行ったり来たりする日暮れ
ワタクシの老いに出会った坂の町
好きだっただったとみんな過去
乗り換えの駅から雨になる氣配

大阪市 平賀国和

初収穫ゴーヤ料理で元氣出す
楽しみつつ五感養う趣味の会
旅に出て錆びた五感に活入れる
地震慣れ三や四では驚かぬ
難民の選手に拍手リオ五輪

大阪市 宮村満寿恵

空っぽの脳でもたまに噴火する
夫の香り残る帽子が捨てられず
平凡に暮らせる今を只感謝
はらはらとさせた子供も巣立ちゆき
平凡を絵に書いてきて喜寿となる

大阪市 横山里子

世迷い言脳の誤作動治まらぬ
亡母の味女系家族の夕餉とき
グチ聞いて聞いてもらって茶が渋い
胡瓜もみ憎い男もすでに逝き
捨身技見せてゴキブリ逃げて行き

河内長野市 中島一彌

ストレスでモグラ叩きの腕を上げ
天の声聞き逃すまい耳掃除
生きている意地とプライド引っ下げて
置いてくよ牛歩戦術拗ねた子に
一休みつい口癖がどっこいしょ

河内長野市 森田旅人

守る子に守られると知るライン
守られる位置情報の塾帰り
電動でお出かけ増える車椅子
妻の座を守る錘をつけかえて
張り合った人輝いて同期会

堺市 梅木澄空

一石二鳥今年もゴーヤ良く育ち
後期高齢深い付き合い億劫に
リハビリと趣味時間なかよく半分こ
婆ちゃんとはときどき宇宙人みたい
墓参り猛暑に負けて秋に兼ね

堺市 小林若芽

盆提灯くるくる母はもういない
老いた身に飴も返ることもなし
果すべきことを果してまだ遣る気
喜びはこんな老いにもある出逢い
よく光る蛍を胸に棲まわせる

堺市 羽田野洋介

まあいいか年相応のおしゃれなら
ほんとはねなんて言われて身構える
マスクの下野心の影がちらちらと
老いの意地まあだまだまだ宿す夢
時間だけはたっぷりゆとりあるんだが

高槻市 三谷白黒

あれとこれそれで通じる夫婦です

弱輩の役人様に頭下げ

ポケモンと座敷わらしが居る日本

回覧もネットを使う時代です

とうさんへ妻は部下ではありません

豊中市 荒木郁子

虫刺されアロエの出番常備薬

わたしにはあしたあしたと言う希望

一度だけ手にしてみたい万馬券

末長くあなたと薬お付き合ひ

遺産分け切口上に心冷え

豊中市 上出修

怨霊もみやこ恋しや京の盆

もしかしてドラマあるかも終電車

前頭葉グーチョコキバーで活性化

AIも五感にはまだ追いつけず

平和へのオバマのゴールまだ遠い

箕面市 中山春代

目をつむるガラスの床の観覧車

脱いだり着たりエアコンが悩ましい

思いでの輪郭線がにじんでる

手作りの棚に亡父が今もいる

カナカナの初鳴き小さい秋届く

大阪府 小栢こずえ

物欲も食欲もありまだ生きる

目も耳も元気で困る時もあり

世話かけず自分のために今日も生き

年寄りに見られたくない意地を持ち

齡問わず女あやつる化粧品

大阪府 神野千恵子

雲と遊ぶ痛みを少しずつ預け

おしゃべりで脳に酸素を送ってる

札束に縁がないまま日々平穩

げんなりとしながらもなお見るテレビ

シルエットだけで中身の無い施策

大阪府 畑中節子

池の面に鴨ひとすじの水脈を引く

庭の草一雨ごとに気負い立ち

老いの脳ストレス詩にして生きる

農道に四頭五頭と鹿の群

散歩道歩幅ゆるめる萩の群れ

尼崎市 清水久美子

味わって戴く山海の珍味

戻りたい戻りたくないプチ家出

4等じゃ長者になれぬロト7

ことごとくちぐはぐになるブルーな日

悪夢から覚めてそれから眠れない

尼崎市 永田紀恵

三田市 馬場貴美江

短命と卦に出ていたが卒寿越え
百薬の長を理由に酒びたり
好き嫌いどちらにもある女偏
失恋をチャンスと思ひ嫁に行く
言い訳の矛盾をついて疎まれる

川西市 日野岡和之

歩くだけ生命を拾う万歩計
疲れたと言わぬお日様お月様
おもいやり互いに育て共白髪
ふだんから出入りは自由勝手口
盆供養祈りの心花束に

篠山市 長谷川善輔

亡き妻の帰り待ちつつ盆飾る
鬼も蛇も出ない世間もつまらない
面白きこと多い世に背を向ける子
世渡りの下手な奴だが長生きす
無住寺にボケモン現れにぎやかに

三田市 九村義徳

核心に触れるとサラリ身を躲す
じつくりと構えてチャンス見逃した
父さんを信じ乗ってる縄電車
旧友に会っていつもの縄のれん
土つきの大根先に売れていく

打ち水は遠慮のいらぬ井戸の水
坪庭に狸がドンと構えてる
今日の夢明日へつづけと夢をみる
その道の覇者たち競う甲子園
泥と汗球追いつづけ勝負あり

宝塚市 太田としお

真つすぐに生きて結果は気にしない
干し物を見れば家庭がよく分かる
選挙戦一番恐いスキャンダル
真正直に生きて悔いなど残さない
テレビチャンネルやつぱり観てる時代劇

宝塚市 丸山孔一

カラスさん食事の後は片付けて
舌出して犬がエアコン催促す
床屋出て風爽やかに肌包む
ガラケーをスマホに変えてさあ大変
北海道ヤシの木茂る日も来そう

奈良市 尾畑なを江

幸せの尺度だんだんずれて来た
自分にもたまにご褒美うなぎ好き
シンプルな暮らしに慣れて心地良い
手造りのジュースで朝のさしむかい
リモコンと時計の増えたウサギ小屋

香芝市 山下 純子

孫が来る子供イス出しスタンバイ
ジカ熱をサンバのリズムはじき出す
少しウン混ぜて話に箔をつけ
水墨の絵から五感を呼び覚ます
久々の旅で五感が開花する

和歌山市 平田 元三

この汗が客に染みない筈がない
ベテランの過信が邪魔になる進化
糠床のリレーを終えた母と妻
蔓の端親だと知らぬ薩摩芋
しんどいと逃げたら身体鈍るだけ

紀の川市 山東 日出男

ひと夏をハイジの山で過ごしたい
政治家は選挙のたびに汗をかく
うららかな空をドクターヘリが行く
折り合いをつけて病と同居する
何ゆえにツルはヒマラヤ越えて行く

和歌山県 森下 よりこ

メリハリをつけて夏場の畑仕事
車間距離微に違っておつきあい
どんなだろう「徹子さん」の衣装部屋
読んだことないなあ日本国憲法
廃屋にとぐろを巻いている葛

鳥取市 田中 天翔

熱中症は嫌図書館に避難する
文学の森の入り口探す日日
葬式で赤ちゃんの声ホツとする
デコボコも隠してくれる和服好き
住職に生きてるわたし見てもらう

鳥取市 津村 律子

幸せは二人で生きていることだ
夫を包む大風呂敷がまだ縫えぬ
青田の風が厨房の窓流れ込む
神も仏も皆が集まる夏が好き
爺と婆準備万端お盆玉

倉吉市 中村 毅

相撲好き母は黄泉でも枡席か
若者がポケモンGOで徘徊し
物忘れ暑さの所為にしています
猛暑日も鳴かねばならぬセミだもの
強がれば往往にして墓穴掘る

米子市 生田 和之

イチローも人の子らしい今日もゼロ
この夏は自炊の麺でしのぐ暑気
夫には内緒の話知れわたる
薬害の最たるものに飲み忘れ
リオ五輪命も懸けて行くマニア

米子市 川 本 美津子

安来市 原 煩惱児

悩みあり亡母に相談墓参り

認知症なのかコスモスくるとい咲き

人と蟻甘い誘惑大好きだ

暑いねえ毎日話す合言葉

カレンダーめくると秋が見えて来た

松江市 中 筋 弘 充

時々はいい事も言う酔っぱらい

義母を見るノンアルコール飲みながら

アフターに責任取らぬ美人の湯

マドンナが出るなら出ようクラス会

カタカナ語やたらに喋る人嫌い

松江市 山 根 邦 代

味噌汁は飲む点滴と聞いてから

猛暑見舞貰ってからの力湧く

食欲はおちず気力は落ちそう

団扇から強弱ありの風やさし

雨乞いをしたい干物になりそう

雲南市 菅 田 かつ子

皺しわの手に幸せを掬わんか

炎暑です花と昼寝をしています

手抜きしてちよっぴり自愛しています

子が便り呉れぬ元氣と思わねば

無理をしてなりませんよと無理をさせ

独居老愚痴も不満も常のこと

ローカル線廃止抵抗無力感

内閣改造憲法論議超不安

盆が来て迷うお墓か散骨か

帰省子と言葉交わさず盆二日

瀬戸内市 片 島 秀 月

淋しいと言えず気楽と笑う古い

良い人と言われる度に肩がこる

長らえて妻と漫才して暮らす

俵せだ八十路を歩く靴を買う

馬鹿になる薬を飲んで今日も生き

府中市 岸 田 武

宿の下駄居酒屋あれば立ち止まる

真夜中に笑いが通る旅の宿

梅雨明けのニユース冷奴が旨い

納得がいかなぬ眼鏡をかけて見る

妻は留守すこし寄り道して帰る

福山市 藤 後 卓 也

古傷が風化許さぬ原爆忌

生かされて散る日を知らぬ水中花

砂時計さかしまにして聞く計報

横文字のカルテ持参の独り旅

芸のない猫と一緒に大昼寝

三原市 笹重耕三

ヒロシマの空は真つ青です真夏

八月の墓標へたつぶりの真水

特別な月です八月の祈り

図書館の椅子でまったりする真昼

全て日曜日でした私のカレンダー

三次市 伊藤寿子

帰省客昔の顔が消えていく

体調へ血圧計を離せない

認知症接点を見た日の不安

収穫の喜びをみる稲たわわ

生きる力習った方の計報聴く

山口市 増田めだか

オリンピック声援送る熱い部屋

ゆっくりと湯槽で明日の夢を描く

湯の元を入れて夫婦の露天風呂

暑いです涼を求めてお買物

山動き都議も慌てる忙しさ

宇部市 高山清子

訪れぬ墓が遺跡と化していく

超人気女性都知事は期待され

一呼吸おいて飲み込む売り言葉

辛辣な怒声中身にある情け

立腹を横にねかせる年の功

山鹿市 柳田白沙

あなたへの追悼の句しか歌えない

照れかくしその暴言でみなバレル

誰よりも黒子に徹して生きた方

君忍び川柳塔を探し見る

山鹿市 中山好打

災害の規模も年々太くなり

気はそぞろ所々のにわか雨

この暑さ乗りこえやつと涼を見る

クーラーも扇風機も大ハッスル

那覇市 前川真

バナマ帽かぶり富裕にまぎれ込む

自分史の裏の帳簿は胸の内

地団駄を踏み続けたる粘り腰

不摂生糾した人が先に逝く

豊見城市 下地順子

朝一の空気のうまさ染み渡る

手前味噌ギョツとつまった母の味

勝利へとフェンスを囲む人の波

同期会クスリの数で自慢する

沖縄県 梶キヨ

添え置きのパットボトルが命綱

限りある命のパトン末代へ

優勝は米券二枚ボウリング

染筆の暑中見舞に句を添える

沖繩県 島 尻 卓

来賓の席順いつも気を遣い
無意識を鏡に映し覗きたい
気合い入れ年金暮らし乗り切
る気
出来るのか鋭い目付き稽古中

沖繩県 高 良 秀 光

自己投資そこに夢あり青い空
スポーツカー法定速度守ってる
孫たちはスマホと会話しています
物忘れ置いた所がわからない

札幌市 斉 藤 宏 子

大の字に手足を伸ばす終戦日
過去削除新たに向かう高齢期
思い出の昭和の小川霧の中
一碗で生命つないだ八月忌

札幌市 富 永 恵 子

八月忌九十歳が語り継ぐ
登山服秘湯の宿で月と寝る
人脈の群からもう苦い水
活気づく朝市楽し荷が重い

登別市 小 林 碧 水

盆提灯のためば秋の足音が
今日は雨お陽様休暇とりまし
た
八月の記憶のダムが水枯れに
聞こえないふり難聴も悪くない

弘前市 高 森 一 吞

夕陽落ち海岸染める露天風呂
カーナビは横で居眠りして困
る
盃に横槍入れてまづい酒
眠れずに星を眺めて歩いてる

弘前市 吉 川 ひ と し

張り詰めた空気に軋む不整脈
帽子にマスク防犯カメラ追い回す
もうすでに二人暮らしのブロである
休肝日夕餉のリズム狂い出す

上尾市 中 村 伸 子

水源の水は溜まらず梅雨が明け
五七五ピタッと決まる夢の中
作句には邪魔にならないピアノ曲
十二時の時計は少しうるさいなあ

松戸市 山 下 明 子

興にのり応援してる我忘れ
目いっぱい楽しんだ後死んだふり
朝焼けへボンボン咲く蓮の池
朝顔もゴーヤも夏のカーテンね

東京都 高 岡 弥 生

体調に気をつけていて風邪をひく
夏休み思い通りに休めない
たまには力を抜いて生きてみて
夏の夜花火の音でワクワクし

八王子市 川名 洋子

大の字で寝る児に大器期待する

空っぽの財布残して夏終わる

梅雨明けてビアガーデンが招く夕

退屈なんだね電話が長すぎる

静岡市 渡辺 芳子

最後の地山鹿暮しにぐちはなし

弟を葬って知る人の情

生きている喜びみつけれ生きてゆく

何時の間にか末期高齢者になりました

江南市 脇田 雅美

尺玉に点火して咲く大輪花

終章に句読点打ち安堵する

富士額白い襟足女っ気

糸瓜のつる切って雫を化粧水

鈴鹿市 小河 柳女

夏帽子発光しつつ海へ向く

この世からしばらく消えている時間

明日の匂いをもつてくる良い友だ

魂が落ちないように掌を合わす

大阪市 磯島 福貴子

子から電話先ず確める合言葉

入選句呼名する時声はずむ

六月にあつてもいいね川の日が

ビギナーズラックの句会有頂天

大阪市 梅里 南天

殺人のニュース染み入るかき水

デパートの美人売り子におだてられ

オタクの子ポケモンGOで活気づき

吃音のヒゲラシの下ひと休み

大阪市 橋本 典子

諦めも適度にできる年になり

誕生日薬の数も一つ増え

家事だつて週休二日断行す

年重ね見えてくるもののあるを知る

大阪市 前川 善之

三千本見せぬ努力の新記録

人は皆物の命を載いて

美味しいと笑顔にさせる魔法術

丸い月丸い地球に丸い星

大阪市 松田 聡

マスコミに圧力かけている政府

片寄った報道めだつ一流紙

最近話題に出ないマイナンパー

待つ身にはゆつくりすぎるレジの列

大阪市 吉田 知之

本紙より重い広告ごみになる

亡妻の笑顔読経にふっと浮く

商店街自転車遠慮何のその

苦手でも新しい道がんばろう

大阪府 高木道子

畑焦がす入り日に向日葵首垂れ

この夏も蟬興行の棧敷席

行きずりの香気や僧の夏衣

浴衣着のマニキュア映える素足美人

泉大津市 助川和美

死んでからメロン供えて貰っても

朝顔の絵手紙暑さ忘れさす

回覧板隣家へ行くも日傘さす

こきつかわれていると思えば負けになる

交野市 田岡久幸

断りをいれるしんどさ夏の宵

相談もあると言われて行く法事

まあこんなところやがほくの呪文です

横綱のケンカ相撲の見苦しさ

河内長野市 楠本和代

生きてるよ蟬がガンガンアピールす

フー暑い違う挨拶したいけど

映画館涼しい場所で熱くなる

草ひきの戦い疲れ膝撫でる

河内長野市 松浦正子

孫という子分従え食事行く

クシャミでも孫に一枚まとわせる

初仕事挨拶決めて家を出る

孫帰り疲れたわねと緑茶飲む

河内長野市 穂口正子

胸がきゅん弾む心は誰のせい

電話口あなたの声に痺れるる

見くびって落っこちちゃった弥次郎兵衛

懐メロのスローテンポが昭和色

堺市 近藤治子

山の宿星のシャワーを浴びて寝る

晩学で心の畑掘りおこす

深い愛振り切って行く反抗期

宇宙船地球の病気見えますか

堺市 大和峯二

煩惱を捨てきれなくて未熟者

雑草と悟る心の平静さ

川柳と書道で過ごす休養日

勝てそうでやっぱり負けるタイガース

豊中市 荒巻夢

蟬螂の斧振り上げてデモ参加

次々と昭和一桁去ってゆく

傷つくのがいやで恋など出来ますか

ドアノブに思わずあちち大西日

豊中市 貝塚正子

頼るのは神か悪魔か大一番

友よ今どうしているかと墓に問う

新しい景色に期待目の手術

新しい瞳で北の星を見る

豊中市 源田啓生

猫の眼にも人の世もまた変り過ぎ
天道に任せながらも不足言う
飯の世を飯の身ながら腹も減る
先ず笑う幸せ後からきつと来る

富田林市 小出修三

羨まし夫の昼寝の高いびき
先輩のライバルになる恩返し
ためらった返事に気まずさが残る
茄子トマト送り笑顔の礼貰う

寝屋川市 岡本 勲

買物が趣味の女房の荷物もつ
浴びるのは酒とシャワーと妻のグチ
美男美女避けて通れぬ老いの坂
人生まだ途中なんですえん魔さま

羽曳野市 磯本洋一

通販のサブりを飲んで医者通い
3000本汗と涙の神戸っ子
マイナンバー何に使うか忘れてる
熱中症庭の蟪蛄仲間入り

羽曳野市 仲谷真一

健康で毎日笑い暮したい
一円足らず万札くずすむなしさよ
ちよっただけ株の配当こづかいに
ここ一発ふんばりきかぬ豪栄道

枚方市 坂本ミヨノ

暗くなるセミも鳴きやみ急豪雨
ほろ酔うて今年の盆も踊りつく
夕焼に忘れた想い燃え巡る
神様が病の迷路走り抜け

箕面市 寺井柳童

大阪締め川面行き交い盛り上る
忘れない父の大きな肩車
電柱の陰を伝って猛暑避け
作り手の苦勞伝わる夏野菜

八尾市 田邊浩三

禁酒日にブランド入りのケーキ買う
寝言でも怒鳴っていたと女房いう
耳鳴りか蟬の声よと妻はいう
会社から電話あったと残業日

八尾市 前田紀雄

人生は各駅停車面白
ガス屋さん電気屋さん同性婚
晩成を日記に残し締め括る
ポケモンGOスマホが街を闊歩する

神戸市 興水 弘

酒やめる信じてないよハイつまみ
傷口の奥で悔やみが風を待つ
朝ドラに戦後を重ねて母偲ぶ
口が過ぎ炎を止める氷水

神戸市 近藤 正

小野市 田中 辰夫

おがら焚き仏間賑わう盂蘭盆会
大空を我がもの顔に行く火花
終戦忌知らず喧し蟬しぐれ
台本がないから楽しリオ五輪

神戸市 細川 花門

篠山市 佐々木 勇

娘から祝い貰えば倍返し
坊やにはママの寝息は子守唄
お雛様脚はしびれていませんか
絵手紙をはみ出しているかき水

神戸市 山根 弘子

蟠りとけてのびのび深呼吸
幸不幸みんな仏のプレゼント
暑さ負け今日もとぼとぼ一句読む
海ゆかば心にささる終戦日

尼崎市 藤田 雪菜

一言を余計喋って溝ができ
梅雨明けた先ずは何からしようかな
窓際で蟬と風鈴聞きあい
じゃこ食べてます転んでも大丈夫

伊丹市 平井 富夫

痩せがまんどこも痩せないこの身体
土用の日ウナギもどきの我が家です
奢るって半信半疑企みは
性欲が枯れた夫婦が手を引いて

激流に転がる岩も我を捨てる
癒されぬ地震百日慰霊祭
女子力のバワーアップで新時代
母親の笑顔見つける羅漢仏

うっかりとしたらあかで締切日
どっちから撮っても同じ老いの顔
デカンショも日本遺産の香りして
どっち向いてもよく生えているなあ雑草

篠山市 永井 かほる

墓掃除御無沙汰詫びて丁寧
千の風胸を張れよと背なを押す
寺の鐘聞くととなしに聞く日暮
ひとり言笑ってくれる仏間の灯

篠山市 藤井 美智子

病には負けた豪力千代の富士
切磋琢磨ライバルがいる友が居る
うっかりを自問自答で老いの日々
一病を持ってばちばち老い姿

三田市 幸田 厚子

足の指ネールで飾る五輪色
あと五分値引タイムのパラダイス
ご当地にアイドルつくる観光課
公園デビュー先輩ママに気を配る

三田市 宗 福 清 司

ワード文書に写真貼り付けまなならぬ
ばっさりと名刺の処分むつかしい
終活開始ばっさりと処分無理
何しても目立ちたがり揉めるもと

三田市 谷 口 修 平

品薄の鰻を鯨加勢する
大根も親父も昔辛かった
ポイントは中の味よりパッケージ
手放すの惜しい誤配のお中元

三田市 辻 開 子

クーラーの助けを借りて暮らせてる
暑すぎて脳が献立拒否をする
夫婦共末っ子同士任せ癖
部屋ばきを若向きにして足軽い

三田市 東 内 美智子

麦トロの味はやっぱり母のもの
廻るすし皿の合計目も回る
照れくささもろに感じた息子の手
墨染衣すっかりなじみ寺の息子

三田市 村 田 博

足腰を鍛える為に寺参り
十円玉いっぱい持って寺参り
願い事妻にも内緒呟いて
富士は無理有馬富士なら登れるぞ

三木市 山 口 久 子

夏休みわが家ひ孫の集会所
暑さ負け入院したが注射いや
趣味多くどれも中途で気に入らず
好きな食事するのはあとまわし

奈良市 高 橋 敬 子

好きな木に水多くやる炎暑の日
一日をクーラーあてに生きている
空に向け命いのちと蟬騒ぐ
子育てをやつと終えたら犬を飼い

和歌山市 北 原 昭 枝

胸に手を懺悔をしては生きている
あの時の赤いカンナが今盛り
襟足に汗が滲んだ盆おどり
たそがれに誰を待つのか酔芙蓉

鳥取市 大 前 安 子

癖字でも心をこめて書くことに
すれ違う人の様から気付くこと
束の間の放心をさす星の下
一枚のジグゾーパズルまだ握る

鳥取市 奥 田 由 美

幸福ゆき切符持ったがまだ着かぬ
猛暑の日仏花に氷浮かばせる
ウィッグが悪戯風と逃げだした
Tシャツと詛りで闊歩バリの街

倉吉市 大羽雄大

募金箱持つてる人を避ける道
雨天順延決定早い方が良い
はしゃいだ分しっかり付けが追ってくる
酒のない夕飯あつけなく終る

倉吉市 岡崎美知江

その先の苦勞話はまだ言えぬ
B型と言えば話題の的になる
大木を育てた根っ子ほめてやる
解決は成りゆきまかせ人まかせ

倉吉市 田中紀美恵

ちゃっかりと夕飯どきに友が来る
妻亡くし父の背中に寒い風
風の便りとなと届かぬ達者かな
あめ玉の一つが心和ませる

倉吉市 田中けいこ

台風はいきなり襲うことはない
草刈りをしたいが蜂が飛んでいる
無洗米洗っちゃったよ無洗米
孫いない百均孫の手を使う

倉吉市 堀かずこ

泳いでるオリンピックのたまご達
ひぐらしの鳴き声秋を呼んでいる
秋風がずっと私の頬なでる
老いてるが心はいつも若いのよ

倉吉市 宮田風露

心中の埃を払う座禪組む
やっと今愚痴る余裕が出来ました
こだわりが道を塞いで進めない
熱中症気をつけようと広報車

境港市 中井虎尾

酒飲めば安倍顔敗けの政治論
歩き着きや俺は何しにここに来た
華のリオかげでこそそそ悪いやつ
物忘れいやな事だけわすれない

米子市 池岡たけし

年を取り来た道見れば薔薇一輪
青い色どこまで続く秋の色
疑えば家族の隔たり招くだけ
間違いを正す努力の家族愛

米子市 田村周子

親になり初めてわかる深い愛
七夕に宇宙にかける夢のせて
がいな祭踊る姿も今様に
人間ドック今年一年保証ずみ

米子市 永井三津子

残されて亡夫と亡母呼ぶ芋殻たく
マイナナーバー老いが不安でまだ保留
爽やかさ塗り潰してる厚化粧
絞め方が緩いのかまた午前様

米子市 野川宣子

宇宙へ船出うれしい顔が大ニュース

窓開けて福の神様待つている

独り居の安否気遣う窓の外

お祭りの盛り上げ役はお酒好き

米子市 見山温子

いつ迄と自問自答の野良仕事

息子より嫁をたよりに老いていく

希望のない農を継げとは子に言えぬ

夜明空月はほんやり日はのぼる

鳥取県 飯野菖子

人生も耐えて命の花が咲く

丸い月うっとり母の想い出が

この指が何千本の草を取る

消しゴムで消せない罪と生きている

鳥取県 門村幸子

待たせるより待つ方が楽待ち合わせ

水仕事似合う手になり指太い

六十五歳おしゃれしないと老ける歳

好きな席選り放題の映画館

鳥取県 児玉規雄

活字より空気を読めと孫は言う

ニュース聞きテロップ読んで確かめる

週刊誌読まずに分かる車内吊り

図書館は冷暖房に昼寝付き

鳥取県 下田茂登子

一人居に夜中の電話怖いこと

八十歳網戸カーテンまだ洗う

これ内緒昼食時にもビール飲む

一人寝の怖さ何年続くやら

鳥取県 田口清帆

沖繩の辞書に時効のない戦

美人らしい電話の声に話し込む

バイキングあれもこれもと忙しい

ご都合の悪い時には馬の耳

松江市 相見柳歩

メビウスの輪になりたいねふたりして

挑戦を続ける王者逃げるまで

似合っても認めてくれぬひともいて

人生を終えてもゴールまだ来ない

松江市 福岡左余

二メートルひまわりが笑む休耕田

記念碑に思い出を抱く校舎跡

湧き上がる剛氣卒寿の土根性

長生きの良薬だぞともの忘れ

出雲市 黒目英男

七転び八起き人生落ちついた

年重ね少し変った趣味嗜好

蟬時雨平和な日本いつまでも

一度切りだから人生大切に

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

のんびりと行こうよ晴れる日も近い
赤ワイン独りで飲んで愚を溶かす
もう逢えぬ親友にもまたネ笑顔する
年金の範囲で暮らしえない

玉野市 片岡 富子

真夏日に頭回らぬ事ばかり
草取りに今日もがんばれカラス鳴く
花車な嫁巨漢息子の影に居る
オリンピック夏日のテレビ支配する

岡山県 高岡 茂子

夜市だけ子供の声が響く過疎
天女にもきつともてて亡夫想う
ニューファッション勇気を出して同期会
二十年ぶりのヒールは肉刺ができ

岡山県 山縣 のぶ子

歩け歩け生きた化石にならぬよう
笹の露朝陽にダイヤかがやかす
咲かぬ花思わせ振りに葉は茂る
かぶりつき舞台の呼吸肌で受け

尾道市 小畑 宣之

少しずつ眼鏡も頭もピンボケに
正夢になって欲しいと願う夢
蟬しぐれ逝きたる友の声混じる
猛暑の日路地には井戸の水を撒く

尾道市 日谷 寛

失笑をかってにんげん味が増える
失敗のたびににんげん力みがく
やり直す今は失うものがない
失明のおかげ五感が冴えかえる

竹原市 土井 輝恵

背が曲がる腰低くせよ天の声
都知事選女は強く羽撃いて
一日の花を咲かせて今日も暮れ
喧嘩する暇のなかった頃の幸

三原市 鴨田 昭紀

おはようで始まるにんげんのドラマ
雑音に慣れ静寂で眠れない
部屋中に響く独りで食べる音
根性の芯が細くてすぐ折れる

山口市 青木 隆子

扇風機涼しさ母と半分こ
川柳誌めくる指先気が馳せる
母米寿今だ主の気概満つ
夕陽浴び頬杖ついて思う父

山口市 中前 幸子

満月の森華やかな舞踏会
騙し絵の中で無防備なるわたし
セピアの風が雑木林で振り向いた
影絵の中へ変身魔術師の指よ

ぐちゃぐちゃの脳を整理する空よ
空き家にもあんなに猛る百日紅
真つ青な空と海とに裁かれる
思いやり混ぜたジョークのジャブが効く

下松市 有海 静枝
今治市 渡邊 伊津志

箸じゃなく葉転げて笑う老い
棘のない花を咲かせたかった薔薇
アクセルを踏んで走らぬ老いの足
目力があってしっかり生きている

大洲市 花岡 順子

病室へ気だるい朝が訪れる
年金の暮らしに病増えてくる
説教はもう沢山の青りんご
消しゴムの力を過信してはならぬ

松山市 近藤 修二

復興の原点にある八月忌
働き方何とかがしてよ育児論
四捨五入切り捨てされたコンマ以下
平行線接点求め引かれ合う

高知市 三谷 松太郎

爪楊枝くわえたアゴで会釈する
誤嚥など何するものぞ気合い勝ち
何気ないクシャミだったが癪が飛び
後期です使い分けした間の悪さ

第36回 川柳塔鹿野みか月川柳大会

日時 11月27日(日) 午前9時開場
場所 鹿野町総合福祉センター『和泉荘』
鳥取市鹿野町今市651-1 TEL 0857-84-3113

出句締切 11時30分
兼題と選者 (各題2句・未発表句・席題なし)

「文 字」	小 島	蘭 幸	選
「透 明」	森 中	惠 美	選
「他 人」	新 家	完 司	選
「海 峡」	木 本	朱 夏	選
「錯 覚」	萩 原	典 呼	選
「映 画」	市 田	鶴 邨	選
「空 気」	竹 治	ち かし	選

当日会費 2000円(昼食・発表誌呈)
欠席投句 1000円(小為替希望・切手不可)
投句方法 用紙自由 干住所・氏名(ふりがな)を記入
投句宛先 〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野1065
山野すみれ TEL 0857-84-3045

投句締切 10月31日消印まで
前夜宿泊懇親会会費 15000円
懇親会のみ参加 6000円
宿泊申し込みは10月31日までに森山盛桜まで
TEL 0857-82-1491

主 催 川柳塔鹿野みか月

挨拶は超かんたん暑いですネー
酸素がうすくなつて来た空気読み
極楽ごくらくゆつくり寝る時間
誰だつて人には言えぬ事がある
何しても子等の支えが力です
老農の見切りつけるか立ちつくし
夏の陽に芙蓉木樨と咲き続け
盆近し精霊トンボゆきもどり

北九州市 小松 紀子
唐津市 岩崎 實

新川柳鑑賞 (56)

麻生 路郎

始球式ヒヨロヒヨロヒヨロと知事の腰

(麦太楼)

白髪童顔の知事が野球場へ引つ張り出されて始球をやる。この日、天気晴朗、空には飛行機が乱舞し、地上には西瓜をならべたように人々が一パイである。そこへ知事のヘッピリ腰での始球は本人が真面目くさっているだけにユーモアそのものだと思う。

僕の旅地方新聞にもならず

(宏方)

平凡な生活、平穩な生活のよさに安住し得ないのが凡人の常かも知れない。生活に不自由はしないが、まだどこかに、名譽欲と云ったものが欲しいのである。旅をして、地方紙からインタビュアー一つされないのが物足らないのである。きらくでんきで、ほんとうに旅が楽しめるのに、それだけで一沫のさびしさを感じずにいられない凡人の心なのであろう。

宿の下駄ぬらして小蟹捕えて来

(栗)

ゆつたりとした旅の一コマを巧みに描写した句である。宿の裏に小川でもあるのであろう。

この句から海の碧さを想像出来ない。小蟹がこの句のヤマである。

見送りの時間をきいて遂に来ず

(栗)

この句の場合人物は不明である。それは人物を問題としていないからである。見送りの時間は聞いたが、はじめから見送るつもりで時間を聞いたのではない。それは一つの挨拶にすぎないのであった。こちらも見送ってくれることに少しも期待を持っていないのである。都会生活をしているところうしたことによくぶつかる。そこをうまくキャッチしたのがこの句だ。

聊はどれもはげてる一等車

(侃流洞)

一等に乗るほどの人、それが政治家であろうと、実業家であろうと、大なり小なり、世の荒波に揉まれて来た人達だけに、ヨリモトニックの厄介にならぬ人はいないと睨んだのである。この句は一読すると表現上どの一等車も色が剥げると言うようにうけとられそうであるが、この句の場合一等

車に乗っている人の誰もが頭髮が禿げているという意味であることは言うまでもない。川柳ではこの種の省略が往々にして行われている。

陽炎へ貨車を放して晝にする

(侃流洞)

駅構内である。春の日射しがボカボカと暖かい。陽炎がたっている。貨車を切り放して押しやる。ゴロゴロと貨車だけが鉄路をすべってゆく

「どりや、昼にしようか」

と駅員は大きな弁当箱を開いたのである。まことにのんびりとした情景だ。こうした写生句は全く絵であり詩である。

平和と見たり夜汽車の下町

(緑之助)

山裾を夜汽車で過ぎる。下の町には宝石をちりばめたように燈火がキラキラと光る。その割に町は静かだ。それをそれぞれの営みを終えた平和な静かさとしたのだ。西部戦線異状なしの口か。巧みな叙景川柳である。

裏街も水が流れて京に住む

(水客)

観光都市京都の静かな生活を目のあたりに見るような句である。裏街に流れている清らかなこの水も、平安朝の昔から流れている水なのであろう。

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

飯を食うさえも勇氣の要る日なり

恩借に父の容態ねざらわれ

この人も金を持たせば愚かなり

蛇行して蛇行して川淋しけれ

万歳万歳淋しさの残りける

檻の鶴又眼を閉ずるほかはなし

雪皚々湖一つ埋め残し

十二月宝石の美の極まれり

惜しみなく愛は奪えと 曼珠沙華

引金を引く一瞬が恋にあり

草いきれ万葉の世の相聞歌

恋あわれ男が花の水を替え

新劇の台詞めいたるプロポーズ

これもおやすみなさいで終ってる恋文

病人の恋は手紙の嵩を見せ

日記帳 K子K子が続いている

もう俺をのけものにして逢うている

モーニング着た日も顔を見せにくる

性欲と恋をごっちゃにして話し

失恋が室戸の波を見に行けり

首巻をして晩年を汚す恋

気が付けば恋のかけらを拾うてた

履きかえの足袋だけ持って女旅

花の香を嗅ぐ顔をして接吻し

大金を持って見たとき女かな

青天の霹靂乳房黒くなり

逃げおおせるものと女は思うて居

男の嘘女の嘘にしてやられ

一口もきかずに化粧出来上り

鏡台の前の思案はたかが知れ

平成二十八年 度 路 郎 賞

路郎賞準優秀作第一席

鳥 取 県



齊 尾 くにこ

大 阪 市 栃 尾 奏 子

自然体なのにステキな日記帳

捨ててしまう優しさ何度でも拾う

泣いたフリいつもあなたが負けたフリ

美しい嘘も年齢積んだから

花ふぶきLIVE配信しています

一報を受け、驚きとともに「続けていればご褒美が頂けるのだ」と、暫くのあいだ一人静かに喜びにひたりました。このような大きな賞を頂きありがとうございます。

これからも気負う事無く、身の丈の、自分発の句を創り続けて行きたいと思っています。

当初ご指導を頂きました先生、付かず離れず傍にいてくださいます柳友の方々、そして選者の皆様に心から感謝です。ありがとうございます。

柳 歴

平成19年 川柳塔 誌友

平成22年 川柳塔 同人

平成27年 檸檬賞準賞

平成27年 たかね年間賞グランプリ

路郎賞準優秀作第二席

篠 山 市 酒 井 真 由

黒猫がよぎる月下のシネマ街

ひと夏の恋サンダルをぶらさげて

押し花がはらりと君に借りた本

男一匹ひよいと句会をたちあげる

添いとげる愛のかたちに雪降り積む

平成二十八年度 川柳塔賞

川柳塔賞準優秀作第一席

西予市 西田 美恵子



大阪市

平井 美智子

葬式の帰り明日のパンを買う

ローン完済明日はゲートボールの日

晩ご飯食べた記憶が消えている

ダブルリーチかかったままで時間切れ

ゼロという形が妙に温かい

川柳塔賞準優秀作第一席

神戸市 細川 花門

国民のNOはムンクの叫びです

受賞作ブームが去ってから読書

輝いた老人でいるむつかしさ

重税に紫煙くゆらせ耐えている

八十年つけた仮面は皺だらけ

手元に川柳塔創刊75周年記念大会号があります。

平成十一年の春、四百二十五名の大会。川

柳を始めた許りの時に受けたあの日の感動が私

の原点の一つである事は確かな事実です。

此の度、歴史ある川柳塔賞のお知らせを頂き身の引

き締まる思いですが、この心地良い重みを励みとし、

一層の精進が出来たらと願っております。

本当にありがとうございました。

柳 歴

平成八年 川柳大学誌友

平成十年 川柳大学会員

平成二十六年 川柳塔誌友

路 郎 賞 得 点 表 (応募総数 120名)

1 位 = 5 点 2 位 = 4 点 3 位 = 3 点 4 位 = 2 点 5 位 = 1 点
(表の数字は得点)

選者 \ 作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸			1		3	2					4				5
新家 完司	4	3				5					1	2			
小沢 淳		2	5				3		1						4
佐藤 古拙			2						4		1		3		5
江見見 清				1				5	3	4					2
川端 一 歩			2						3			1	5	4	
古今堂蕉子			2				4	3	5						1
村上 直 樹			4					3	2	5			1		
居谷真理子		2			5	3						4		1	
山田 耕 治		2	4			5			1						3
石原 淑 子	1				4	5				3			2		
石橋 芳 山	4				5		1							3	2
両川 洋々			5			2		4			3	1			
計	9	9	(25)	1	17	(22)	8	15	19	12	9	8	11	10	(20)
	北野哲男	堀正和	斉尾くにこ	水野黒兎	森山文切	栃尾奏子	三好専平	吉岡修	夏目一粋	渡辺富子	岸本宏章	福士慕情	山野寿之	糀谷和郎	酒井真由

川柳塔賞得点表 (応募総数 69名)

1 位 = 5 点 2 位 = 4 点 3 位 = 3 点 4 位 = 2 点 5 位 = 1 点

(表の数字は得点)

選者 \ 作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸	1		5							2	3				4
新家 完司			5	1					2	4	3				
小沢 淳					5	4					1			2	3
佐藤 古拙		3		2						1	4			5	
江見見 清		5	4				2	3						1	
川端 一步				5	1		2	3					4		
古今堂蕉子			3	2	5					1				4	
村上 直樹		5		4							1		2	3	
居谷真理子			5	1	2					3			4		
山田 耕治					4	1				2		3			5
石原 淑子		5			3		2	1						4	
石橋 芳山			5			2				3		1	4		
両川 洋々		3	5						2	4	1				
計	1	21	32	15	20	7	6	7	4	20	13	4	14	19	12
	小畑 宣之	東 横 ますみ	平 井 美智子	栗 田 忠 士	西 田 美恵子	神 野 きつこ	川 名 洋 子	若 年 幸 子	中 山 春 代	細 川 花 門	鳴 田 昭 紀	山 縣 のぶ子	坂 本 加 代	伊 藤 のぶよし	高 杉 力

受賞作品

海南省 小谷 小雪



小谷 小雪

予定ないからもう少し寝ていたい
浅い夢得したような二本立て
ため息も体のためにいいらしい
不規則なころがり方もいいね栗
露草の紺しぶとさの色だろう
評 小谷小雪：「予定ないから」「浅い夢」「ため息も」など、
自らの心情や姿を素直に述べていて納得できる。一方、「栗」
や「露草」を見詰めて得た見解は独創的。
藤田千休：自らの姿のみならず、「キャスト」の「など」、
時事を含めた総ての素材を分析する手腕は的確。
大久保眞澄：難しい比喩を遣わず、日常生活の断片を掬い
取る手腕は見事。「おとがめもなく」の自嘲も愉快。
松山芳生：自らの姿を率直に述べながらユーモアもあり。
「青春」の比喩は独創的で味わい深い。

(新家 完司)

準賞作品

豊橋市 藤田 千休

ナチュラルが好きでこの顔この体
勉強より頭を使うカンニング
キャストの口にチャックをする政治
奈良市 大久保 眞澄
夜目遠目傘をさしてもおばあさん
おとがめもなく散らかした部屋にいる
飲めるとき飲んでおくこれぞ終活
青森県 松山 芳生
青春を刷毛でのばしている老後
図書館に気儘な僕の席がない
横になってカレー食べてる独りぼち

柳 歴

平成十七年 川柳塔わかやま吟社入会

川柳塔 誌友

川柳塔賞準優秀作

第一席受賞

川柳塔社 同人

川柳瓦版 誌友

快い風が吹く昼下がりに、栄ある受賞のお知らせ。驚きと喜びでいっぱいになりました。川柳と出会って約十年。締め切りに追われての作句。そしてスランプもしばしば。それでも、何とか続けられましたのは、諸先輩、柳友のおかげと思っています。
私は、せせらぎや鳥や虫の音と一緒に四季を身近に感じながら、ささやかな体験に根ざした川柳を作っていました。受賞ということ、立ち止まり、原点に戻って自分や社会を見詰めるチャンスと頂いたと考えています。これからは、もっと広い視野に立つて学び、こつこつ精進を重ねていきたいと思っています。ありがとうございました。

平成二十四年

受賞作品

松江市 石橋 芳山

ヒマワリもバラも見せ場を知っている

評 受賞句は華麗に咲く花にこと寄せ、己の人生の見せ場を模索している姿に心打たれました。準賞朝子さんの句は、世界唯一の被爆国の国民として、核廃絶を訴え続けなければと詠み共感しました。慕情さんの句は、私の孫娘も就活の時期でしたが、人間を見るこのような試験官であればと思いました。一年間毎月たくさんの投句からの六十句、その中の秀句三句選は厳しく、また勉強になりました。(三浦 強一)

評 受賞者の皆様おめでとうございます。檸檬抄には一年間で七二〇〇句もの投句がありました。どの作品も素晴らしいものでした。芳山さんの受賞句は個性的な人間像をヒマワリやバラに譬えて印象深く、朝子さんの核廃絶という人類の悲願が心に強く響き、慕情さんの「将来と荒削り」の取り合わせは力強い作品でした。



石橋 芳山

吉報は、突然降ってくるものらしい。こんな経験はあまり覚えがないので、電話口で「オーサンキュー」と失礼にも口走ってしまった。正直に言えは、受賞した句がいつのものか覚えが無くて、この句を選んでくれた方々には、失礼をお詫びしたい。そして、感謝をしております。いまだになにかの間違ひではないかと疑っていて、会場で表彰されるまでは疑い続けることだろう。ありがとうございます。

柳 歴
2003年12月

川柳塔まつえ例会に初出席

準賞作品

香芝市 大内 朝子

核廃のゴールは遠いけど目指す

弘前市 福士 慕情

将来に期待が持てる荒削り

候補作品

尾道市 大本 和子

プロポーズ受ける気で乗る観覧車

和歌山市 楠 見 章子

木を植えて森になるのを見届ける

受賞作品

弘前市 高瀬 霜石

ワタクシを殺してわたくしを生かす

評 本賞の霜石さんの句、ワタクシとわたくしの反復を活かし、生き方を表現して充実した一句。今年度の霜石さんは質、量ともに圧倒的な成績でこの句も賞に値する作品。

準賞の狸月さんの句、日本の諸製造現場の技術力の高さをミクロンのヤスリあとで表現して素晴らしい。

準賞の碧さんの句、しがらみとか、因習とか何らかの枠を乗り越えて生きる力強い表現に感嘆。

評 本賞の霜石さんの句、多くを言わないシンプルな句が、とても多くの事を語ってくれています。「わたくし」になるためには「ワタクシ」を、という想いに辿りついた素晴らしい句を頂きました。狸月さんの句、精密な仕上げの最後の工程を詠まれたのでしょうか。まさに神の手ですね。碧さんの句、バックをしたあとの自尊心、自意識がふくらむような心の動きを頂きました。

(政岡日枝子)



高瀬 霜石

一路賞受賞、まことに光栄。すぐに駆けつけるべきところ、ドッコイ、そうはいかなくなりましてねえ。去年から、青森県川柳連盟理事長という大役を引き受けさせられまして(トホホ)。それ分、地元の大会の選者を頼まれることが多くなりまして(トホホ)。残念ながら、欠席です。ごめんなさい。

準賞作品

熟練の誤差ミクロンのヤスリあと

萩原 狸月

パックから出ると生き生きする野心

武本 碧

候補作品

小粒でも数を揃えて待ち受ける

島田千鶴子

鍵つ子が母を離さぬ日曜日

上田 紀子

論点の乱れを正す咳一つ

内藤 憲彦

柳 歴

平成11年

路郎賞準賞

平成15年

(川上富湖さんが正賞の年)

平成16年

路郎賞受賞

平成19年

(完司さんの受賞の前年)

愛染帖賞受賞

(五楽庵さん担当最後の年)

檸檬抄受賞

(たしか、貰った)

平成二十八年 度 各地柳壇賞

受賞作品

香芝市 大内朝子

魂は売らぬと決めている背筋

評 厳しい世を生きてゆくのに何かと難問にぶち当たります。どんなときにも自身の主張は貫き通すと言う強い信念が窺えます。

準賞 一句目は波乱の昭和の時代を夢中で生きてきたという作者の感慨でしょう。二句目はあくせくせられる世の中の動きにゆったりとした動きを見つけて一息ついたと言うことでしょうか。

(村上玄也)

評 何と毅然とした句であらう。誘惑の多い心に見える世の中で。魂は売らぬと言い切った。美しい人である。各地柳壇は多種多様な会である。心打たれる佳句も零れんばかり。選句は苦しく楽しみも多かった。

(松本文子)



大内朝子

各地柳壇受賞のお報せを頂いた時は本当に驚きました。入賞句は亡父の生き様を詠んだ句であり私もそうありたいと言う願望の句でした。その句に共感頂いた事がこの上ない喜びとなりました。川柳を続けていて良かったと思う瞬間でもありました。カルチャーに通っている時、薫風先生から塔の一本の柱になるようお誘い頂いてとっぶり川柳にはまっています。久々の感動本当にありがとうございます。命が生き生きと喜んでおります。

準賞作品

我武者羅に生きて昭和を駆け抜ける 富士 慕情
遅れてる時計もあつてほっとする 田中けいこ

候補作品

たくらみを抱いてる下を向いて咲く 居谷真理子
いつか来た店知っている千鳥足 竹村紀の治
保健室のカーテン少年を庇う 古久保和子
お互いが杖お手本は両陛下 岸本 宏章

柳歴

平成4年 なにわ柳壇に投句始める
平成7年 朝日カルチャー入門
平成8年 川柳塔社同人
平成10年 川柳塔なら創立で入会

受賞者の皆さまおめでとう

小島 蘭 幸

平成28年度の六賞を受賞される皆さまに、心からお喜びを申し上げます。

猛暑の中、今年も8月12日に、川柳塔社事務所で第一次選考を行いました。第一次選考委員六名が、それぞれ、路郎賞、川柳塔賞の応募作品の中から佳句をチェック、その作品の中から佳句のチェックの多い順に私が最終の十五名を選んで第二次選考の皆さまにお願いしました。

路郎賞の斉尾くにこさんは、各地の大会で常に上位に入賞されている実力者で、その自選の力は素晴らしいです。準賞のお二人も、毎月の川柳塔へ佳句を発表されている好作家です。

川柳塔賞の平井美智子さんは、時実新子さんの指導を受けられた好作家です。準賞のお二人は水煙抄でのご活躍が顕著です。

愛染帖賞の小谷小雪さん、檸檬抄の石橋芳山さん、一路賞の高瀬霜石さん、各地柳壇賞の大内朝子さん、おめでとうございます。

今回の六賞も女性の活躍が顕著でした。地域的には、四国、山陰、東北と幅広く選ばれていました。そして何よりも新しい風を喜びました。

受賞者の皆さまおめでとう。

二賞選考経緯

西出 楓 楽

8月5日から始まったリオ五輪の熱気が、大阪まで伝わって来たような猛暑が続く中、12日10時から二賞の第一次選考は川柳塔事務所で始まった。選考は蘭幸主幹・元司理事長・大輪副主幹・朱夏副理事長・私。応募のあった路郎賞120名、川柳塔賞69名の各8句を熟読玩味し、それぞれ20数名を選出した。それらの中から蘭幸主幹が慎重に15名に絞り込み候補作品が決定した。

第二次選考者は全国各地から満遍なく二年任期で選ばれた、実力者揃いの11名と主幹・理事長。20日締め切りで返送されてきた結果は発表の通り。

路郎賞獲得の斉尾くにこさんはこれまで6賞の受賞歴が無く、いきなりのデビューとなった。準賞一席の栃尾奏子さん、準賞二席の酒井真由さんには更なる上位を目指して頂けるものと期待している。

川柳塔賞ははからずも西田美恵子さん、細川花門さんは同点になり準賞一席が2名となった。東横ますみさんは平成25年に準賞一席の受賞歴があり、規定により来年以降より上位を狙って頂くことになった。

二賞候補者居住地

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
路郎賞	三田市	三田市	鳥取県	豊中市	沖縄県	大阪府	羽曳野市	四条畷市	鳥取市	奈良県	鳥取市	弘前市	富田林市	明石市	篠山市
川柳塔賞	尾道市	瀬戸内市	大阪府	松山市	西予市	松山市	八王子市	竹原市	箕面市	神戸市	三原市	岡山市	防府市	男鹿市	大阪市

英語 de Senryu ⑤⑧

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

料理屋をさして貰えぬうちに切れ

*before he rents her
the restaurant
they break up*

あっさりと ふられた事を笑ひ合ひ

*I was turned down
by her easily
laughing over whole story*

before ~の前に *rent* 借りる *restaurant* レストラン *break up* 関係が終わる
turn down 申し出を断る *easily* 容易に *laugh over* ~を笑う *whole story* 一部始終

～リバーウィローのため息～ R.H.ブライスによる川柳の解釈と英訳②

今回も SENRYU から、(人の心理) つまり、心の動きを取り上げましょう。

一本のマッチで心易くなり 春 草

With a single match, / Becoming / Friendly (Blyth 訳)

single match 一本のマッチ *become* ~になる *friendly* 親しく

簡明で理解しやすい句です。わかりやすい句だからこそ、読者の想像は膨らみます。ブライスは、「人間の本性は弱く、繊細で、優しい気持ちに頼りがちになるものです。見知らぬ同士がお互いの煙草やパイプを同じ火でつけ合って、気持ちが温かくなることもあります。」と述べています。わたしはこの句からアメリカの小説家オー・ヘンリー(O. Henry)の名作『二十年後』*After Twenty Years* を思い出しました。ニューヨークで育った親友同士が、二十年後に同じ街角で再会することを約束して別れますが、一人はお尋ね者で、もう一人は警官になっていました。「お前が葉巻に火をつけようとマッチをすったとき、お前の顔はシカゴで手配されている男の顔だとわかったよ。」と、親友は同僚の警官に頼んで、再会の約束を果たしたメモを渡すのです。一本のマッチの火は小説の小道具として最上の火を灯します。

この川柳の作者、春草は尾藤三柳編『川柳総合事典』には紹介されていません。

参考文献: Blyth, SENRYU (北星堂書店 1949) p.170.

誹風柳多留一二篇研究 40

山田 昭夫・石川 道子

小栗 清吾・細井 龍夫

伊吹 和男

清 博美

319 かしましい跡から花を一トからげ

山田 女連れの花見の帰り、盛り上がった

気分はまだまだ続いて「姦しい」。その後を、土産に折った桜の「花を一絡げ」にして持って付いて来る。弁当持ちの下僕でもあろうか。

弁当持を花活にして戻り

八八20

清 賛。折ってはならぬはずの桜の小枝。

320 すけんでも門から内八気がかハリ

山田 素見物の者でも吉原の大門を入れば

「気が変わり」、実際に揚げたい気分になる。しかし実のところ、先立つものが無いから、如何ともし難いだらう。

すけんか七分かうやつか三分なり

天二鶴2

素見物買わせりや見事買ウ気也

二五19

石川 今日素見、と大門を入つても実際へめぐっているうちに登樓する場合もあるので。

細井 礎賛。先立つものが無いのでは登樓出来つこない。やはり、

す見物宝の山へ入りながら

七12

伊吹 同右。気は買うつもりでも体は見ているばかり。

清 同。懐のあたたかい素見は居ないはず。

321 ひろわれたそつだと手よく外トでけし

山田 何が拾われたというのか。それがはつきりしないと句解に至らない。落とし物や捨て子(四十二歳の厄除けのため、四十一歳の時産まれた子を捨てると真似をする)など考えられるが、これだけの措辞では特定が難しいと思う。多分「手燭外で消し」がキーワードになるのだろうが、皆目見当もつかない。御教示賜りたい。

小栗 自信はないが、厄除けの捨て子だと思ふ。「そつだ」は推量(ゝのようだ)。「段取り通り拾われたようだ」といいながら、捨て子の側に置いてあつた手燭を消す。形式的なことだから暗闇なところへ子供を置くわけではなく、手燭をおくのではないか。

伊吹 小栗氏の厄除けの捨て子説に賛。清 小栗説なるほど。もう少しストンと落ちてくれるとスッキリするのだが。

322 蓮の茶や今朝から半座明けて待

山田 半座は「死後浄土で蓮の台にいつしよにすわるといわれるその席の半分」(「日国」)。

蓮の茶屋は不忍池畔にあつた出合茶屋で、相手の来るのを蓮の台の上で「今朝から半座明けて待ち」。

池の茶屋一ツはちすにちぎる也

四九33

半座を明て待つて居る蓮見茶屋 二二七

あなうまし蓮の半座の帆立貝イ 二四三

なお、「今朝から」とあるのは、蓮は朝に開花するのを利かせたもの。

清 賛。

323 ひやめしハあるかと下戸の初かつほ

山田 初鰯は刺身にして一杯やるのが相場。

ところが下戸は飲めないのだから、当然のことに飯の菜にして食べる。しかし酒飲みにしては何とも勿体ない食べ方である。なお「冷飯はあるか」と聞いているのは、江戸では、朝に飯を焚き、昼や夜は冷飯を食う習慣だったからで、いくら何でも、朝から一杯というわけには行かなかったのだろう。

初鰯百貫しても飯のさい 一二二

清 賛。

324 雨やとり四五丁行と水をつち

山田 俚諺「夕立は馬の背を分ける」や、「夕たちに馬を半ぶんぬらす也」(二一六)というように、夕立はほんの近くでも、場所によって降ったり照ったりする。だから、雨宿りをして四丁先では晴れて、打ち水をして

いるとなる。

傘さけて見ればこ、らハ水を打 四四七

張りものをする所へぬれてかへる 一四一三

清 賛。

325 けしやうしながら嶋かくれ行をいひ

山田 柿本人麻呂の作と伝えられる、

ほのぐとあかしの浦のあさ霧に
嶋かくれ行舟をしぞおもふ

(古今和歌集 卷第九)

の上の句を寝る前に三遍唱えると、翌朝早起き出来るといわれていた。そして首尾良く願いが叶うと、お礼として、下の句を唱えるのである。主題句は、願い通りに早起き出来たので、「化粧しながら」下の句の「嶋隠れ行くを言い」。花見か芝居見物に行くのである。

おしろいときながら舟おしぞ思ふ 二二六

ゆふべにハきりあしたにハ舟といひ、

寛元宮一

清 賛。

326 てんがいを笛でつつはるほとゝきす

山田 天蓋は「②虚無僧の用いる蘭草製の

深編笠」(日国)。時鳥の鳴き声を聞えて来たので、虚無僧が天蓋を尺八でちよいと突っ張って、時鳥の飛ぶ姿を見上げる。

時鳥田植の笠にゆびの跡 六九一三

時鳥田植の笠にゆびの跡

清 賛。ほととぎすは高い所を飛ぶので、相当仰向く必要がある。

327 浅きつら手をこまぬひて待て居る

山田 浅黄裏が敵娼の来るのを今や遅しと、物々しく腕組みをして待っている。振られたのに、それと気がつかないのも浅黄裏たる所以である。

伊吹 賛。拱手傍観。

清 賛。

328 やるせなくぼんをつんだす子のきつじ

山田 やるせないは「①やるかたない」(日国)。客の給仕を命じられた子供、仕方なくしぶしぶとぞんざいに「盆を突ん出す子の給仕」。早く仕舞って遊びたいのだ。

せハしなさほとんどこまる子ノ給仕

清 賛。

三 四二四

愛染帖

新家 完司選

(投句 265名)

ボケモンGOしたら賢くなるやろか

大阪市 笠嶋 恵美

(評)賢くなるなら世界の未来は明るいが……
学習時間も周囲を氣遣う能力も失せて、電
信柱にぶつか人が増える程度ではないか。

先生はもう恐くないクラス会

堺市 内藤 憲彦

(評)くだれが生徒か先生か、となったク
ラス会。赤鬼先生も好々爺になってしまわ
れた。もう恐くないけど……、少しさびしい。

タイプではないので今もお友達

堺市 矢倉 五月

(評)では、タイプだったらどうなっていた
のだろう？ それを考えると何やらややこし
そうで、やっぱりタイプでなくて良かった。

ハグだけのスキンシップが物足りず

奈良県 安福 和夫

(評)初めは恐る恐るだったが、慣れるにつ
れて厚かましくなり、遂にはこのような不埒
なことを。やはり相手はタイプなのだろう。

五輪旗の日中韓はひとつの輪

鳥取市 岸本 宏章

(評)クーベルタン考案の五輪マーク。五つ
の輪は五大陸を表す。ならば日中韓は一つ
の輪だが……。ギクシヤクシ過ぎではないか。

息子は言わぬ妻と母との板ばさみ

三田市 東内美智子

(評)何かにつけて行き違いのあるのが嫁姑。
どちらの応援もできないので我慢している
息子。「男」だと想う。いじらしいとも想う。

さつと身をかわす術なら長けている

羽曳野市 吉村久仁雄

(評)相手も自分も傷つけない最良の策。あ
ちこちぶつかって得た極意。安っぽいブラ
イドや負けず嫌いで立ち向かうのは青二才。

コンビニのおかずに負けたレパートリー

羽曳野市 宇都宮ちづる

(評)豪華なものはないが品種が多くなって
きたコンビニのおかず。買ってきたものを
並べるだけという手抜き時代がやってきた。

村はずれ兵を送った沈下橋

松山市 栗田 忠士

(評)故郷でしか見ることの出来ない風物は
思い出と共に消えることはない。見送られ
た若者も万感の想いで振り返ったであろう。

全壊の友だち見舞う言葉選る

熊本県 岩切 康子

(評)大きな衝撃を受けて心身ともに疲れ果

てている人に何と言えはよいのだろうか。饒
舌よりも「手と手」「心と心」しかないのかも。

自転車もよろよろしてこの暑さ

唐津市 坂本 蜂朗

炎天はバタバタせずに深海魚

三田市 尾崎 一子

炎天下買物すべて娘にたのむ

箕面市 富山ルイ子

炎天を砕く木刀振りおろす

岡山市 丹下 凱夫

鳥取も全国版にのる猛暑

鳥取市 津村 律子

猛暑日は起きているよな寝てるよな

箕面市 広島 巴子

クーラーと外気ときどき入れ替える

倉吉市 山中 康子

梅干とお茶携えて古寺巡る

寝屋川市 森 茜

ネクタイを悪者にしてクールビズ

西宮市 緒方美津子

暑中見舞いメールを打てばくる電話

寝屋川市 籠島 恵子

納涼祭熱風受けてそばを焼く

鳥取市 田中 天翔

夏野菜どつと届いて思案する

高槻市 島田千鶴子

この夏もソーメンばかり食べていた

三田市 上田ひとみ

河内長野市 中島 一彌
年金で威厳を保つお盆玉

羽曳野市 中川ひろ介
お盆でもアマゾン僧侶来てくれる

奈良市 加門 萌子
真夜中の五輪やっぱり見ちゃったよ

河内長野市 木見谷孝代
五輪見るために昼寝が欠かせない

松山市 郷田 みや
することはあるが競技を見てしまい

奈良市 阿部 紀子
体操金皆イケメンで尚楽し

松江市 中筋 弘充
金メダル銜えてくれと言う阿呆

三田市 石原 歳子
改良をされた花火が目奪う

三田市 村田 博
花火にはお臍隠して行きなさい

和歌山市 坂部紀久子
蝉しぐれと共に目覚める一人部屋

大阪府 高木 道子
この夏も蟬興行の棧敷席

京都市 都倉 求芽
暑さ絶頂手加減知らぬ蝉しぐれ

箕面市 中山 春代
スイッチがあれば切りたい蝉時雨

東大阪市 北村 賢子
炎天下転がる蟬をくさむらへ

松原市 森松まつお
筆順を気にせぬ孫はサウスボー
カケソバを食べているけど金はある

大阪市 平井美智子
少しだけ弛んでからが美しい
線香がついている間の真人間

男鹿市 伊藤のぶよし
哀しいねナマズ貌だす鰻の日
あすがあるあすがあるさと蝉しぐれ

岡山市 田中 恵
風鈴も夜はおやすみしてもらう
冷や奴でんと居座る指定席

鳥取県 山下 節子
スランプという口実で何もせず
アルバイト西瓜畑の見張り番

河内長野市 梶原 弘光
夢だった大きな窓の一軒家
坊さんもスマホ弄っている車内

豊中市 貝塚 正子
黒電話キザな酒場の壁飾る
達磨さん付けてみますかイヤリング

岡山市 永見 心咲
灼熱の砂漠 化粧もすぐ剥げる
夏日には不意の来客お断り

東大阪市 佐々木満作
同意書に医者への逃げ道確とあり
ストレスが溜まらぬように汗をかく

弘前市 高瀬 霜石
カラオケの上手な人は嫌われる
善人はいがい数字には弱い

河内長野市 穂口 正子
ジャパンでしょきつとチャイナいやコリア
日中韓シャッフルされて御堂筋

米子市 生田 和之
ヒトラーのわめき出す世に身構える
手加減のあった昭和の子の喧嘩

鳥取市 福西 茶子
引力に素直乳房もホッペタも
ときめいたハートに小言など不粋

大阪市 谷口 義
ほうれい線ぐらいいはまだ入口です
おばあさんの中でもお姉さん格

佐賀県 真島久美子
幸福の王子私を見ていない
幸福の王子私を見ていない

枚方市 丹後屋 肇
A Iの軍門に伏す霊長科
追いつけぬデジタルの海錆びた脳

和歌山市 上田 紀子
夏バテに美味く漬かった紅生姜
貝塚市 石田ひろ子

藤井寺市 田付 絹枝
鰻の皮刻みキュウリの格を上げ
西宮市 福島 弘子

物産展懐かしい味亡母の味

富田林市 山野 寿之
誘われて薩摩切子に夏の酒

三原市 笹重 耕三
まだ飲めるまだ喰う古稀のクラス会

奈良県 渡辺 富子
初恋がしやしり出てくるクラス会

三田市 福田 好文
妻の顔忘れ飲むから旨い酒

豊中市 松尾美智代
カロリーをジムで使って夜ビール

大阪市 奥村 五月
生ビール花火はオマケビルの屋根

寝屋川市 岡本 勲
反省を威勢にかえた酒二合

藤井寺市 鈴木いさお
致死量の手前でやめておくお酒

明石市 桃谷 和郎
ホステスの「ねえ」に財布が身構える

河内長野市 藤塚 克三
胃の中で酒と薬が鉢合わせ

豊中市 藤井 則彦
休肝日の明くる日なんと旨い酒

香南市 桑名 孝雄
バトカーが飲んでないのについてくる

櫻原市 安土 理恵
隣からじわじわいやな風が吹く

高槻市 初代 正彦
一日を明るく生きたまた明日

八幡市 今井万紗子
聴診器はたと止まった秘密基地

下松市 有海 静枝
感情を封じ握撃する暇

唐津市 仁部 四郎
給食のレシビが土産参観日

和歌山市 楠見 章子
コンビニが出来て夜道が怖くない

米子市 成田 雨奇
はくよりも後で逝く気の妻の咳

八尾市 宮崎シマ子
夏終るしるしに上がる遠花火

八尾市 山根 妙子
心なしPL花火さびしげな

三田市 北野 哲男
煩惱があつて時々見える虹

大阪市 古今堂蕉子
右足と左の足が仲違い

橋本市 石田 隆彦
この歳で進化するのは病だけ

大阪市 栃尾 奏子
悩み事丸めて捨てた青い空

米子市 竹村紀の治
散髪をしても周りは気付かない

宝塚市 田中 章子
ルノワールために勇気くれました

大阪府 高杉 力
阪神の帽子を孫にプレゼント

松江市 石橋 芳山
新しいことを探している目玉

岡山県 山縣のぶ子
まだ脈があるか古釘たたかれる

堺市 奥 時雄
金欠にとっても冷たい大都会

鳥取市 永原 昌鼓
生きるには銭と入れ菌が欠かせない

大阪市 坂 裕之
読み過ぎは心配の種増やすだけ

長岡京市 山田 葉子
はじまりは二人三脚だったのに

貝塚市 吉道あかね
金婚の先から自由契約に

弘前市 稲見 則彦
碁敵が石をじゃらじゃら弄ぶ

京都市 榊本 宏子
地球儀をくるり回すとテロに遭う

鳥取県 竹信 照彦
何を入れても平気です紙コップ

大阪市 大川 桃花
腰痛ぐらいで停止する脳情けない

沖縄県 森山 文切
流暢な英語で道を訊かないで

米子市 後藤美恵子
上品な温室野菜味うすい

堺市 澤井 敏治
敬老日お世話の方も敬老日

神戸市 山根 弘子
病む夫と指を折ってる五七五

大阪市 内田志津子
全没に樹海さ迷う五七五

笠岡市 藤井 智史
ゼンマイを巻いてゆつくり正す背な

松山市 柳田かおる
力まなくなつて本物らしくなる

沖繩市 高良 秀光
ゆらゆらと胸元揺れるEカップ

岡山市 藤成 操江
むずかしい孫等を督めるタイミンゲ

鳥取市 夏目 一粋
間違いを七つ探してロスタイム

奈良市 大久保眞澄
前転をしてみた死ぬかと思つた

神戸市 奥澤洋次郎
若い足もうあんなにも先をゆく

海南市 小谷 小雪
ぴかぴかに洗うだけでも弾む足

横浜市 菊地 政勝
楽しんでやった試合が勝ちを呼び

大阪市 森 廣子
フレディは森から飛んで来たんだネ

神戸市 近藤 勝正
夕立は鳴物入りでやってくる

堺市 近藤 治子
わからへん宇宙の話億光年

鳥取県 斉尾くにこ
血管を巡れば地球二周半

枚方市 寺川 弘一
妄想をするといつても君なんだ

防府市 坂本 加代
夢を追っている幸せだと気付く

青森県 松山 芳生
祭日も生死を繋ぐ救急車

紀の川市 楠原 富香
タクシーのお釣りは貰う主義である

三田市 堀 正和
お天気にも左右されてる万歩計

吹田市 木下 敏子
ややこしい事は言わずに歩くだけ

河内長野市 松岡 篤
散歩して恋をしたのは犬同士

鳥取県 門村 幸子
布袋さまに話しかけつつお顔拭く

つくば市 嶋本 喬
地震の巣ガス抜きで無事ほんとうか

神戸市 松井 文香
デュエットを聴けばデュエットしたくなる

豊橋市 藤田 千休
合コンへ蓼食う虫を探してる

西予市 黒田 茂代
飲んだつもりの錠剤一つ落ちている

枚方市 海老池 洋
たこ焼きもスマホもぶらりする夜店

神戸市 細川 花門
ハルカスから浪花の埧塙のぞき込む

鳥取県 西谷 悦子
ギブあんどギブで満足して生きる

河内長野市 村上 直樹
爺ちゃんの目を点にしたヘソピアス

大阪市 宇都満知子
氏神様素通りできず手を合わす

弘前市 福士 慕情
履き慣れて軍手の左右間違わぬ

芦屋市 竹山千賀子
冷やかしと見たか店員出て来ない

四条畷市 吉岡 修
幸せなゆうべの顔で始発乗る

鳥取市 奥田 由美
ルックスと訛りが似合う安堵感

那覇市 前川 真
野鳩鳴きひそかにハモる独り者

芦屋市 黒田 能子
8パーセント暗算はまだ大丈夫

宇都市 平田 実男
お守りは子供と孫の顔写真

熊本市 杉野 羅天
メモペンと帽子のことで一日終ゆ

西脇市 七反田順子
半月を見つつ明日への橋渡し

紀の川市 山東日出男
都会ではお金を出して星を観る

共選欄

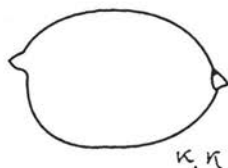
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 349名)



「疑う」 北野 哲男 選

疑って信じて恋は面白い
疑いを知らぬ男の一本気
本当について行ってもいいかしら
ネグレクト母性本能疑わせ
ほんなかないな時時思うコマーシャル
性善説甘い甘いと笑う声
エッとフーン疑い含む感嘆詞
疑問符の顔してぬっとワラビの芽
消しゴムが減った数だけある疑惑
猫だけが疑ってます猫ブーム
ナマズかも知れぬウナギの香に風味
疑ってかかる男も原発も
疑えば正論までも眉に唾
疑いが晴れたか軽い靴の音
言い訳の長さがちよいと腑におちぬ

樺原市	居谷真理子
神戸市	山崎 武彦
三田市	上田ひとみ
沖繩県	島尻 卓
豊中市	藤井 則彦
大阪市	古今堂蕉子
高槻市	富田 美義
枚方市	海老池 洋
紀の川市	宇野 幹子
四条畷市	吉岡 修
鳥取市	加藤 茶人
西予市	黒田 茂代
富田林市	山野 寿之
紀の川市	楠原 富香
藤井寺市	太田扶美代

「疑う」 安土 理恵 報

疑えばそれらしくなるお膳立て
友人が好きで疑う事が出来ませぬ
疑いを知らぬ幼児の涼しい瞳
行動をチェック思春期反抗期
知事疑惑七十五日も続かない
妻の日記白いページにある疑惑
ご夫君の身辺調査依頼され
疑うのは止そうこの先してます
好きだから疑い深くなるのです
CTの画面見ながら医者黙る
念のため妻が疎開をさせる酒
疑った通りになって狼狽える
スーパールの監視カメラが睨んでる
痩せ薬なのか下剤か分からない
疑問符がチラチラ夫の行状記

池田市	栗田 久子
瀬戸内市	片島 秀月
奈良市	米田 恭昌
横浜市	川島 良子
奈良市	辻内げんえい
奈良県	渡辺 富子
唐津市	山口 高明
高槻市	初代 正彦
香芝市	大内 朝子
奈良県	谷川 憲
西宮市	足立 茂
犬山市	金子美千代
大阪市	津村志華子
尼崎市	清水久美子
堺市	矢倉 五月

トリックは無いかと君を裏返す
 疑問符が聳く少年の左脳
 ご免なさいちよつとジェラシーしましたの
 疑いは晴れたあんたは宇宙人
 疑うと花が悲しい顔をする
 疑うと人の真が見えてこぬ
 疑いも嘘も生きてる証です
 疑えば般若も夜叉に見えて来る
 疑うを知らぬ子初盆に亡父帰る
 疑っているのは吊橋渡れない
 一べんはウソーと言うてみる新種
 幸せは明日を疑うこと知らず
 母の眼はいつもまっすぐ疑わず
 疑わず性善説を信じきる
 疑いは解けたらしいネハモツてる
 好きだから疑い深くなるのです
 言い訳を黙って聞いて目で笑う
 これ以上疑わないでプチトマト
 目的は句会呑み会どちらです
 ちっぽけな愛で疑い深くなる
 疑ったらキリがないけど疑うわ
 テロあるか地震くるかと眠れない
 改憲を武器の会社が言っている

岡山市	永見	心咲
青森県	松山	芳生
河内長野市	山本	義子
紀の川市	穂口	正子
三田市	辻内	次根
吹田市	尾崎	一子
大洲市	須磨	活恵
加西市	中居	善信
三田市	山端なつみ	
神戸市	久保田千代	
京都市	富永	恭子
大阪市	都倉	求芽
箕面市	笠嶋	恵美
富田林市	出口セツ子	
香芝市	中井	アキ
三田市	大内	朝子
八幡市	多田	雅尚
三田市	今井万紗子	
横濱市	堀	正和
大阪府	川島	良子
鳥取市	江島谷勝弘	
登別市	田中	天翔
	小林	碧水

信じてるからと何度も言っておく
 御気の毒疑心暗鬼に取り付かれ
 疑えば妻まで鬼に見えてくる
 夫婦だと言えば疑う余地はない
 まさかの事疑うゆとり持っている
 談合を疑う真夏日のゴルフ
 どうも私らしい写真のおばあさん
 疑うと目つきが悪くなってくる
 疑ってかかる男も原発も
 疑えばそうかあんなに良い人も
 腹割った話らしいが嘘くさい
 元栓は締めた筈だが見に帰る
 先ずはノーその後にはイエス結果よし
 とりあえずは疑ってみる老いの知恵
 疑えば正論までも眉に唾
 改憲に疑いの目がつきまとう
 運勢は大吉でしたそれなのに
 枯れたかと根つこの首を引いてみる
 本当について行ってもいいかしら
 疑っているのは吊橋渡れない
 人情の機微にうとくて猜疑心
 大臣になれば疑惑が浮上する
 疑えばプロポーズからそうでした

佐賀県	真島久美子
鳥取市	平尾 菜美
藤井寺市	鈴木いさお
鳥取市	土橋 螢
和歌山市	松尾 和香
弘前市	吉川ひとし
奈良市	大久保真澄
羽曳野市	三好 専平
西予市	黒田 茂代
大阪市	坂 裕之
高槻市	富田 美義
大阪市	津守なぎさ
奈良県	安福 和夫
河内長野市	村上 直樹
富田林市	山野 寿之
堺市	遠山 唯教
奈良市	長谷川崇明
海南市	小谷 小雪
三田市	上田ひとみ
三田市	久保田千代
大阪府	升成 好
鳥取県	竹信 照彦
弘前市	稲見 則彦

言い訳に疑惑の影が付きまとう

疑いを晴らしてくれたDNA

疑うことから湯川博士はノーベル賞

やまいだれ疑いはれて笑顔でる

疑いを晴らす明日の風を待つ

疑いは長い前置きまだ続く

同姓同名だけで僕だと疑われ

疑えば白もピンクになつてくる

人間を見張るカメラの猜疑心

何故何処で根から葉までも問いつめる

ラジオから耳を疑う敗戦日

疑えばやさしささえも気に食わず

出来過ぎた話の裏をつい探る

うやむやにしたまま去って行った知事

疑えば眠れぬ夜のながいこと

疑いを知らぬ幼児の涼しい瞳

名を呼ばれ耳を疑う天位の句

見るからに猛者のあなたが下戸なんて

規制してますかな規制委員会

秀句

眉つばの話の方がおもしろい

おみくじを宝くじより疑わず

信じてるからと何度も言っておく

三原市 鴨田 昭紀

宝塚市 太田としお

鈴鹿市 小河 柳女

札幌市 富永 恵子

紀の川市 北山 絹子

茨木市 藤井 正雄

神戸市 細川 花門

芦屋市 黒田 能子

大阪府 若本 安代

三田市 幸田 厚子

吹田市 木下 敏子

大阪市 原田すみ子

今治市 渡邊伊津志

三田市 谷口 修平

箕面市 酒井 紀華

奈良市 米田 恭昌

山口市 青木 隆子

堺市 矢倉 五月

弘前市 高瀬 霜石

神戸市 近藤 勝正

唐津市 仁部 四郎

佐賀県 真島久美子

はつらつと生きて孤独死疑わず

疑いを残したままする握手

疑うという手間かけぬ無関心

妄想に膨らんでゆく嫉妬心

父さんは優しいけれど刑事です

疑問符が父の戦地に今も有る

発掘で歴史の信疑垣間見え

疑問符を流しつづける再稼働

これで良いか疑うことに意義がある

疑惑などんと持たない自動ドア

ぼた餅が落ちてくるかもしれぬ棚

妬心だらうか心コロコロ揺れすぎる

アリバイを頼む相手を間違える

おみくじを疑うそんなひまはない

年寄りには疑い深いんだ許せ

性善説甘い甘いと笑う声

過不足が無いと言うたら嘘になる

疑えば絆の切れる音がする

猫だけが疑ってます猫ブーム

秀句

街中に監視カメラのある平和

トリックは無いかと君を裏返す

人間を監視カメラは信じない

鳥取県 齊尾くにこ

藤井寺市 太田扶美代

樺原市 居谷真理子

長岡京市 山田 葉子

八尾市 宮崎シマ子

八尾市 山根 妙子

奈良市 宇賀 史郎

羽曳野市 徳山みつこ

豊中市 水野 黒兎

紀の川市 宇野 幹子

弘前市 高瀬 霜石

男鹿市 伊藤のぶよし

和歌山市 古久保和子

唐津市 仁部 四郎

豊中市 江見 見清

大阪市 古今堂蕉子

藤井寺市 高田美代子

貝塚市 吉道あかね

四条畷市 吉岡 修

茨木市 島田 誠一

岡山市 永見 心咲

枚方市 海老池 洋

第5回 さんだ川柳大会

開催日 10月18日(火)

場所 キッピーモール6F (JR 三田駅南)

兼題 (席題なし・各題2句・欠席投句拝辞)

★「五」 田中 章子 選
 ★「無口」 山口 光久 選
 ★「化ける」 白川 淑子 選
 ★「やめて」 北野 哲男 選
 ★「メダル」 金川 宣子 選
 ★「自由吟」 堀 正和 選

会費 1000円(昼食は各自お済ませください)

12:00 開場 受付開始

13:00 出句締切 *選句
 *スポーツ吹き矢大会(先着30名)

14:00 披講開始 15:45 表彰

16:00 閉会

16:30 懇親会(先着50名 会費3000円)

主催 三田市川柳協会

連絡先 堀 正和

TEL 079-559-1255

田中 章子

TEL 079-720-8931

プレ国民文化祭

第88回 奈良県川柳大会

日時 10月30日(日) 11時30分開場

会場 橿原市商工経済会館 7F 大ホール

橿原市久米町652-2 TEL0744-28-4410

近鉄橿原神宮前駅東出口徒歩1分

(橿原ロイヤルホテル東隣)

宿題と選者 (各題2句)

「火」 山野 寿之 選
 「傾く」 太田のりこ 選
 「エール」 南 芳枝 選
 「怖い」 米田 恭昌 選
 「歴史」 笹倉 良一 選
 「帽子」 大楠 紀子 選
 「雲」 植野美津江 選

出句締切 13時

参加費 1500円(昼食は各自でお済ませください)

*欠席投句の方は定額小為替1000円同封の上、下記へ10月20日までに必着。

お問合せ・投句先

〒634-0831 橿原市曾我町729-18

西澤 知子 (TEL/FAX0744-25-0597)

主催 奈良県川柳連盟

平成28年度(第28回)

川柳塔碑合祀祭実施要領

本年度川柳塔碑合祀祭を左記の通り行いますので、ご参列賜りますようご案内申し上げます。

合祀祭日 平成28年11月12日(土) 雨天でも行います。

集合場所 南海電車 難波駅 3階中央改札前

集合時間 午前9時30分(川柳塔の茶色の旗をあげておきます)

乗車時間 特急「高野」午前10時発に乗車します。

事前申込者には割引周遊券月特急券(サービック)を購入しておきます。

会費 4,600円(往復乗車券および往きの特急券、昼食費)帰路の特急券は各自でご購入願います。

合祀祭会場 〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町高野山17

高野山霊園内 川柳塔碑前(奥の院下車徒歩5分)

大霊園事務所 電話0736-5612966

到着後すぐに法要を営みます(午後12時15分頃より約30分の予定)

合祀予定者(敬称略)

(平成27年8月〜28年7月までにご逝去された同人で高野山基金に参加されている方)

西内 朋月、牛尾 緑良、山崎 君子、粕山 隆盛
 水谷 正子、妻谷 重風、井上、桂作、小野句多留
 春城 年代

「もてなす」

根岸方子選

(投句 216名)



打ち水でもてなす露路の温かさ
お大師の心もてなす豆の飯
汲み立ての井戸水どうぞ召し上られ
もてなしは嫁に任せて笑つて
百歳の皺がもてなす村祭り
星空のおもてなしです流れ星
海碧く風がもてなす里帰り
はいおまけ人をそらさぬ小商人
客室の花瓶に匂を活けてある
復活の歓喜五輪のおもてなし
おもてなし世界が見てる五輪の日
手作りでもてなすこれが我が家流
四年先もてなす時間無い齡
下心あるらし今日のおもてなし
遍路旅一期一会のおもてなし
最高の笑顔とハグのおもてなし
もてなしはオリンピックの代名詞
飛び切りの笑顔と涼でおもてなし
無人駅手縫い座布団温かい
方言で客をもてなす道の駅

鳥取市	福西	茶子
大洲市	中居	善信
海南市	小谷	小雪
倉吉市	山中	康子
紀の川市	宇野	幹子
大阪市	宇都満知子	
河内長野市	木見谷孝代	
堺市	坂上	淳司
弘前市	福士	慕情
三田市	尾崎	一子
松江市	小川	注湖
横浜市	川島	良子
和歌山市	磯部	義雄
藤井寺市	若松	雅枝
大阪市	若本	安代
大阪市	古今堂蕉子	
豊中市	水野	黒兎
生駒市	飛永ふりこ	
三田市	谷口	修平
鳥取市	岸本	宏章

暑かったでしようと冷えたお茶が出る
手料理でおもてなしする蟬しぐれ
ご詠歌の列をもてなす心太
もてなしに心の奥が透けて見え
手料理が自慢の老母にかなわない
無人駅涼しい風のお出迎え
もてなしに溶け込む友も時止まる
もてなしに返す笑顔が海渡る
もてなしの仕方でわかる人の情
もてなしの笑顔は虹で出来ている
村まつり地酒で神をおもてなし
風流な人のもてなし夏の月

佳句

打ち水へ首長うして待つてます	香芝市	大内	朝子
おもてなしうちは焙じ茶だけですわ	大阪市	江島谷勝弘	
おもてなし心の中にあると知る	弘前市	稲見	則彦
神様のもてなしだろかピンコロリ	男鹿市	伊藤のぶよし	
ひと手間を惜しまぬ母のまつりずし	大阪府	米澤	俣子
そろそろと客見計らい水を打つ	堺市	澤井	敏治
その意味を世界が知ったおもてなし	高槻市	初代	正彦
もてなしは和食ニッポン人だもの	弘前市	高瀬	霜石
生まれ年ワインで会話ははずませる			

「ひんぱん」

(投句 221名)

菊 地 政 勝 選



ひとことが言えず未だに片思い
一言が尾ひれを付けて跳ね回る
ありがとうそのひとことと救われる
ひとことを添えて華やぐ贈り物
一言が足りず真意が届かない
ひとことが足りない父と多い母
ひとことが多くて友が遠くなる
ひとことの筈の祝辞に粘られる
ご免なさいひとこと言えば済むものを
一言がおもいやりにも凶器にも
一言の世辞が苦手で浮いている
寡黙だった亡父のひとこと身に沁みる
何気無い師の一言に救われる
おきまりのひとこと謝罪軽すぎる
ひとことに心が解けて滂沱する
一言が多い夜更けの冷蔵庫
ひと言が四角い波紋立てた通夜
無口だがたったひとこと重みあり
大切なひとこと二伸でたどりつき
アドリブのひと言物議醸し出す

札幌市	三浦 強一	八王子市	川名 洋子	大阪市	高杉 力	和歌山市	福井 菜摘	藤井寺市	若松 雅枝	大阪市	柴本 ばつは	堺市	遠山 唯教	豊橋市	藤田 千休	倉吉市	山中 康子	三田市	尾崎 一子	米子市	生田 和之	奈良県	谷川 憲	三田市	多田 雅尚	橋本市	石田 隆彦	鳥取県	門村 幸子	高槻市	原 洋志	堺市	澤井 敏治	鳥取県	池澤 大鯨	唐津市	仁部 四郎	奈良県	安福 和夫
-----	-------	------	-------	-----	------	------	-------	------	-------	-----	--------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------

タイミンク良いひとことで勝ちを呼ぶ
一言を呑み込む酒が苦かった
心ないひとこと弱者辱め

ひと言で言えとマイクの無責任
一言が銃より怖い武器になる
ひと言も聞き洩らすまい診断書

誰が看るそのひとことで皆黙る
どうしたのそのひとことを待つ生徒
ひとこととむけた私の古い皮

追伸にあなたが好きと書いておく
愛してる今だに言ったことはない
ニハオもハローも分かる奈良の鹿

佳 句
白寿でもサヨナラじゃなく又アシタ
グメンネでスーッと消えたつかえ棒

たかが金されど金イヤたかが金
元氣よいおはよう今日を晴れやかに
ここだけの愚痴がマイクに拾われる

人
補聴器にまず朗報が告げられる
ごめんねの一言胸の霧晴れる

地
天
自分史の最後に書こうありがとう
手ぶらでは帰らせないの合い言葉

和泉市 横山 捷也
三田市 北野 哲男
羽曳野市 永田 章司
橿原市 居谷真理子
三田市 福田 好子
羽曳野市 徳山みつこ
三田市 谷口 修平
大山市 関本かつ子
大阪市 古今堂蕉子
笠岡市 藤井 智史
倉吉市 中村 毅
三田市 堀 正和

男鹿市 伊藤のぶよし
横浜市 川島 良子
弘前市 高瀬 霜石
堺市 矢倉 五月
高槻市 初代 正彦
紀の川市 宇野 幹子

弘前市 福士 慕情
山口市 青木 隆子

軸

手ぶらでは帰らせないの合い言葉

初歩教室

題 手 本

山口 光 久

前号に続き、不朽洞の没句の中から麻生路郎先生がコメントされているのを紹介します。

遊覧船軍艦マーチで切るテープ

情景をありのままに叙述したというだけであって、所謂川柳味が無い。川柳には川柳の特異な味や匂いを持たねばならない。言い替えば、川柳の眼で物を観るということである。小林橙舎の

恋人の外はどうでもよいテープ

という句を深く味わってほしい。同じテープを詠んでも、こんなにも違うものかということが頷けるであろう。

船尾より出てゆく煙秋の湖

感じは良く出ているが、それ以上のあるものを持たない。川柳では、そのあるものを必要とするのである。それは人間臭さかも知れない。

怒りっぽくなつた此の頃胃が悪し

これは小主観の句であつて、単に健康状態を述べただけで、川柳としての面白味がない。「怒りっぽくなつた」というところまで読むと、その後を期待するが「胃が悪し」と続けられたのではぶち壊した感じ。下五を安易に詠んで、折角の構造をぶち壊す場合が多い。下五の重要性を十分認識しましょう

添削

次の七句は句として纏まっていますが、「ああ、そうですか」で終わつてしまい、ごく平凡になっていきます。選者や読者を惹きつける何かが足りません。作者の気持ち、心が欲しいのです。前述の麻生路郎先生がコメントされているところを読み直して下さい。

原 早くて安く旨い料理の手本買う (東)美智子

いろんな料理の本が出版されていますが、そんな中で、ズボラ人間の料理術という本があります。魔法使いの料理本。

添 早くて安く旨い料理は母の味

原 父母の背中が手本子供達

添 父母の背中が手本生真面目で

原 兄貴らしく手本になれと下が言う (松)五月

添 兄貴らしく手本になれと発破かけ

原 スポーツは記録が手本自己に勝つ 勝 治

添 スポーツは記録が手本ただ努力

原 習い事手本通りに選べない 英 男

添 習い事手本通りと悦に入る

原 お手本へ高なる鼓動まだ上がる 安 子

添 お手本へ高鳴る鼓動眠られず

原 有終の美を成す手本蟻の葬 (高)道 子

添 「蟻の葬」が解り難いです。

原 有終の美を成す手本夢成就 旅 人

添 お手本を置いて私の下手でいく

原 お手本を見ながら自分流の筆 真

添 師の技を体で学ぶ仕事人

原 お手本にしたいが古い母レシピ 由 美

添 「母レシピ」ではちょっと解り難い。

「母のレシピ」とすれば下六になります。

順序を入れ替えてみましょう。

添 お手本の母のレシピは古過ぎる

原 我が娘妻そっくりの嫌み言う 修 平

添 我が娘が子と決まっています。あえて「我が娘」としなくてもよいのです。

添 娘が育ち妻そっくりの嫌み言う

原 人生の生きる手本に母がいる 紀 美恵

添 人生の生きる手本は母である

原 外食で頭に入れよ盛付けを 開 子

添 外食でシェフの盛付け持ち帰る

原 父母の背よりスマホが感化する なつみ

添 父母の背よりスマホに感化され

原 下書きの手本はみ出る独自性

添 目を見張る手本はみ出る独自性

原 野採食肥満の手本アドバイス ミヨノ

「野採食」は「野菜食」です。

添 菜食が肥満の手本心得る

原 ケータイを持たぬ手本だ戦中派 ひとし

添 ケータイは持たない手本戦中派

原 付け焼き刃手本真似てもすぐ自我が 福貴子

添 付け焼き刃手本真似てもすぐ剥ける

原 育児書を手本に未完のママがいる (富) 恵子

育 児書は育児について書いた本ですから

お手本です。ダブリます。

添 育児書を手にし見習いママである

原 手本なく退位の願いやつと緒に (高) 敬子

陛 下の退位の事ですから「手本なく」は

ちよつと引つ掛かります。生前退位につい

ては、今までに例がないとか。

添 先例のない退位の願いやつと緒に

【少しの工夫で佳くなる句】

原 人生の手本だった父亡くす

中六になつています。

添 人生のお手本だった父亡くす

原 お手本は気にせず生き方私流

中八になつています。

添 お手本は気にせず生きる私流

原 筆使いばあばが教え墨を摺る

普通は筆遣いです。

添 筆遣いばあばが教え墨を摺る

原 先人を手本に家を守つて

添 ご先祖を手本に家を守つて

原 いい人との出逢い手本にしています

添 いい人に出逢い手本にしています

【入選句】

特攻を手本にしたか自爆テロ

娘たち祖母を手本によく動く

ひとことも言わず背中を見せた父

終戦日手本はすべて逆様に

お隣りの畑手本に野菜植え

路地大根手本を見せると根性

俺の背が手本と子等に言える日は

一度でも主婦の鑑と言われたい

編上げた服は手本と懸け離れ

手本見て努力したのに金釘か

忠実な弟子が手本を抜け出せぬ

講道館手本見せるぞりオ五輪

育児書も読まぬ子供がよく育ち

おさな児は母をみまねの箸つかい

定年後遠慮しないよ自分色

重利

山久子

義徳

(斎) 宏子

(畑) 節子

一彌

孔一

天翔

風露

保雄

和之

勝正

里子

まさる

秀光

手本まね苦心した字は死んでいる

父親は黙し語らず背で示す

生き方が下手で手本がちゆうに浮く

お手本はアナタと言つて喜ばす

【佳句】

お手本を穴が開くほどたたき込む

お手本と同じようには生きられぬ

憧れの師の技追つて半世紀

当面の目処は手本を越えること

丸くなる母の背中にある手本

【今月の推せん句】

仲良くていつも笑顔の父と母

山下 純子

平和な家庭は仲の良い両親が醸し出して

いるのです。笑顔の絶えない家庭。まさに

お手本でしょう。

穏やかに生きる手本は母の背な

存在が大きいです。子供は常に母親を見て

育つていけるのです。

手本からはみ出し伸びてゆく個性

有海 静枝

手本を真似ても所詮手本以上のものは望

めません。枠をはみ出してこそ個性は伸び

ていくのです。

【私の句】

喬

紀雄

山弘子

雄大

厚子

高弥生

明子

敏昭

昭枝



(投句223名)

熱かったりオ五輪も過ぎ去り、いよいよ次は東京だ!ということになる、あ

ちこちから聞こえて来るのは「それまで生きてるやろか」なんて笑えない話。

このごろつくづく思うのは、自分が幼かった頃におばあちゃんが言っていた言葉が、実感として我が身に降りかかって来ることです。

私だつて見てやるぞ、東京五輪。

三田市 堀 正和

秋日和 宇宙旅行をしませんか

(評)爽やかな秋の日に、こんなにさり気なく宇宙旅行なんて言えるとステキ。ひょとして雲を眺めるだけかも。

鳥取県 斉尾くにこ

好きだったまあるい底の人だった

(評)きつと心の広い人だったのでしょうね。(まあるい底)という表現に頷かれます。

ます。

紀の川市 辻内 次根
週二回ロトシックスを買っている

(評)宝くじとかロトシックスとか、とにかく買わなきゃ当たらない、これ当たり前のことながら深いコトバです。

和歌山市 古久保和子

雑巾を硬く絞って生きている

(評)含蓄のある表現、日常を背筋を伸ばし堅実に生きている様子が見て取れますね。

宝塚市 田中 章子

「山の目」にリュックを一つ買いました

(評)増えたんですよね、祭日が。そんな感動から遠い身としては、リュックを買った反応の早さが羨ましいです。

高槻市 片山かずお

鑑定に出し逸品になりました

(評)それらしい権威ある人が思いもよらない高額な査定をする、ガラクタ(失礼)が一気に逸品です。

大阪市 栃尾 奏子

秋深し恋とはパッチワークです

(評)うーん、なるほど。そう言われると思ひ当てるような、でも、決してツギハギのことではありませんよ。

橿原市 居谷真理子

樹木葬いいかも鳥が来てくれる

(評)小鳥がやって来て、かわいいう声で囀ってくれる。いいですね、それを思うだけで心が和みます。

紀の川市 楠原 富香
今時のバケツおしゃれに余念なし

(評)おしゃれに余念のないバケツ、ちよつとシユールで面白い発想。きつと昔風のバケツは苦々しく見ているのでは。

河内長野市 黒岩 靖博

外科内科眼科歯医者と言記帳

(評)各科で受診していると診察券でカード遊びが出来そう、なんて話を聞いたことがあります。日記に書くのも大変。

大阪市 平井美智子

洗うたび菌切れが悪くなる正義

わくわくを秘密にしたい喋りたい

西宮市 西口いわゑ

いっぱいでもうこぼれますこぼれます

わたくしの灰汁はなかなか抜けません

島取市 倉益 一瑤

落葉しきり身の置きどころ見失う

異仕掛けじつと獲物待っている

堺市 坂上 淳司

トイレの神様はきつと見ているよ

大山市 金子美千代

怖いもの不思議なものも見る角度

唐津市 仁郎 四郎

しばらくは押さえときます噴火口

三田市 北野 哲男

発酵をさせて作った言葉たち

大阪市 森 廣子

河内長野市 藤塚 克三
拭き掃除終わり一服秋を知る

大阪市 津守 柳伸
秋かぜが身にしみだしたシヨッピンゲ

和歌山市 上田 紀子
人生の午後の予定は風任せ

堺市 矢倉 五月
巢立たたせ後はふたりでゆらゆらと

明石市 桃谷 和郎
争いに目隠しをする平和ボケ

大阪市 岩本 安代
イチローの努力にそそぐ大拍手

笠岡市 藤井 智史
金運を呼び寄せるため掃除する

大阪市 磯島福貴子
水かけて右脳左脳を目覚めさす

鳥取市 山下 凱柳
逃げ足の早い論吉よサヨウナラ

河内長野市 大島ともこ
ひと仕事終えて脱力気持ちいい

大阪市 江島谷勝弘
危ないぞ時限爆弾かも知れぬ

羽曳野市 徳山みつこ
チチンブイ日銀券になれ木の葉

神戸市 奥澤洋次郎
生前退位私を生きてゆく余生

松江市 石橋 芳山
中東の汚れがひどくなってきた

香芝市 大内 朝子
夏休み雑巾掛けのお手伝い

奈良市 谷川 憲
へそくりの場所はしよちゅう変えている

四条畷市 吉岡 修
古粧の言いたいことがまだ消えぬ

河内長野市 谷 久美子
栗よりも松茸探すのに夢中

大阪市 笠嶋 恵美
頭の中こんなもんです秘密です

枚方市 海老池 洋
コップの中の風で揉めている夫婦

藤井寺市 鈴木いさお
ひとつずつ記憶が消えてゆく恐怖

大阪市 石橋 直子
継ぎ接ぎでいいから平和出ておいで

生駒市 飛永ふりこ
トランクにオーロラつめる旅土産

松山市 宮尾みのり
後の祭になると分かっちゃいたけれど

弘前市 吉川ひとし
ポケモンがよく現れるガード下

尾道市 大本 和子
始末してちよっぴり金を買いました

箕面市 出口セツ子
ブランドも金も要らない逝く準備

大阪市 田中ゆみ子
宴たけなわ女子会年は問いません

松山市 栗田 忠士
限りなくセレブの夢を追っている

神戸市 山崎 武彦
こんなにも地球汚れているんだね

大阪市 寺井 弘子
余生とは言うまい秋の靴を買う

枚方市 小林 わこ
預けている財布返してほしいなあ

弘前市 福士 慕情
逆縁の子にハラハラと散る落葉

鳥取市 土橋 螢
わたくしの都合で明日も日曜日

岡山市 永見 心咲
嫁入りに大枚はたく親狐

鳥取市 谷口回春子
見てくれのおおきさよりもまず中身

大阪市 井丸 昌紀
あの時も落葉が待っていたのです

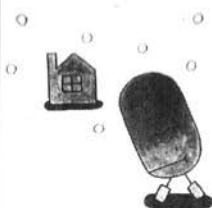
三田市 古今堂蕉子
ドレミファソ一曲五百円ですが

尼崎市 清水久美子
娘にも嫁にもあげた緋の着物

富田林市 中井 アキ
ゆつくりと進みゆつたりと愛になる

西宮市 亀岡 哲子
廃校の廊下磨いてありがとう

12月号発表 (10月15日締切)



(平本 勝彦 画)

柳箋に2句

川柳塔鑑賞

同人吟 山崎武彦

— 9月号から

掃除機でうつかり虫を吸って詫び

夏 目 一 粹

ゴキブリを見ただけで人格が変わる人が多い中、何と心優しい方なのでしょう。私には真似が出来ません。ホットさせられた一句をありがとう。

改憲のモードへ鳩が騒がしい

島田 誠 一

絵に描いた餅になったか安全も

古今堂 蕉 子

面舵へどんどん進む日本丸

藤井 宏 造

ニイタカヤマ登り滑落した歴史

三浦 強 一

先の参院選挙では改憲派が3分の2を越えました。四句を通じて、この国の将来に対する不安が余すことなく語られている。戦後生れも古稀を過ぎた今、あらためて日本丸の舵取りが問われているのです。ニイタカヤマに登った（登らされ

た）過去はキッチリ語り継がなければなりません。後生に憂いを残さないために……。

ラ・フランスに憧れ持っているリンゴ

山 本 希 久 子

ウエストとヒップの区別が付かない私にはよく解ります。同じ太目でもウエストあたりにラインの残るラ・フランスに私はなりたい。

遣り繰りはしますデートの誘いなら

繋ぐ手に合わせて弾むスニーカー

福西 茶 子

過ぎし日の追慕でしょうか。いいえ今もそう有りたいと願っておられるのです。

何時までも若々しく、艶っぽいこんな作品を創られる作者に拍手。これから前向きに、明るく生きたいものですね。

蝸牛と分ち合う梅雨の青野菜

岩 切 康 子

つい見過ごしてしまいそんな情景を巧

みに切り取られました。作者の心優しさがひしひしと感じられる一句。感動をありがとう。

あるがまま生きる姿を草に知る

池田 たか子

名もなき路傍の草も懸命に生きているのです。踏まれても、踏まれても、そんな一途さをご自身に投影され、頑張らねばと励まされているのです。

風に飛ぶ白い帽子と想い出と

薔薇の花ひっそり咲けぬから辛い

松本文子

二句を通じて、青春への追憶かと思つた。しかし作者は歳を重ねた（失礼）今も風に遊ぶ帽子であり、大輪の薔薇でありたいと願っておられるのです。その心意氣に乾杯しよう。

白い指ブルーチーズに赤ワイン

居谷 真理子

入道雲そろそろ父の忌が近い

太田 扶美代

この二句は共にすばらしいがその内容に共通点はない。「白い指」「入道雲」の上五句から発せられるそれぞれの想いに触発された下句（付句）とが微妙に響き

合、一連のドラマが生み出されているのです。流れるようなリズム感を大切に
する川柳は一般に一句一章（一句完結形）が多い。そんな中であって、見事な二句一章を創られた作者に拍手。深読みさせられた作品をありがとう。

約束の場所は土管のある空き地

森山文切

公園も、遊具もましてやゲーム機など何も無かった昭和、それでも戦後を逞しく生き抜いた世代にはなつかしい一句。土管と空き地が効いています。

有り難いこの町にまだ八百屋ある

土屋起世子

スケールメリットを求めスーパーは自分達の都合で合併を繰り返す。これも生き残りのためであろうか。何だかその町の個性まで失われていく一抹の淋しさ、そんな中、人との交流の場である昔ながらの八百屋さんに出合われました。ほっとさせられ気分ですね。

賞味期限過ぎて本当の夫婦味

寺川はじむ

夫婦の味は、単に歳月だけでは計れませんね。阿吽の呼吸とか、妻の出すブロッ

クサインを読み取るなど、これらは永遠の課題だと思う。頑張りましょう。

情念を閉じて語らぬおんな傘

久保田千代

常に前向きに明るく生き抜かんと願う気持がおんな傘に込められています。何時までも女でありたいと願う作者に乾杯。

散歩する犬が近所を広くする

福田好文

同感です。退職後は妻にご近所を教えられ、今では愛犬が教えてくれます。お陰様で娘より若い犬友も沢山でき大いに若返っています。

気がかりは気弱になつてきた頑固

米田恭昌

ご自分で気付いておられます。ご立派ですね。私は頑固を通り越し頑迷の域。この先どうなるやら心配です。

幸せな時間と思う朝ごはん

市坪武臣

糠床へおはようさんと言つてから

山口美穂

朝ごはんを腹一杯おいしく食べられるしあわせ。糠漬けの茄子の鮮やかな色香

を味わいながらの食事、最高ですね。二句を通じて今日も頑張ろうと言う決意が伝わって来ます。しかし食べ過ぎに注意、呉々も主治医に叱られないように。

ささやかな独りの自由医者通い

上垣キヨミ

予約予約と患者をがんじがらめにす

浅野房子

この歳になると医者通いも楽じゃない。同じ行くなら自分の意志で行きたいものです。一句目からはそんな「ゆとり」と作者の願望を感じました。二句目のように、どうせ予後の経過と称して各種の検査とその予約など主治医の言いなりになるのですから。いずれにしても頑張りましょう。

アベノミクスで儲けた人はおとなしい

岸本章

大企業やお金持ちに優しいと言われたアベノミクス。儲けた分はキッチン内部留保として溜め込まれました。安倍総理殿大企業はしたたかですぞ。逆に格差は一段と広がりました。この先どうなることやら。納得の一句をありがとう。

水煙抄鑑賞

— 9月号から

古久保 和子

笑つたら不思議な力湧いてきて

小林 若芽

何かで落ち込んでいても鏡に向つて無理にでも笑顔を作ると、くよくよしている自分が滑稽になってきます。笑いは前向きになる力の特効薬ですね。

心弾む若く見られたそれだけで

穂口 正子

お世辞と解つていても嬉しいものです。お話の切っ掛けにお歳などを話題にする時は、五歳位若く言うことをお勧めします。それ以上はかえつて失礼になると思います。

恋という交通事故に遭いました

真島 久美子

示談はもうお済みですか。今後の行方が気になる一句です。ちよつぱり羨ましい氣もします。

初恋は小鳥のようなキスでした

川名 洋子

小鳥は何処かへ飛んで行つたのですか。大切な思い出がどんな切っ掛けで、この一句として甦つたのでしょうか。

始めたら終わらせ方が難しい

平賀 国和

何事も締め括りが大事。政治家の様々なスキヤンダルも言い訳を重ねて見苦しい限りです。「立つ鳥跡を濁さず」で在りたいものです。

節約とケチの違いはハートです

中村 毅

その通りと、拍手を送りたい気持ちです。上手に楽しく暮らすことをモットーにして、作者の様な視線で身の回りの事に目をやると、とても川柳が楽しくなりそうです。

建前と本音はわたしでも違つ

田中 天翔

とても正直な方ですね。本音で生きると角が立つことも、建前ばかりで暮らすと肩が凝る。両方を上手に使い分けなければ暮せない社会にストレスが溜まるばかりです。

旧友に逢つてつくろう空元氣

鍋嶋 澄子

久しぶりの再会に、少し脚色をしたあれこれを語り合いながら楽しいひと時に、多分、お相手も同じ思いに違いありません。辛いこと、しんどいことを、切り捨てて話しているうちに、本当の元氣が湧いてくるような氣がしませんか。共感の出来る一句に出会うことができました。

通販が届いたほどの幸せ度

三谷 松太郎

通販は居ながらに何でも揃うので便利なことは確かです。しかし店に出向いて店員さんと会話をしながら選んだ一品に比べれば感激が少ないような氣がしてなりません。幸せ度のバロメーターを通販で計るとは新しい視点です。

のたりのたり海は充電するのです

柳田 かおる

海は次の何のために充電をしているのでしょうか。穏やかな波のうねりを充電と氣付いた着眼点は新鮮です。のたりのたりの海を擬人法と考えると味わい深いものです。

『麻生路郎読本』余滴 (37)

「新川柳」の路郎 ③

桑 原 道 夫

「新川柳」四八号（明治44年12月）の「各地通信」に路郎の書簡が掲載されているが、すでに、「矢車」と路郎作品①（「川柳塔」平成27年6月号）で紹介済みなので、こちらを見ていただきたい。

路郎は、日本橋の樋口金屏風店に勤めるため、明治44年8月18日に上京し下谷区に下宿したが、二箇月後には日本橋区の樋口金屏風店に下宿先を変えていた。

四九号（明治45年1月）に、路郎は、「川柳と下谷」を発表している。

〈川柳と下谷は私の最近の思ひ出なのである。其の日その日が煙のやうにパツパツと消えて下谷の秋が何時の間に日本橋の冬に入つた。下谷の秋の淋しさを思ふ時日本橋の冬は明るい。今晚、偶と下谷の寓居で書いた羅紗紙の雜記帳「其の日其の

日」をみてあの頃を偲んだ。小品や短詩や色々な作品がある。その内に川柳が二百餘句ある、この儘葬つて了ふのも惜しいやうな氣があるので發表することにした。（四四、一一、一八）

青い顔白い手をして散文詩
雜記帳藝者の年が書いてあり
兩方で受取らぬ金塵を浴び
膝頭撫でゝ淋しい秋を知り
金貸して迄拵へる遊び連れ
又散つたあれ又散つた淋しがる
淺草を出ると淋しい男なり
美しい悲しい別れ發車なり
五圓札バタバタバタと崩れけり
口笛は淋しい刹那偶と出づる

五二号（明治45年4月）には、「櫻でも」六句を発表している。

空想に疲るゝ夜ありべんを投ぐ
想はずに居れば遠くで三味がなり
櫻でも咲けばと思ふ日もあれど
イライラと生きてゆく日の春も憂し
ボンヤリと生く吾が輪廓の薄からむ
ボツボと揺らぐ灯のやはらかさ春は春

同号の「各地通信」に、路郎の書簡が掲載されている。

（春雨が暮なしに降る、一寸出てもシツボリ濡れる。

大阪では直線に降る雨も東京では斜線に降る。處變れば品變る横濱は如何に。

俵が忍び足でゆく、蝙蝠傘がゆく、蛇の目が泣く。番傘をキリキリ廻してゆく、傘もさ、ずにすましてゆく。荷馬が通る。足駄の齒入屋が通る。下女が通る。自動車走。雨は降つても途切れない人通り。そのうちに電燈が点く、火鉢を抱いて欠伸をする、欠伸が續くと眠くなる、ぺんを握つてみたが何をかくでもない、持ちまへの悪口を仕入の文章体でかく位が落だ。

*1 默葉氏の「灯ともして秋の夕べを黙し居ぬ」は自ら言ふが如く多少陳腐であると言ひたいが大々的陳腐だ、説明するまでもないと思ふ。あれよりは「マツチ摺つて燃え行く儘を熟視しぬ」の方が遙かにましだ。けれども叙法が拙いので未製品たることはまぬがれぬ。思想を吐露しさへすれば詩になるものだと思へば大きに間違だとは誰れでも言ふことだ。

兩眼鏡がよく見えるといった處で矢張りレ

レンズを合はす必要である、緊縮した句をのぞむのはレンズの焼點を見出すのと少しも變らない、一つのレンズの焼點は一つしかない、間に合はせの名詞や動詞や形容詞で出来上つた詩は、例令實感を歌つた詩であつても文字の上にはあらはれた詩に過ぎない、作家の心裡に映じた詩想が第二者に異なつた意味に受入れられるのは作家自から感想の表現法が拙劣なのに依る場合が多い。これは默葉氏一人に言ふのではないが折角の詩想を今少したるみのない句にしたらと思つたのでつい長談義をしてしまつた。叙法がどんなに拙いかといふことは未見の人のことであるから差し控えておくが九州では最も有望な作家であると思つたのでつい失敬なことを書いた。外にへちまといふ作家があつたが作品が餘りない。「囚人も出来て運河の起工式」は雜報川柳であつて詩としては別問題である。

*2「新川柳」の最近の作品は荷十君の感想斷片の評と同感だ、ますます努力せられんことをのぞむ、句以外の作品に面白いものがあるが別に文壇の傑作として推奨する程のものもないから評は止します。膽版の雜誌に要する勞力を新川柳に傾注してはいかがです、いらぬお世話だといへばそれまでですが同じやうな顔ぶれであるものをこしらへてゐるのはつまらないじやありませんか、主義が異へば例令トウシヤバンでも出して好いが同主義の連中がよつて二つの雜誌經營は愚かな話だ、又同じやうなことを「みなと」がはじめた。これ等の人はつまり雜誌をこしらへるといふ趣味の人であつて眞に川柳の研究を思つてゐる人でないのかも知れない、兎に角川柳社は是等の統一をして益々新川柳の發展を計られんことを希望します、乍末筆毎度新川柳を送つて頂いてありがたう、二三日の内に詩稿を送ります、四月號には間に合ふでせう、もうとつぷり暮れてしまいました、雨はやはり降つてゐます。

四十五年三月四日 麻生路郎

東京にて

注してはいかがです、いらぬお世話だといへばそれまでですが同じやうな顔ぶれであるものをこしらへてゐるのはつまらないじやありませんか、主義が異へば例令トウシヤバンでも出して好いが同主義の連中がよつて二つの雜誌經營は愚かな話だ、又同じやうなことを「みなと」がはじめた。これ等の人はつまり雜誌をこしらへるといふ趣味の人であつて眞に川柳の研究を思つてゐる人でないのかも知れない、兎に角川柳社は是等の統一をして益々新川柳の發展を計られんことを希望します、乍末筆毎度新川柳を送つて頂いてありがたう、二三日の内に詩稿を送ります、四月號には間に合ふでせう、もうとつぷり暮れてしまいました、雨はやはり降つてゐます。

*1 四九号（明治45年1月）の「矢車派と鶴派の方へ」で、近藤京魚は、「鶴」

（此の句を得た君の心持は此の句に伴ふ詩興があつたに違ひないが、活字になつて私の前へ來ると其の詩興と云ふものが朦朧としてゐる、夫れはホンの少しばかり君が此の句を得た時の狀態や心理が此の句を通して浮びはするが極めて少してボンヤリとしてゐる、詰り此の句には夫れに伴ふ詩興が現はれてゐない、淡い感じと云ふ調法な評語を以てすれば此の句に價値は出て來やうが、私に言はせれば此の句は詩興と云ふ魂を入られた空殻である、斯かる作句の方法を是認するならば其の説が伺ひたい。）

京魚の疑問に対して、默葉は五一号（明治45年3月）の「京魚氏に答ふ」で、次のように回答している。

（先づ此句を得た場合を曰わふ、無論一人である、今度は始めから何の物に凝つていた（自分は書見していた）が其れにも飽いて火桶を囲んだ、けれども無聊な頭に過去の印象やまた空想など湧いてくる、而し古い事柄丈け懊惱に落入るといふ程でもないが頭腦からは離れ得ぬ、而して其様（筆者註）

「な」の脱落か? 事を思ひながら手先きでは、手元にあるマツチを取つて、無意味に摺つて見た、其の燃え行くのを見てゐる間文け、以前の事柄が頭腦から自然に他動的に忘れられてゐる、といふ利那の感じを著叙(「直叙」の誤りか? 未詳。御教示を乞う)したものである、(中略)

京魚氏曰く「僅かの詩興があつたろうが朦朧で君が此句を得た時の心理状態が浮びはするが云々……」は以上説明の中の領域に必ず適合してゐると思ふ、又「淡い感じ」といふ調法な評語云々……」は氏には淡い感じよりなかつたのであるが又こゝにいふ経路を辿つた事がないとも言へるのである。

(中略) 氏の云ふ淡い感じ云々は已に一部認められたる感じであつて其の深淺は其の頭腦の程度に一致する事は前文已に明白に了解される、故拙作が一人よがりとも言はれない、

又、私は句の表面から直に感興を起さず様な淺薄な句は好まない、考へて見せる位な強烈な刺戟美を與へる句を好んでいる、従つて私もそう云ふ傾向

で作句し、個性の發揮に努力してゐる、而して、第二者に強い感動的詩興を起さしめんとしている、改めて云ふが私の云ふ第二者は讀者じやない、詩を解する人である、

近い例が京魚氏の

囚人も出来て運河の起工式

などは好かぬ、即ち表面のみの句で内的動作も句(即ち十七字内)に表現し盡している、此経路は誰もやつてゐる川柳の経路で幾分古いものだ、私の経路とは違ふのである、又

灯として秋の夕を默しいぬ

といふ拙句に對して、京魚氏は「い、句だ」と云われたそうだが、秋の夕などは悲哀なものと云ふ共通詩想で多少陳腐だ、自分にすると此句より前二句の方が苦心した積りである、此の差が質問の發した原因であらふ

* 2 「新川柳」五一号(明治45年3月)の「感想斷片」で、荷十は次のように述べてゐる。

(前略) 今の川柳の作品には力がこもつてゐない、易すやすと苦勞もせず作つたもの、やうに思はれる。文藝

の作品はそんなに容易に出来るものではないのに、獨り川柳のみが、たわいもなく出来る道理が無いのである。作家が自分の官能なり情緒なりを再現せんとて力を入れて作つたものなれば、モット緊縮した所謂たるみの無い作品が出来やうと思ふ。爰に私は作品の解剖をして其缺點を示す余裕を有たないから、詳しい事は云へないが、近頃目につくのは下五をわざと引き伸した句である、作者には失禮ながら例を云へば

書き初めをする子は未し三十の春

一番に入り得し朝の錢湯が嬉し

のやうな物で、それから句尾に「たい」と欲望で結んだもの即ち

雪の降る日を竹馬に乗つて見たい

現代の女性虛榮を咀つて(筆者註

「咀つて」の誤りか?) やりた

の類で、これ等は何とか外に表現の工夫がありさうなものと思はれる。要するに川柳があまり手輕に扱はれてゐる、苦しみやうな足らない、今少し落ついて作品に振り返つて見る必要があると思ふ。(次回に続く)



死を詠う

静岡「たかね川柳会」前会長の加藤鯉さんが亡くなられたのは今年の1月25日。前の日に「はい、また奇蹟を信じて下さい。踏ん張りますー」というメールを買っていただけに、計報を受けたときはショックでした。

それから42日後の3月6日は西大寺川柳大会でした。この大会の帰途、山道で自損事故を起こし車は大破しました。車は廃車になりましたが私自身は奇蹟的に無傷でした。

翌日の塔社会議と月例会には急遽JRに変更しました。出かける前に郵便受けから新聞を取り出し車中で開きますと、M歌壇の加藤治郎選のトップは次のようなものでした。

ぼくなんか生きながらえて

なぜきが死ぬのだろうか火に落ちる雪 木下龍也

前夜の事故を思い、その偶然にしばらく茫然としました。

私は現在73歳。鯉さんは51歳。これからの川柳界を担ってゆく逸材と期待されていながら病魔に攫われてしまった。「なぜきが？」という想いを代弁してくれた一首でした。

稀に「死を題材にした句は作りたくない」とか、「死・計・葬などの字は縁起悪いので使わない」という人がおられます。

しかし、死や葬儀は人間の営みの中でも避けて通れぬ重要なことの一つです。そして、川柳は人間の営みを詠う文芸ですから、逃げることなく向き合いたいものです。

昔々の山友なりし計が届く
友の死を遠く見送る家族葬

春城 年代
福島 弘子

そういえば友は半分ほど死んだ
師の訃報冬がそこまで来た気配
夫逝きあの世がぐんと近くなる

チューブから解き放たれて逝った母

高齢になるにつれて、次々と訃報が届くようになります。

前途ある若者が亡くなるのは理不尽で受け入れがたいものですが、同年齢の友人や恩師との別れは「仕方がない」と諦める他はなく、時が癒してくれるのを待つだけです。

友人知人との別れも辛いものですが、近親者や家族の死は身を切られるほどの痛みを伴います。良かれと思った延命措置も、当人にとっては辛いものだったかもしれません。

次の次ぐらいが僕のお葬式

天国へ歩いてゆける距離にいる

死に上手言われる死に方がしたい

死に方を学べば学ぶほど死ぬ

長生きをすればさみしいお葬式

一斉に開く告別式の傘

身近な人たちの別れが続くと、「いずれ自分も……」と思うのは誰しも同じ。「次の次ぐらい」と覚悟していても、順番が来ると「その次の次」になるでしょう。死に方を研究しても望み通りに逝けるかどうかは天にお任せするしかありません。

めでたく長生きをすると友人の参列者がいない「寂しい葬儀」になる恐れあり。柩の人に傘は不要ですが、生きてゆかねばならない人には必需品。傘を開いてグッドバイです。

なお本欄No45の「哀しいを川柳にぶつける」も共通のテーマを取り扱っています。参考にしてください。

桑名 孝雄

山田 葉子

笠嶋 惠美

足立千恵子

中居 善信

吉岡 修

黒田 茂代

藤井 則彦

高瀬 霜石

森山 文切

『ネオンきらきら』

井 丸 昌 紀 著

前 たもつ

井丸昌紀川柳句集『ネオンきらきら』を開いたとたん、新鮮な風を感じた。それもそのはず昨年現役を定年退職し、引き続き職場にいる現役川柳人である。

仕事をしながら、産経学園の川柳カルチャーに通い、土曜日、夜開催の数句会の会員になっている熱心な川柳愛好家である。

橘高薫風先生が「課題吟を感じさせない句はよい句である」と評されたが、昌紀さんの句はその好例である。

住めば地獄ロマンチックな坂の町
親切な人に道聞き遅刻する
義理チョコを配る女の無表情
店長がうんちく麺がのびてゆく
まつすぐな道が続いて身構える

昌紀句集には、特にユーモア、ペーソ

スの漂う佳句が目立ち、人間性に引き込まれ読んでしまう。

なんぼしたおばちゃんきつと聞いてくる
紙切れを一枚もらう給料日
まっすぐに走っていると思つてた
福袋去年の福が詰めてある
切り札のつもりジョーカー握つてた
時の針逆に回つてくれないか
金尽きるところでちやうど死ねたらな

この句集は、「黄信号」「ネオンきらきら」「春の宵」からなる。

「黄信号」は人生の機微とでも言おうか。

自動改札行きも帰りも裁かれる
切り札を持つてゐるような顔をする
下り坂登つてゐると思つてた
待ちぼうけのろのろ進む花時計
ものさしを変えて愉快に生きている
何を隠そうB型ですが几帳面

黄信号おいでおいでと呼んでいる

「ネオンきらきら」の章は、人生ただ今謳歌中。酒の句が多い。褒められるとうれしくなつて舞い上がつてしまふと本人曰く。

飲みなはれあんだの金で好きなだけ
夕されば水も我慢し待つビール
乗り換える駅に馴染みの店がある
男にはよろけて行かぬ千鳥足
あの約束した時僕は酔つていた
ノーベル賞酒がきらいになる薬
毒少し混ぜてあります美味しい酒
生きるのに意味はいらない今日の酒
ネオンきらきらちよつと漂ふことにする

「春の宵」

もう半分 まだ半分かも知れぬ
散る時に備えしつかり咲く桜
誕生した罪死をもつて償う
もうひとり後ろにゐると思つてた
明日は明日今日をしつかり呼吸する
許したが許す言葉が見つからず
僕にだけ弱みを見せてくれた父
春の宵書き出してみる母の恩

この句集は戦後の高度成長期を企業戦士として生き抜き、今や還暦を迎え、父母の報恩を忘れず、川柳を楽しむゆとり

の句集である。
川柳塔社直系の南大阪川柳会の副会長として、また薫風師の最後の愛弟子としての自負が、句の端々に見られ、今後の飛躍を感じさせる句集である。

本社 九月句会

◇九月七日(水) 午後一時
アウイーナ 大阪

台風の影響で不安定な空模様の日、九月句会は百二十四名(投句十一名)の参加で開催された。句会に先立ち、過日亡くなられた元相談役波多野五楽庵さん(弘前市)同人高島啓子さん(京都市)に黙祷を捧げた。

今月のお話は岩佐タン吉さん。題は「柳行一致」の世界をめざして。無論「柳行一致」とは「言行一致」をもじったタン吉さんの造語である。お話は、私達が作句する時、詠みたい、書きたい事を自由に表現しているだろうか、という問いかけで始まった。かつて戦争へと進む時代に、不屈の川柳を作り続けた鶴彬に学び、何よりも暮らしを、平和の大切さを詠むことを、自ら実践しておられるタン吉さんの強い訴えが胸に響いた時間であった。声なき声などと私は言わさない。タン吉

月間賞は緒方美津子さん(西宮市)
(司会)蕉子・真理子(協理)千代・勝弘
(受付)紀雄・満知子(清記)憲彦

席題「台風」 松原 寿子 選

台風の日今日もニュースになる都知事
台風の眼の中ボケモンGOと居る
色々買ったが台風それはった
台風にもめげぬ復興への絆
つまらない男と風呼ぶ女

台風に続くミサイル狙い打つ
台風の中郵便物が届いてる
台風の日今日も日本を狙う
10号の後ろに8号がいるやこしき
台風は無視されている大阪府
女名前の台風だったもう昔

哲夫 万紗子 俣子 握夢 勝弘 ばっは 日の出

台風のおかげで始発まで飲める
台風はルール違反でやってくる
台風は気まぐれボクの上手ゆく
ひと夏の恋あれば台風だったかも
台風の日とじゃれている予報官
台風より怖いミサイル北の国
台風が過ぎるまで猫抱いている
台風は射程外れの複雑さ

台風に河童の皿も割れました
台風の日の中に居る君と僕
妻の怒り台風になり攻めてくる
乱が好き台風が好き血が躍る
六甲から台風荒れるタイガース

保州 ひとみ 富子 完司 黒兎 小宏 雪 敏治 いさお 狸月 篤

台風のような女が来て去った
台風に嫌われ助かっている近畿
ミサイル発射台風の目になりたくて
台風も東シナ海避けている
敬老に孫という名の暴風雨
台風の異変北国大被害

台風に耐えて男になっていく
台風に耐えて男になっていく
度過ぎた豪雨禍に泣く賢治の詩
一升瓶据えて台風迎え撃つ
軸 反転へ激しい風雨緩み出す

洋 淳司 完司

台風馴れ故郷は四国海のそば
台風の日玉の様なおやじです
マメ台風暴れ回っている寝顔
迷走の台風君も酔っぱらい
錯覚の平和台風の日の中で

直樹 五月 月子 憲彦 真理子 裕之 良子 信子 楓楽 喜八郎 ふりこ まつお 妙子 朝子 あや子 眞澄 はこべ 六子 堅坊 シマ子 廣子 葉子 無限 理恵

完司 淳司

兼題「病氣」 板尾 奏子 選

愛国者ですよ公営賭博病
戦争をしたいという病氣
嫌な日は飯病で休む宮仕え
病名は使い果たしたズル休み
病氣だと片付けられるのはごめん
病氣などフックパンチで吹っ飛ばす
今のごお見舞に行く側ですが
骨粗鬆症主治医も舌を噛みました
酒は可という病魔なら友になる
病名は違うが同じ処方箋
病氣とは言わず加齢と医者言う
自己チューもいけずも病氣だと思ふ
はほビョーキ五分黙っていられない
母さんを一人占めする風邪三日
診察室わたしより皆元氣そう
良い方に見れば病氣も軽くなる
ネガティブに支配されてるノイローゼ
人のエゴぶつかり合つて病む地球
いよいよのときはきつぱり断酒する
病氣には負けぬ更新するブログ
病氣かな文句言わないおかあちゃん
病棟に深夜のナース頼もしい
認知症も寝たきりもある長寿国
救急車他人の顔で聞いている

四郎 一步 准一 と一な 信子 妙子 保州 久仁雄 恵 敏治 久美子 真理子 朱夏 文代 裕之 文代 富子 直樹 蘭幸 裕之 黒兎 保州 紀華

吞んでいます365日
病氣に感謝元に戻った夫婦仲
病葉をふるい落して冬を待つ
退院が近づく友へファッション誌
新葉ができた モルモットが死んだ
病歴を優しく探る問診書
退院が決まり夕陽が美しい
一病と仲良く同居して元氣
病床のペンは命を走らせる
音もなく時を壊してゆく病
生きろ生きろと騒がしい処方箋
重病の妻の手しかと取る祈り
君が好きたまらないほど君が好き
佳 腎臓の一つアナタにならあげる
闘病へ家族ひとつになる絆
弱つる時に神様売りに来る
大家族病氣も逃げるにぎやかさ
医療費の増加に備え四股を踏む
人 生きている三分の粥のうまいこと
地 児の病名裂いて捨てたいこのカルテ
天 退院の一步を大地受けとめる
軸 秋めいて恋の病はいま佳境

勝弘 宏子 小雪 隆昭 無限 正彦 俣子 美智代 郁夫 富美子 希久子 洋 勝弘 朱夏 朝子 克己 宏造 小雪 章子 ばっは 黒兎

ケンカしても布団がふたつ敷いてある 一步
ふたつない命は酒と変えられぬ (奥)五月
お月さまがふたつに見えろまで飲んだ 一步
あの頃は笑い合つてたベアカップ
アンパンも妻と折半する歳に
二枚目の舌は取り扱い注意
お箸は二膳仏とふたり食う夕餉
丁寧に生きるふたつとない命
好きだから二つ返事で引き受ける
繊細で大胆両方ともわたし
一ツ貫いますと二ツ持つて行く
愛敬か美女か意見真つ二つ
飲んだ酒でもう一軒の家が建つ
ひとつとは言いにくいのでふたつ買う
両方でしつかり聞けと耳ふたつ
二股をかけて両方とも振られ
大と小ふたつ有るからややこしい
黄身二つちよつと得した氣の卵
酒好きで不器用なのは瓜ふたつ
恋の傷ふたつあります古日記
上の下トイレがあつて良い暮し
昼弁当ふたつ作つていく娘
雷が見事ふたつに裂く大樹
饅頭とお酒が恐い恐いボク

勝弘 ばっは 俣子 哲子 あや子 唯教 ひろ子 憲彦 玄也 たもつ 満知子 篤 茂 握夢 扶美代 由一 楓 楽 と一な 眞澄 哲男 廣子 一步

兼題「ふたつ」 両川 無限 選

欲を出し二つ欲しがるから捕れる
玄関をふたつ作って同居する

兼題「歪む」 山崎 武彦 選

生きてきた証のように歪む背な
母さんが歪むと家中が歪む
法律の歪んだとこに居るためき
歪めると9条元に戻せない
枯れたって男結びは歪まない
直線をちよいと歪めてはくそえむ
口歪めばかんムンクの血の叫び
伊万里焼歪むくほみに寂の技
内心はとも一途な臍曲がり
安いかしの字くの字のきゅうり買う
苦しくて歪む 嬉しくても歪む
孫の描くばあばムンクによく似てる
三十七度街中顔が歪んでる

ふたつ目はあたり見回す試食品
くさされているのかクシャミ二つする

公約は残念ながら歪みます
知事選にトップが歪む自民党
お陽さまの下で伸びたい五葉松
歪んではいても胡瓜は胡瓜です
隣国となんでこうまで歪むのか
ストレスに歪むもしない妻の背な
人間の都合で歪む松の枝
そこそこの歪みに思い出が匂う
6の字に成ったキュウリが自信作
金釘流だからピンとくるのです
にこにこ聞いて信念曲げぬやつ
大津波に海の表情すぐ歪む
まんまるに見えないのです今日の月
もう後期たるみ歪みになる個性
お月様まんまるなんて嘘です
落日の道に歪んだ影法師
目に見えぬ汚染に歪む昼の月
心根が歪むと人相までゆがむ
歪めてはならない九条のころろ
泣き顔を映して歪む水鏡
日中韓共に歪んだめがね越し
歪んだ顔鏡に罪はありません
歪んでるのは僕の眼鏡か世の中か
右の頬手加減なしでつねられる

菓子ふたつ姉は小さい方を取る
握手より両手のハグがなお熱い
ふたごころきつと天使も持っている
ひとりからふたりになって又ひとり

四郎
五月
キヨミ
英 旺
一 歩
正 彦
ひろ子
わ こ
はこ
敏 治
唯 教
ひとみ
哲 男
理 恵
希久子
敏 治
朝 子
いさお
朱 夏
誠 一
眞 澄
進
まつお

すみ子
哲 子
狸 月
とーな
ばっは
理 恵
直 樹
ふりこ
清久美子
喜八郎
章 子
耕 治

井の蓋にたくあん2つ乗る
ふたつの顔般若と天女使いわけ
おばはんが三人饅頭はふたつ
ティーカップひとつはあなた居た場所に
幸せは乳房がちゃんとふたつある

妙
富 子
木明 子
蕉 子
いさお
耕 治
あや子

喜八郎
喜八郎
靖 鬼
富美子
寿 之

見解の相違答えがふたつある
指笛を二つ吹いたら秋になる
駅弁をふたつ気楽な自由席
耳の穴二つで言葉すり抜ける
弱点を二つ見つけて好きになる

六 点
喜八郎
天 笑
かずお
宏 造
完 司
昌 代

千代

もう誰も頼らぬ力痛ふたつ
地 誰も頼らぬ力痛ふたつ
何もかもふたつ楽しい小宇宙
天 待つ人がひとりいるのでふたつ買う
軸 軸

完 司
昌 代

握 夢

あんな馬鹿知るか大根真つぶたつ

まつお

握 夢

兼題「ヒヤリ」

嶋澤喜八郎 選

ママチャリがおんぶだつこすり抜ける
 サークス本番地震も本番だと知った
 駅ホームヒヤリヒヤリと白い杖
 気が付けば回りの車向きが逆
 着陸をやりなおすのアナウンス
 首筋の刃は妻の手であつた
 ボケモンGO左右前後に目もくれず
 崩壊で失速一瞬肝冷やす
 グラスの中カシヤリ氷の解ける音
 年金の浮き輪に穴があいていた
 大いびき急に止つて胸騒ぎ
 大病院紹介すると言う主治医
 さりげない気遣いコップが冷えている
 吊り橋の真ん中でしたプロポーズ
 予定表の明日の欄が真っ白だ
 バックミラーにバトカーが写つて
 大丈夫だろうか朽ちかけたベンチ
 アイサイト機能が欲しい私です
 首つりに良い紐やなとつぶやかれ
 マンションの杭にヒヤリとしています
 昨日から風と遊んでいるのです
 何度かのヒヤリもあつて道になる
 ケータイがずり車内の風ヒヤリ
 あの人が近寄つて来る襟正す

英 旺
 公 輔
 英 夫
 篤
 耕 治
 哲 夫
 久 仁 雄
 克 己
 千 恵 子
 郁 夫
 日の出
 保 州
 握 夢
 あや子
 信 子
 俣 子
 小 雪
 花 門
 蕉 子
 進
 信 子
 ダン吉
 和 夫
 裕 之

ベランダに秋が正座をしてる朝
 電話が鳴るとヒヤリ電話が鳴るとヒヤリ
 うとうとへケトルの音が殺気立つ
 手のひらへヒヤリきのうが縋せている
 同じ罪どうか渡り終えた橋
 魚捌き乍ら咎めてくる浮気
 首筋ヒヤリ九条が危ないぞ
 僕宛に薔薇が送られて来てヒヤリ
 夏の扉にはさまれたまま 尻尾
 つまずいて底の見えない淵のぞく
 揺れるたび震度気になっている日本
 すわテロか網棚にある忘れ物
 婆ちゃんになった鏡は正直だ

佳
 アドリブは下手で転んでばかりいる
 突然の図星へ眩暈とまらな
 時として他人行儀な妻の語尾
 痛点にヒヤリと落ちてくる言葉
 転落の椅子は三本足だった
 手術室はくの名前が違つて
 誰か居る渡り廊下の突当り
 天
 言い勝つてヒヤリ冷たい腋の下
 軸
 朝顔に本音をもらしそうになる

真理子
 蘭 幸
 (清)久美子
 昌 代
 理 恵
 (矢)五 月
 希 久 子
 瑠 美 子
 蕉 子
 洋 次 郎
 唯 教
 篤
 妙
 あや子
 寿 子
 好
 無 限
 無 限
 たもつ
 万 紗 子
 楓 楽
 目先ばかり読んで足元隙だらけ
 信念の人ニンジンに目もくれず
 まず目先の夫片付け大掃除
 サプライズの拍手目先を変えただけに
 反省をすればいいのに二日酔い
 とりあえず痛みをとつてくれますか
 終電は近いカラオケまだ続く
 鬱からの脱皮は目先変えるだけ
 大企業蹴つて気楽にフリーター
 枝豆と冷やつこの先におでん
 目の前の闇に騙されてはならぬ
 極楽を見据えて楽し南無阿弥陀
 目先の色にすぐ引っぱられるの 私
 目の前の夫の顔がさすみ出す
 本を読む目先を広くするために
 目先を変えてみる悪い人いない
 目先の欲に狂うたツケがどつとくる
 人參をぶら下げないと走れない
 今はただあなたを信じたいのです
 優勝が近づくカーブ女子増える
 タマゴだけ買えば良かった特売日
 老いてなお目先を変えてみる勇氣
 目先変えたらみんなが食べてくれた茄子
 手の届くところにみーんな居てくれる

たもつ
 玄 也
 宏 子
 理 恵
 奏 子
 眞 澄
 まつお
 富 美 子
 俣 子
 葉 子
 眞理子
 由 一
 わ こ
 富 子
 堅 坊
 信 二
 公 輔
 葉 子
 ひとみ
 (和)和 夫
 ひとみ
 黒 兎
 希 久 子
 扶 美 代

兼題「目 先」

小島 蘭幸 選

将来を見据えて今日は本を読む
取り敢えず次の年金まで生きる
足許に防災グッズ置いている
目先きくあれが弱点にもなろう
おどと目先が読めぬまま朝に
確約は一週間先ぐらいまで
退位より僕の退職後のくらし
先が見えなくて空を仰いでいる
目の前を見るからアップアップする
酒の力で目先ごまかす亡父だった
豪邸も車庫のベンツも今が旬
取り敢えず盾にはなつてあげるから
濁流は要らない飲み水が欲しい

佳

いい子して長生きよりも今の酒
顔上げてごらんよ海が見えるから
指切りで丸く納めておきました
優勝は来年でいいタイガース
目と鼻の先は切ない距離である

人

八日目の蟬には宙があるばかり

地

かもめ舞う目先にクナシリが浮かぶ

天

リオはリオ私は私なすび焼く 緒方美津子

軸

真赤激 遂にマジック1となり

裕 完 唯 昌 丹 完 裕
司 司 教 代 吉 司 司
(矢) 五 月 月 月 月 月
篤 子 子 子 子 子
良 信 宏 誠 矢 明
子 子 子 子 子
(木) 五 月 月 月 月

句会 燦 燦

八月句会を読む

岩 崎 眞里子

母の日記に大きく戦争が終わる

八・六海が覚えていた悲鳴

忘れたいけど心が記憶する

開放感あふれる夏ではあるが、八月は重い。空が海が、汗が

覚えている。そして忘れちゃいけないと蟬が鳴いている。

苦海とも知らずに産声を上げる

ソプラノで悲鳴アルトで愚痴を言う

逆風をくると追い追いつく風に変える

確かに、地震や台風の様状を思えば、この世は苦海かも知れ

ない。でも、悲鳴と愚痴をソプラノやアルトと表現するユーモ

アには、逆風を追い風へと変える力がある。

選ぶ度決断力がついてくる

一回りするたび友達が増えた

廃校とは知らず記念樹伸びつつけ

迷いの深さを知った決断の姿は熱く友を惹きつける。そんな

日々を過ごした学舎はもう無く、記念樹が風に吹かれている。

傷口が痒いそろそろ出直そう

スタートはみんな笑っていたようだ

矢印のように瘡蓋が取れた。明日へ踏み出す時期のようだ。

何度目であろうと、スタートはみんな笑顔なのだ。

羽田着このくつろぎは世界一

青い目の僧衣溶けこむ座禅堂

近年特に日本の平和は貴重だと思ふ。今、己と対峙する座禅や

心鎮める写経など、国を超えて広まっている。そんな個々の小

さな行為が、この星の平和を支えていると信じたい。

宏 造

とーな

哲 子

進

希 久 子

良 子

利 子

扶 美 代

黒 兎

朱 夏

蘭 幸

修

直 樹

おどろき増し

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

覚悟きめ強い相手に体当たり
窮地から捨て身で閃いた奇策
分婉台捨て身で命生むのです
捨て身にて泳いでみたが無理だった
身を捨てた過去など早く忘れなよ
捨て身だと言つてぬけぬけする浮気
裸一貫死に物狂い子育て期
ロシア抜き金が倍増りオ五輪
遺産分け兄嫁だけは蚊帳の外
父さんがキッチンにいる上機嫌
機嫌良い相づちに負け喋りすぎ
笑つて妻が一番美しい
ただ今の機嫌で解る子の疲れ
天候の機嫌で変わる予定表
敗北に機嫌直しの酒二合
陣取り合戦開まっている小さい島
困る群衆支持者と限らない

敏 晴 満 作 たかこ 公平 里子 昌紀 ばっは 舞蹴 日の出 舞夢 大子 としお 満寿恵 美 籠 志津子 克己

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

他人の分食べてちやつかり知らん顔
飯の世に生きてちやつかり遊び惚け
隙をみてチャッカリ血吸う蚊の姉妹
ちやつかりと斜めに切つていく言葉
野良猫がちやつかり五匹居候
ちやつかりも過ぎると都知事風になる
堅物に見せてチャッカリ撮み食い

芳 香 朝 子 直 子 福 貴子 勝 弘 妙 子 美 世子 賀 世子 重 信 シマ子 満 知子 宏 造 ゆみ子 一 歩 ふりこ 安 代 かりん 保 州 美 美子 重 利 清 義 人 完 司 節 子

笑顔だと人がだんだん寄つてくる
囲まれてみたいと思うかすみ草
田舎暮らし自然の中におく余生
卓袱台がそつと見ていた我が家の史
女性には囲まれたことなかったな
読み終えて心を満たす囲み記事
カレンダー赤丸囲む大事な日
わだかまり捨てたら軽い里の風
抱きしめて愛しき人の軽きこと
髪カット少し暑さ軽くなる
誰だったかな軽い会釈を交わしつつ
風鈴の音色の軽さ涼を呼ぶ
家族皆元氣財布は軽いけど
軍事情が五兆と軽く言わないで
支え合いみんなて囲む介護です
引く術も覚え肩の荷軽くする
抱き上げた母の軽さが手に残り
お国のために散つた遺骨が軽すぎる

玲 坊 野 蒜 美 ッ 千 久 芽 代 道 子 照 彦 石 花 菜 恭 子 久 江 滋 幹 啓 くにこ 三 津 子 貴 恵 龍 枝 公 恵 重 忠 紀 美 恵 紀 の 治 悦 子 芳 光

きやらばく川柳会(鳥取) 成田 雨奇報

枯れ山をコブシの花が春を呼ぶ
マドンナは障子五センチ開けていた
夏野菜春の嵐でべっしょんこ
毎日を一人で過ごす趣味をして

あやこ 雨 奇 汪 かね子

明日から頑張ることにして眠る

紀の治

くまもんが踏ん張っているすぐ行こう

桐子

行き違い席を譲って行った人

恵子

物忘れするからこの世生きられる

正二

居眠りを誘ってもらう五月晴れ

多美子

きつと待ってくださっている向う岸

千代

爽やかな緑の新芽が目にも染みる

登実枝

築六十年家も私もそこそこに

初枝

ひとり様何を食べよう昼ごはん

治代

人生はすべてが感謝ありがとう

ひろこ

コマーシャル出だした力士負けがこむ

宏之

歌の会雨に降られてより深まり

美草

笛をかけて猪との勝負

美佐子

たましいは髪の前まであり生きる

瑞枝

半世紀庭を守るか古灯籠

美智子

お昼前激しく踊る腹の虫

美穂

五月雨の小石ころころ難儀坂

ゆたか

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦

右脳を突つた少年の草笛

芳生

喜びをしつとりと煮る小豆煮る

島

笹笛が吹けたあの日の青い空

則彦

ガイドブックになつてあげるよこれからも

重虎

こちんまり生きる喜び胸に抱く

風来坊

子に遣すガイドブックを編んでいる

美鈴

曲り角いつでもいます母の笛

井蛙

口笛とハーモニカならまだ吹ける

京子

逝つた友よ聞こえてますか祭り笛

洋子

流木に命吹き込む鑿の技

花匠

口コミはガイドブックにない名所

隆樹

きりきりと締めた帯から蝶が舞う

慕情

笛太鼓ググッと睨むねぶたの目

一呑

傷だらけのガイドブックを子に託す

柳子

煽てられ笛まで吹いたかすみ草

ひとし

初恋の胸の痛みにじつと耐え

小とみ

老い先を視ているような虎落笛

黙人

転勤地きりきり国になりました

龍馬

本よりもスマホ片手に独り旅

のぶし

入つたよほらね昔のジープパンが

規子

ガイドブック案内人が熊見張る

つとむ

夏祭りきりきり舞のハネト行く

吞舟

眠れずに御前0時の音の中

初枝

意味不明辞書には載つてない造語

ふさふ

マニユアルの通りにいかぬ夢を抱く

花峯

夢二描く絵にはならない猫を抱く

氏加子

所得税拂わぬ派手な裏家業

一花

温暖化ビールはいつも冷えている

霜石

一年生孫を只今焙煎中

和香子

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

ほんものの鬼だやっぱよく笑う

和子

エトセトラそこに私は括られる

知香

あなたなら出来ると人は軽く言う

悦子

すり鉢の底から妻のリズミカル

明子

片山 かずお 選

相談の締めは神サマ仏サマ

五欲まだあつて彼岸は視野に無い(矢)

騙されておこう気遣いされた嘘

円満に見ざる言わざる逆らわず

歳月が優しく忘れさせて呉れ

サービス料見ると満足度が下がる

口ずさむ歌で青春追いかける

待つ時は時計の動き遅くなる

廃屋がどうするのかと問いかける

船出の子舳先の向きは信じよう

美津子

邦代

陽之助

悦子

安代

輝恵

清帆

玄也

直樹

五月

佳句地十選 (9月号から)

久保田 千代 選

ちよつとずつ譲つて丸い輪を作る

騙されて小骨ささつたまま踊る

騙されておこう気遣いされた嘘

シャワーの音娘は泣いているらしい

健やかに身の丈生きて満たされる

札束を積んで政治を汚される

ストレスを捨てておいでと文もらう

ゆつたりと構えて負けをみとめる

美しいものの一つに深い礼

戦後期を生きた昭和のねばり腰

泰子

若芽

玄也

理恵

賢子

准一

いさお

いわゑ

一歩

黒兎

好い事があるとスキップしてしまう
 無重力ふわり明日の風になる
 ハイハイと引き受け夜も眠れない
 お気軽にどうぞと如才ない扉
 世を軽く見すぎたために無一文
 足取りも軽い私の嬉しい日
 まごころをバケツ一杯差し上げる
 ボランテアのバケツ善意が光ってる
 バケツから鳴咽が漏れてくる別れ
 砂を吐く浅蜷の私語を聞くバケツ
 記憶力バケツに穴があいている
 幸せはバケツ半分あればいい
 炎天下のバケツの水も泣いている
 バケツ蹴る何をあわだつ少年よ
 蹴つ飛ばすためのバケツを置くベンチ
 かあさんと生きたバケツは聞き上手
 人生はきつちりいかぬ時刻表
 薬草履ききつちり結ぶ初舞台
 きつちりと揃えた靴が欠伸する
 きつちりと付けが回ってきた悪事
 家計簿にきつちり見える主婦の顔
 こだわりを捨てて足取り軽くなる
 きつちりと結んだ帯にある覚悟
 きつちりと結んだ口がものを言う
 まつたりと生きてきつちりした暮し
 弱肉強食味方のいない都市砂漠
 聴診器味方に今日も飛び跳ねる

富香 幹子 起世子 八重子 久 幸子 碧 章子 美羽 菜摘 次根 千鶴 日出男 智三 義泰 義雄 美枝子 絹子 みね よしこ 敏照 昭枝 昇 みつ江 純子 当代

不意打ちの怖い味方のうしろ指
 信じてる背を押す味方居ることを
 敵味方みんな包んだ人の幅
 いざという時には消えていた味方

川柳塔なら

大久保眞澄報

父さんのハンドル軽い退院日
 青い目が舞子気分的人力車
 救急車老いた二人の御用達
 ポンコツの車なだめて長い旅
 情熱をいっぱい溜めている車輪
 車間距離とって笑顔を絶やさない
 口車乗ってのはしごを外される
 奈良の町一度乗りたい人力車
 プリン体ゼロ選んでるビール党
 先ず一杯ビールに優るものはない
 ビールさ飲ませておけば文句ない
 一本のビール分けあう夜の幸
 まずビール言われたビール耳にタコ
 口角に泡女子会の大ジョッキ
 冷やかされそれがうれしいウエディング
 冷え性の足が夫に忍び寄る
 冷静になろう意地より人として
 冷静に大人見ている子供の目
 トランプなら世界はさらに冷えてくる
 冷戦でも食事にだけは手を抜かず
 地下足袋が似合う男のかき氷

寂子 ひろ子 准一 保州 恭昌 富子 眞澄 將文 惠美子 辰雄 貫一 博一 勝弘 紀雄 すみれ 美智子 崇明 理恵 賛郎 甚之市 柁子 妙 倫 奈津子 完次

冷酒からぼとりと盃に恋しなく
 感謝するへとへとながら八十路越え
 過労死を跨いで喘ぐ葉つ葉服
 ノルマを競う片減りの靴
 へとへとを超えて掴んだ根性
 尽き果てたゴール無情のインタビュ
 へとへとに妻に寄り添い恩返し
 一時間超えた難病難手術
 へとへとで眺めた山頂の日の出
 センサーに車が世話をかけすぎる

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目一粹報

ふりこ 美代子 國治 盛隆 薫 弘子 史郎 萌子 和夫 洋々 一瑤 無限 美佐枝 節子 金祥 凱柳 悦子 静夫 蟹郎 野蒜 天翔 回春子 清信 振作

冗談を言つたつもりがあら図星
ドッカン骨折だけで助けられ

逢いに行く一直線の炎となつて
ライバルの図星をにぎり勝ちに行く

ドッカンと大きな山を当ててやる
良心もちよつぱり見える悍ましき

美しい蝶で話題の絶え間ない
びつたりの図星に策を練り直す

ピカドンの季節ケロイドまだ疼く
ドッカンと上げた火花が開かない

血だらけのテロテロテロがおぞましい
悍ましや人を殺してみたかった

勝ち誇る薄ら笑いが悍ましい
クラス会それぞれ違う錆び加減

悍ましい事実小説より奇なり
ドッカンと夏だジャンボだ宝くじ

出世した子は親を捨て村を捨て
ドッカンと大法螺吹いて消えてゆく

あら嫌だ図星へ殿のご立腹
そつぱくな蟻の列などないだろう

(方言「そつぱく」は粗雑、そつけないの意)
京都塔の会

山田 葉子報
すれすれの痛をセーフにしたカルテ

煮て作る老人食と離乳食
京都ざらい読んで京都に来たくなり

幼い恋愛みついている北の駅
弥生 美佐子 昭

真理子

千枝子

雅女

圭一郎

将

菖子

妻子

地佳平

茶人

楓花

とも湖

昌鼓

善平

龍彦

鳥が運んだ思わぬ花が庭に咲く
P.L.の花火名残りに上ります

父だけに煮物一品酒のあて
人肌に飢えて屋台の大根煮

ヘアピンカーブすれすれ避ける対向車
私費公費すれすれにあるランチ代

お座敷ですれすれタッチ野球ケン
大国らしくメダル欲しいとドーピング

ごった煮のような家族で仲が良い
わたし抜きで遊ぶ話が煮えている

すれすれの君のジョークが脇を突く
円陣を組んで気合を入れ直す

ストレスも情けも煮込むおでん鍋
遅れて来て煮つめた話蒸し返す

わが家では生前退位して久し
約束をどうにかすれすれで守る

授業料払いバイトとサークルと
すれすれの疑惑に揺れるドーピング

階段をロングの裾が掃除する
紛糾の会議煮つまるお昼前

すれすれのところで外した上り株
梅雨明けへ煮沸のフキンよく笑う

ポケモンの餌は何かとおじいちゃん
サークルを止めれば待つている孤独

スピーチが長いビールの泡が消え
竹原川柳会(広島)

古田 太虚報
比ろ志

泰夫

弘子

義昭

肇

哲子

保子

かずお

満子

葉子

ふりこ

光久

洋志

福子

英旺

屋上に灯りが点いて大ジョッキ
夕食に妻と呑んでる小型缶

ビールぐらい自分で出して妻の背が
旅ひとりビールの底に明日がある

祝杯のビールの泡が消えている
満天の星を飲み込む大ジョッキ

しあわせが刻々ととけるかき水
かち割りの琥珀のグラスひとりの夜

白熊に水送ると孫の言い
薄水を踏むようだった母昭和

返事はノーですグラスの水溶け
薄水を競って踏んで通学路

路や豆姑の書き置けレシビ本
本当の心の介護嫁に観る

本処分出来ず断捨離はかどらず
雨降ればいつも本読む父だった

手本にもなれず老後をまだ生きる
五千本を目指したイチローのバット

亡父の城昭和の匂う本並ぶ
花は皆立居振舞分かつてる

笑顔が消えた夫に娘がハグをする
選挙カー一台も来ぬ町はずれ

クローバー幸せそうににぎやかだ
気が早いもうランドセル決めました

南大阪川柳会
津守 柳伸報

キャスターの天気予報で服さだめ
タカ子

笹舟

半徳

笑子

鬼焼

蘭幸

栄香

敬子

汎美

淑子

京子

幸子

慶子

弘子

輝恵

キヤスターになりたい孫の夢無限
キヤスター付きバグバグ氾濫觀光地

武臣
国和

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報

川柳ささやま(兵庫)

北澤 稠民報

下の世話するヘルバーさんに掌を合わす

シマ子

ゆつくりとゆつくりと効く母の灸

初恵

終戦の涙を知るやお盆くる

かほろ

尊敬申し上げますとふられてる

恭昌

哀しみを時がゆつくり和らげる

ひかり

酒でのむ葉開発してほしい

哲男

尊敬する友あり教え何時も請う

ルイ子

よく囁んでゆつくり食べよと諭す母

放任

一票にともかく明日を賭けてみる

稠民

失つて尊い恩を知る教師

一歩

残照の畦をゆつくり辿る鍬

弘

私の一護手当はいつのこと

真由

かぎりある尊い命みがきかけ

更紗

泣き笑いゆつくり登る八十路坂

いさむ

湯気ごしの露天の向こう皆美人

開子

一粒の米に尊い汗が染み

克己

ゆつくりと歩幅合わせる老いの道

よしみ

祭りまで待つかと一升びん眺め

可住

近すぎて尊い人に気がつかず

たもつ

息継ぎが出来る間は泳がねば

完司

夜の車庫各自愛車が主の秘話

幸子

テロやれと尊い神は言わぬ筈

いさお

荒海を泳ぎまあるい石になり

一粋

好きだったお花供えて墓参り

照代

小さい胸思いつめたら破裂する

あさ子

円い石悔し涙の跡がある

一瑤

夏の夜に計報悲しくピアノ聴く

善輔

命短し絶叫する蟬しぐれ

弘子

長居客カウントダウン妻の角

公子

神の愛信じていますテロに死す

さゆ子

脳みそを爆発させて吐く一句

東風

悔しいが顔に答がすぐにでる

美恵子

陽が照って気まぐれゲリラ嘘のよう

雅美

要注意阿蘇もわたしも活火山

志華子

早くでカウントとられ負けました

蟹郎

安いから中国産に違いない

遡行

さりげなく寄り添う子等の自立心

柳伸

歌のようカウントしてする保育園

たぬ

長生きをしたけりや酒を断てなんて

まみ子

寄り添つて登れば壁が低くなる

栄子

目でしかられ痛さ心にしみてくる

清帆

公約を疑いながら票を入れ

三樹夫

ギャルみこし燃えつきそうな声だして

ばっは

耕作地カウントできる程となり

幸安

無理無理と一応辞退したけれど

美千代

謝罪の場風物詩まで昇華され

弘委智

三途の川泳げるうちに逝きたいな

敏子

いよいよか働きた過ぎた腰を撫で

かつ子

朝顔が笑顔で着てる夏の色

郁夫

悔しいがほんとのことを言っている

雅女

赤鬼も青鬼も居る酒の席

淳司

紫陽花にチームワークを教えられ

昌紀

悔しいな銭があるのに老いてくる

弘子

第3のビール僕のカラダにフィットする

弘光

標識の影に隠れて青を待つ

実

色褪せた人形過去を語りだす

天翔

二十番目世界遺産の美術館

悦夫

ちよつとだけ曲がってみよか古稀だもの

勝弘

人形が罪もないのに箱の中

昌子

干からびたみみずくに水をそつとかけ
酒樽を抱いて飲んべえ寝てござる
赤提灯なぜか引かれる誘蛾灯
あのサルが手柄を重ね天下人
絶妙な間で保つてる夫婦仲
アルバムの中で私は若いまま
育毛よりせめて減毛防げたら
酒飲みの中元歳暮世話いらす
平凡な暮らしを保つ台所

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

柳歩報

和代 克三 政夫 一彌 清乃 久美子 正子 五月

左手の器用さ使い甲子園
勿体ないが使い勝手がいい夫
転ぶなど氣遣う孫の手が温い
思い出を使って君を引き寄せる
使うより金のねうちをはかになし
使い捨て孫は上手におまふこと
人使い旨い言葉に乗せられる
今日も又笑われぬ字を書くつもり
丁寧にしまし遊んできた記憶
ハミングで丁寧にはぐラッピング
丁寧に予定をこなす蜘蛛の糸
丁寧な招待状でちとブルー
丁寧な説明が要る朝帰り
最敬礼頭上げれば風ばかり
怠けもの取れたボタンをつけている
怠けてる訳ではないと休耕田

注湖 桂子 幸子 たけし ミツコ 静枝 ひふみ 邦代 芳山 孝子 久枝 博子 弘充 畔 ちえこ 千里

雑草が怠ける俺に喝入れる
長寿には怠け心が薬です
許してる妻は知ってる下手な嘘
偽物を上手に造る中国語
にせさつをつかうところがありません
「オレオレ」と言われて俺もだまされた
冷房のなか偽の夏過ぎてゆく
嘘ばかりあの世はないと言う坊主
坊主は多く布施とりもうけてる
昔の子男は坊主女子オカッパ
かみのけがちくちく出てる水えいほう
エンマ様坊主頭と握手する
しゃしゃり出る坊主の腹は真つ黒け

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

絶滅種させた日本の食文化
木漏れ日のちよつと眩しいハンモック
スパイスをズラリ並べて夏の膳
女物の浴衣でステテコ素敵ね
手が出ない素敵な服は試着だけ
天然の鰻の長い旅思う
もう一度大きな声で母を呼ぶ
スタート台ズラリと並ぶ好敵手
アベノミクス三本ズラリみんなダメ
素敵だなえくぼに恋を溜めている
朝焼けの眩しさの中神がいる
素敵です洋服だけが褒められる

あきら とも子 ゆき 雪代 ひすい 俊子 知恵子 柳歩 輝山 哲子 紗季 久絵 美智子 弘子 和子 美ツ千 孔美子 ゆり子 盛桜 螢 重忠 照彦 八重 小鹿 実満

嫁にややらん何度言つても分らんか蟹郎
仏壇にうなぎ供える事は無い
ロマン追う男眩しく見えた日々
生きているズラリも道のまだ途中
うなぎ食べ熱中症を乗り越える
上手より下手が眩しい隠し芸
年金の出る日うなぎの命日に
過去の罪並べて妻の訴状来る

蟹郎 すみれ かおる 富久江 京 満 恒 茶子

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

手を合わせコンセント抜く今日のひと
耳打ちに選ばれ秋の夜長かな
鬼門にはちゃんと柵植えてある
ベースメーカーが予期せぬ恋をする
オリンピックメダル感動涙ふく

四郎 高明 蜂朗 節子

富柳会(大阪)

関 よしみ報

前列の中央に居て乾されてる
ありがたういえこちらこそささどうぞ
望まれて嫁に来た苦茄子胡瓜
傷口が乾けば痛さより痒み
落ちるだけ落ちて掴んだ赤い糸
夏が好き喉の乾きに生ビール
嬶やかに心の乾き癒やす恋
自我やつと芽吹き始めた三歳児
スタミナを溜めて待つ誘い水
木洩れ日に綴るわたしの過去未来

伸雄 正治 田鶴子 常男 慶子 清 壽峰 高鷺 澄子 朋子

人として生きる情を小道具に

どのように出来るか不思議落花生

木洩れ日のシャワーに自分取り戻す

九州に笑顔を送るボランティア

天と地の狭間で人だけが乾く

自分史の落丁にある火の匂い

炎えそうな形になって影法師

隅っこの花にも木洩れ日はやさし

木洩れ日キラキラ心の梅雨を脱ぐ

浴衣着て女の意地をさばく裾

盥蘭盆の先祖が帰る茄子の馬

木洩れ日に濡れたあの日をそっと干す

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

身を粉にし働く泥に光る汗

安倍さんの笑顔に見えた改憲法

この一発に我が社の明暗を賭ける

どうにかなるでしょう泥は被ります

泥んこになって遊んだ昭和の子

泥船に国民乗せる戦争法

古稀過ぎて笑って暮し寿命伸び

恋人の張り手一発驚いた

泥被る覚悟で拳手をする勇氣

一発に期待ふくらむ甲子園

泥の中から蓮は美人の装いで

顔に泥ぬって美人になれる技

今も笑う笑う門には笑い皺

仁

武人

恵

一文

奏子

寿之

晴美

扶美代

アキ

よしみ

欣之

森子

川柳同友会(大阪)永田 章司報

高鷲

ちづる

シルク

みつこ

清

ひろ介

一文

真一

欣之

安男

ヨシ枝

千鶴子

アヤ子

亡き父の愛でし白靴バナマ帽

泥かぶった父に感謝の墓参り

やり直しは出来ぬ最後の一発だ

見栄っ張り笑っておこう泣くもんか

一発も二発も欲しいタイガース

かあさんが笑うとリビングが和む

ソフトからハードに泥沼が乾く

一発の見合いで決めた今の妻

一発屋言われし人は今いずこ

笑いには長寿のくすり持っている

泥被る覚悟踵は返さない

必殺の一撃のド真ん中

川柳同友会(大阪)永田 章司報

雑草が荒野に花園を作り

再会へ指折り鏡拭き直す

おーい影よ腰を曲げずについてこい

腕組みを解いて嫁入り許す父

仕舞湯にまんぼうになり灰汁をぬく

足るを知るわかつているがまた掴む

頼りない苗床なれど子は育ち

廃屋に記念樹だけが咲き誇る

わがままな時間たっぷりあるひとり

介護保険妻はさつさと使い出す

熱中症予防もかねて図書館へ

勝ちたいを負けたくないに切り替える

美喜

喜久子

泰子

登志子

さくら

いさお

森子

洋一

かつ美

フジ

仁

壽峰

章司

川柳同友会(大阪)永田 章司報

和代

安子

一聴

茂子

澄子

葵

亜矢

真帆

信子

和之

昭子

章子

油断した腕がどんどん錆びてゆく

海の日がそうだったのか箸を置く

半分こした弟が先に逝き

千切れても親は振ってる応援旗

肩書きを捨てて自由になるクラゲ

死んでよい人などいない高齢化

はたる川柳同好会(大阪)水野 黒兔報

車椅子使わぬままに終わりたい

運転はしません好きに飲みたくて

ケールブーカー乗って頂上夕涼み

あの人と車間距離まだ縮まらず

夕食を作るのも俺片付けも

なににする作る気のある妻元氣

紙面から話題作りのヒント得る

宿題の手作り品は親子製

夏休みパパが張り切る朝ご飯

ころんでも作り笑顔で耐えてる子

戦止め平和にしたい青い星

夏休み自然に触れて思い出を

窓閉めていても飛び込む蟬の声

窓ひとつ隔ててノラとベットの差

長柳会(大阪)辻村 ヒロ報

物忘れ夫と競うアレやコレ

甘言を畀と知らずに引き込まれ

畀仕掛け取れた獲物は雑魚ばかり

華蓮

陽子

一眸

美恵子

遊子

公弘

桂子

勝

正子

美佐子

信男

守啓

郁子

長一

純子

奈津子

堅坊

柳童

春代

黒兔

辻村 ヒロ報

ヒロ

洋二

たけし

窓からの景色を愛でた終の床
どしやぶりに相合傘で雨やどり
小池ショー緩めず暴けドンの闇
仲良しの秘訣程良い距離保つ
適度な距離保ち続ける難しさ
お手柄は妻に譲って平和主義
母さんの自慢あなたを産んだこと
九条は保持昭和遺産という宝
衣なびかせバイクで檀家回る僧
盆終わり足腰疲れ医者通い
忘却と思慕ふる里の遠花火
盆近く浮き浮きしだす先祖様
お帰りとそつと写真をなぞる指

城北川柳会(大阪) 近藤

護岸工事川の遊びとメダカ消す
ジグザグに心の声の善と悪
一人ひとり何か役立ち生きている
近代のなまずですます土用丑
生き急ぐようなテンポで世が動く
おおげさに川柳の良さを話した日
ひとかけの雲の日影を追いかける
いつ寝るの昼甲子園夜はリオ
難民が続くジグザグの国境線
隙間から芽吹く雑草の生きざま
誘惑の水際でふと目がさめる
右往左往息たえだえの資本主義

旅人 靖博 辰男 孝代 ともこ ふみ 正博 直樹 淳司 正美 和子 隆彦 純風 榮子 千恵子 たもつ 五月 弘委智 美智子 節子 いさお 賢子 朝子 勝弘

正報

これ以上脱ぐものも無いこの暑さ
蟬が言う七日の恋の邪魔するな
編隊のトンボ空襲を想い出す
薬漬け何が効いたか分からない
夏痩せを期待しながら大ジョッキ
サルビアが咲いて真夏日プレゼント
娘が美人たまたま僕に似たらしい
金足らぬとは勇氣を足してみる
長寿万歳生きよ生きよと蟬しぐれ
語り部と同じ齢の八月忌
酔うてへんゆうてジグザグ歩いてる
川底にきらり真夏の恋がある
ジグザグの人生行路に風は無い
ジグザグの自分の影に蹴躓く
ボケットにたまたま一つあった夢
少年はジグザグ嫌い一直線
たまたまでないイチローの大記録
立ち寄った辺地に暮らし根を生やす
喜寿迎えジグザグなみち感無量

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

昂たよりに葦編み船を漕ぐロマン
もう少しこの世にいます天の川
同じ星見上げる遺骨元兵士
コロンブスきつと見ていた七つ星
小さい星見つけた一歩踏みだそう

高志 杖香 克己 和 堅坊 佐津乃 一步 志華子 麗 あさ子 洋志 縣笹 郁夫 公子 野鶴 義昭 寛昭 正 鈍甲 誠 哲男 美智子

流れ星お前も仲間外れかな
頂点を極め淋しい椅子を抱く
刎頸の友逝き淋し一人酒
くちびるが薄い淋しい人だらう
片隅にくすぶる露草の吐息
辛いとき淋しい背中になっている
白黒をつけて淋しい風が吹く
八日目と思えば淋しいしぐれ
淋しいかなかなか電話切らぬ友
命なら幾つもあるとゲーム漬け
ゲラ刷りの生命線に朱を入れる
炎天下命の溶けて瘦せる音
戦ノー一句に命かけた人
産道を抜けて命の無限大
長命のコツかも知れぬ笑い皺
被爆写真の中で呻いている命
瀬戸際を何度も抜けた命です
丁寧生きて命を使いきる
惚れこんだあなたに歩調あわせまず
歩調などとはいいない蟻の列
目標が出来ると早くなる歩調
改憲へ歩調揃っていく不安
せつかちとスローテンポの五十年
幸せと歩調合わせている笑顔
非正規のとなと定まらない歩調
都議選で策を弄して自民負け

(松)秀夫 (石)ひろ子 壽峰 久美子 紀乃 康信 惠美子 穩夫 克己 敏子 眞澄 留里恵 ダン吉 高鷲 隆昭 廣子 (川)武 すみ子 美津子 たもつ 栄子 栄夫 (松)英夫 (松)浩子 朝子 堅坊 一文

難民で夢の舞台に立つ選手
核無くし世界平和の鐘鳴らす
冤罪が晴れて眩しい夏の空
酒タバコ止めた男の葉濱け

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

猛暑日も涼しさ越えるこの財布
「水」旗誘われてゆく鯛焼屋
年重ね涼しき人は頼もしい
鍾乳洞若き二人が涼取る手
根を張って小鴨の里の土になる
根回しの上手な妻に使われる
毛細根大樹支える底力
根を張った大樹は苦勞語らない
根性を見せて爽快金メダル
それみろと向う岸から笑つとる
それみろとどこかで父母の声がする
それみろ借金するなど言うたのに
それみろと云われる前に考える
イギリスのEU離脱反省も
それみたか衝動買いが部屋の隅
母ちゃんの小言ボディに効いて来る
お出かけは右の足から第一歩
低い鼻こだわりバフで塗り立てる
こだわって婚期を逸し嫁がぬ娘
こだわらず悠々自適生きていく

鮎子
善之
いさお
祥昭

次男
雄大
玲子
恭子
風露
紀美恵
萩江
美知江
醉芙蓉
石花菜
瑞子
重忠
英子
けいこ
茂夫
野蒜
由紀子
日出子
智恵子
康子

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

前見頃こだわり北へ避けて干す
釣れなけりや釣れなくていい海を釣る
罵声浴び下がる投手の胸の内
喝采を浴びて三歳初舞台
浴びるのは酒とシャワーと妻の愚痴
ほどきたい絆もあつてむずかしい
初盆に絆確かめ酒をのむ
断捨離も絆に引かれ滞る
かううじてつなぎ止めるは子の力
批判浴び残る任期を棒に振る
視線浴び義務と権利を十八で
快い言葉絆と言う響き
浴びるほどビールが飲みたいこの暑さ
ああ云えばこう云う言葉浴びせかけ
おしやべりも損する話題避けたがる
川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報
いつまでも消えぬ星あり原爆忌
金の卵変身重ね白髪なり
月華美人みじかい命咲きほこる
蟬時雨短い命夏の宴
髪型を短く変えてチャレンジャー
金1号とても嬉しい知らせです
鉛筆が折れて予感全没だ

祐子
照彦
薫報
昭好
みちる
薫

笑子
やすの
敬子
あや乃
正太郎
風
勇太郎
陽
泰子
克茂
比ろ志
佐紀子
紀華
柳明
雪菜
芳香
初音

短バンが妖しく段を駆け登る
図書館が避暑地に変わる街の夏
夕立を花はうつむきやり過ぐす
あいたいな帰つておいで孟蘭盆会
鏡台の裏にも金はない我が家
虫の飛ぶ道を知つて蜘蛛の網
自慢げにボケ方競う老人会
青春は徒手空拳で始まった
美人薄命私の妻は長生きだ
ショートメール私の心鷲つかみ
札束と折り合いつけて行く寿命
両方が折れて相手をほめている
紆余曲折やつと手にした母子手帖
紆余曲折積もる涙を花とする
放射能浴びる平和とひきかえに
折れること知って器量がでかくなり
まあいいかちよと若いし美人やし
挫折した日を練り直し強くなる
金欠は不治の病の家系です

豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報

ブランドー加えポンチにする西瓜
支えたらいい気になって甘え出す
だらだらと夫婦の会話さかのぼる
耳打ちをされて大臣答弁し
息抜きと手抜きは妻の得意技

健二
修平
りこ
つな子
まつお
靖鬼
紀恵
哲夫
宏造
美籠
和子
耕治
遠野
ヨシエ
見清
かずお
正和
紀乃
哲男

英旺
肇
求芽
玲子
宏子

お酒好き始めそこそこあとダウン
語り部の声詰まらせる終戦日
小池さん今日の化粧はうすめです
耳打ちはどうやら鈴をつける役
軽すぎて浮く母抱いて風呂に入る
蝉しぐれ暑い分だけ米実る
しあわせの一步手前の位置でよい
逆風に透かして分かる真の友
褒められて軽いくしゃみが出てしまう
迷い子札着けてポケモン探す日日
焦げ付いた話の先は突かない
凭れないで支え合うつて難しい
文言を直し選んでお詫び状
目立たぬが無くてはならぬ妻である
生ぬるい耳打ち男迷い出す
軽口をたたいて暑さまぎらわす
安産のあとの身軽さ宙に浮き
遠花火耳うちでする好奇心
風鈴のやさしさこころ軽くなる
そこそこで我慢が出来ぬ欲の皮
まだ明日を夢見て喜寿の好奇心

川柳大阪

山崎

珠生報

健三 公子 健二 雀舎 美津子 武彦 美佐子 堅坊 千鶴子 則彦 久子 葉子 見清 美籠 正彦 満子 朝子 真理子 ヨシエ 美智代 黒兎

医者知らぬ五臓の中に過去の傷
あれ以来疑い深い妻になり
ジグザグに天を切り裂く稲光
雷ぐらい動じぬ人と住んでいる
九条を触ると国民の地雷
とこん惚れてとこん尽し捨てられた
長生きしとこん年金もろてやる
好きだよと死ぬまで嘘をつき通す
ツーカーで飲めばいつでも終電車
梵鐘の響きへ湧いた里ごころ
幸せの音を響かせ孫が来る
靴音響くノルマ達成したらしい
やんわりと響く説教秋夜長
オバマにも響いたはずだ碑の誓い
子どもの声響く嬉しい夏休み
読経ひびく一人迎える仏間の灯
北つよいさすがの愛も蘭がたたず
夢中ですスマホで二駅歩くはめ

川柳さんだ(兵庫)

田中

章子報

弥生 遠野 一歩 紀雄 珠生 まつお 勝弘 朝子 芳香 わこ (今)万紗子 (内)志津子 美世子 美籠 和司 晶子 健二 雄太郎 耕治 雅尚 博

へソクリは半分夫の小遣いで
お先にと譲る余裕のないトイレ
逢いに行く破滅の道と思いつつ
時価のすし一口ごとにスリル感
寝入ったかそり引き出すへそくりを
投げやりな人の心を癒す愛
マンネリの夫婦に欲しい変化球
投げ出さず戦う覚悟金メダル
決定戦投げ出さぬから得たメダル
やぶ医者が匙を投げたぞ治るかも
その頑固さ放り投げたいあなたです
いまいちと不足述べ合い五十年
青田買いいまいちの子がよく伸びる
いまいちの畑は野鳥も荒らさない
いまいちとくさしたケーキ全部食べ
はにかみを忘れぬ肌の艶つぼさ
それぞれの任務を背負う蟻の列
毎晩の不良婆さん五輪漬け
早く来いゆつくり帰れ盆の霊
甲子園チエンジのたびの中ジョッキ
草いきれいくさ忘れた赤トンボ
人生の余白ゆつくり飲んでます
ジェット機が御巣鷹山を横切った
赤とんぼ入りそこねてお隣りへ
願わくば親を越しての命乞い
成仏は此の世でせねば意味が無い

ちあき 修平 好文 宣子 富夫 一子 美籠 健彦 恭子 隆 美智子 勝正 順子 俊昭 迪 見 靖鬼 キヨミ 祐康 野薫 ヨシエ 花門 哲夫 歳子 つな子 加代子

初盆に師の筆跡を手にしはし
イチローへやろうよ国民栄誉賞
黄昏と言ふな八十路は夕映えじゃ

千津子
正和
哲男

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造

宏造

ナニワ発情もほころぶ新喜劇
ふるさとへ税を納めて待つメロン
道路掘るザクザクザクと税の音
ボンと肩汗かいたねと優しい手
嫌なこと汗を流せば消えていた
病院の全科をまわる多忙の日
血圧計美人の女医に狂わされ
神様も英語習らうてと書いた絵馬
争いの好きな小さな星がある
座つてるだけでしたるメタボ汗
イチローの汗が実つたうれしい日
ボケモンGO夜更けの私眠らせず
せせらぎを束ねて海へ出る大河
一族を束ねてみせる呱呱の声
ハイハイハイ束ねて聞くの祖母の耳
そよぐ風束ねの中の息づかい
満員電車束ねて欲しい長い髪
記念日の束ねた花に思いのせ
捨て猫を見かね母の忌蟬しぐれ
雑炊を孫に炊きます終戦日
核廃絶見果てぬ夢か八月忌

恭子
宣子
千賀子
順子
利子
和宏
じろう
哲男
哲子
浩司
章子
千代
茂
宏造
わこ
洋次郎
りこ
敦子
弘子
美津子
秋果

残り火に命かけます蟬しぐれ
リオ五輪地球もサンバ踊り出す
甲子園野球小僧の夢舞台
近く順を後や先やと夫婦もめ
ナンセンスと言われても僕りベラル派

紀華
一徳
盛夫
文香

熱い血で明日の自分に賭けてみる
蟬しぐれ陛下の熱い思い聞く
満天の評価にあつたリオ五輪
御無沙汰をわびる慕参へ蟬しぐれ
輪の外でおもむくまに生きている
目分量で生きる暮しもわるくない
と姉ちゃん悲喜こもごもの昭和
楽な方へと傾く首を持つて
燈籠灯り春日大社で折る盆
ボケモンGOやるのは少し様子みる
国境を越えてアスリートの賛歌
鳥が鳴く甲斐性なしと言うように
自分史はちよつと脚色しています
検閲も受けて天皇のおコトバ

昭
楓
弘子
富子
良子
理恵
和夫
日の出
紀子
げんえい
満作
みつ子
浩二
眞澄

部屋の埃も税金かかる掃除機で
灯明の風吹かばゆれ人もまた
禅問答向き合う二人首傾け
ナンセンス百人程のアンケート
いさかいをなんとか束ねやつと酒
猿山のさるを束ねるサルボス
落ち蟬の果ての一声夏走る
大根の尻尾にもある消費税

比呂志
伯備
健彦
敏夫
邦男
輝彦
靖夫
野鶴

比呂志
伯備
健彦
敏夫
邦男
輝彦
靖夫
野鶴

翠洋会(大阪)

佐々木満作

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子

この僕に出世払いでいいと言う
夢でない出世仕事の鬼となる
石橋を叩いて出世乗り遅れ
背広着て出世したぞと田の案山子
出世した人の失せもの忘れもの
米寿では出世の文字は縁がない
町工場社長も同じナツパ服
外間が良いと出世に妻はしゃぐ
リオ五輪テレビ観戦休めない
トイレ休憩流れが変り銅メダル
夏つ子の割に苦手なこの暑さ

恭昌
照子
捷也
志華子
希久子
公平
すみ子
敬子
善之
舞夢
蕉子

リオ五輪天地が動く大騒ぎ
口ばかり達者でナース困らせる
送り火の炎に心動かされ
我が心右へ左へ揺れ動く
新しい命が動くママになる
いっぴきの蟻の命をふと思ふ
働いた蟻のその後が気にかかる
過労死と熱中症で減った蟻
そりやまあ遊びの好きな蟻もいる
黙々と働く蟻も奉上げ

一文
五月
育代
彦弘
光男
美代子
シルク
六点
まつお
キーキー

朝シヤンをしていそいそと逢いにゆく
頭からシヤワービエロも人になる
夕立に恋が芽生える軒が無い
昭和つ子タライ行水今シヤワー
シヤワー浴び心の汚れまで落とす
全開のシヤワーも邪心流せない
九条に触れ批判のシヤワー浴びる
シヤワー浴びテロ難民をふと思う
母想う星のシヤワーを浴びながら
大家族シヤワーの順を決めてある

六甲川柳会(兵庫)

市坪

武臣報

いさお
瑠美子
喜代子
絹子
雅枝
みつこ
紀雄
一步
信二
扶美代

家族の和その中心に車椅子
おばちゃんは三猿主義の逆をいく
薄れゆく父母の姿をさがす盆
家族でも大事に保つ車間距離
おかえりと明るい声が待つ家族
愚痴一切山に吐きだし明日を見る
風次第ちよっと淋しい風車
三世代の靴が揃った夏休み
散らばった家族が揃う婚と葬
生きてきた涙の色もそれぞれに
今日も見る感動のせた日章旗
ガムシヤラの三日目の蟬熱すぎる
桜の木せみの家族に宿をかし
父さんを尊敬してる良い家族

武彦
盛夫
弘
忠貞
千賀子
和宏
洋次郎
茂
浩司
妙子
正彦
道子
邦子
順子

孫揃う西瓜の厚み祖母の業
雨上がり心やすらぐ虹の橋
ありがとうその一言がやすらぎに
人生はうぶに初まりうぶに戻る
御茶漬のおいしさ知った二日酔い
マンネリの旅から戻る始発駅
出来るかもきつと出来るにある未来
苦も楽もあつて家族という絆
柿八年句会九年まだ初心
暑さ酷し胡瓜もあえぎ腰を曲げ
反故にした約束未だ締めつける

川柳ねやがわ(大阪)

籠島

恵子報

洋一
武臣
弘子
じろう
夏子
和郎
文香
利子
美恵子
美穂
光久

ゆるがない決断父の太い眉
青天の霹靂やんちゃくれに嫁
言い訳はしないと決めた青いバラ
言い訳を繕い過ぎてボロを出し
バナマ文書に資本の異臭満ちわたる
懐かしい巷に消えたチンドン屋
灯台の雄姿そびえ立つ父だ
作業着の汗の臭いへありがとう
言い訳を先ず考えてする浮気
これ以上脱ぐものもないこの暑さ
広告でその日の料理きめる妻
生き方を背中て示し父が逝く
葬儀屋のチラシ終活急ぎ立てる

寿子
麗
一
郁夫
純甲
美江
亜成
かすみ
壽峰
高志
薫
弘委智
仁

あちこちのチラシ並べて思案顔
引つ越しへ神も仏も連れてゆく
半夏生夏を過ごした蟬の殻
戦では総活躍はごめんです
くどくどと言いつけるサングラス
我が家の灯台だらう娘婿
夢の島元は悪臭ゴミの島
朝一は広告見ながらスイッチオン
ベチャパイは三児育てた勲章だ
灯台が一つあの日のまま消えぬ
とてもとても平和の好きな百日紅
法師蟬秋を迎えに行つたまま
銀に泣く吉田沙保里の自尊心
世界の祭り裏に戦火絶えぬ国
赤紙がマイナンバーでやつてくる

秀雄
博泉
弘一
惟圭
茜
ルイ子
祥昭
信子
尚世
朝子
洋修

岸和田川柳会(大阪)

佐藤

幸子報

次の世はあの金星に居るつもり
ホタル光るまるで星座を組むように
全没に慣れてもやはりストレスに
生き生きと星座教える孫の鼻
よう流行る医者もストレス溜めている
いささかの迷いもなくプロポーズ
さそり座の女と知って腰が引け
涼風を追って河原へ出る浴衣
いささかも做ることなき野の花よ

昭彦
和美
カズ子
清
一子
喜代志
幸子
愿

生臭い風に九条耐えている
いつも笑顔自分騙しに耐えている

妻の後いつも追いかけて嫌がられ
追い越した美女の香りがついてくる

満天の夜空に星座揃い踏み

蠍座の女がほくを振り回す

核ゼロを追い続けてる太いペン

夢を見て明日に希望を託します

よく喋る妻がストレスあると言う

追い越せる距離で力を溜めている

文春に追われてやっとな一流に

サザンクロス亡夫と眺めた思い出よ

届かないものを追う癖遠花火

好っきやで微塵も躊躇わずに言う

花でさえストレス感じ咲きそびれ

青写真とはいささか違う今の僕

星座の名付けて場末の映画館

大山滝座(鳥取)

新家 完司報

似合っても似合わなくても夏帽子

足腰が歳だ歳だと叫んでいる

綺麗だよ結婚式で言ったきり

ISの頭巾と同じ日よけ帽

葬送の今日の完璧すぎる空

残念でした至って私元氣です

美しい星と気付かぬから戦

信二

たかこ

忠太

大輔

隆昭

珠子

ダン吉

のお

浩子

ひろ子

英夫

弘子

ふさあ

みつ江

益男

侑子

義泰

幸子

昭子

規雄

コスモス

正人

楓花

芳光

そうかそうかと苦勞話を受け流す

敗者にはより暖かい甲子園

服装がきれいで顔が目立たない

狎犬がジャンプしようと足固め

逃げ足が鈍い捕まるのは速い

百人の薔薇百人の敵味方

人を斬る日本刀が美しい

潜水に息が足りないタコ迷し

美しい庭はいらない金がいる

私の足四キロ歩けば棒になる

今朝の虹足の裏にも見せないな

上流に住んで綺麗に使う川

シンクロで開いて閉じてエロスみる

銅でもよい分解すると金がある

おばあちゃん昔綺麗でいま気品

老いてなおもくもくと湧く好奇心

予防策ヒールを止めてスニーカー

夏惜しむコオロギの足セミの足

くにこ

紀の治

大鯨

麦青

雄大

美ツ千

石花菜

蟹郎

けいこ

風露

由紀子

野蒜

幹啓

正男

道唱

重忠

鈴野

完司

かつ子

安子

英子

好栄

恵美子

ハル子

いつしらず方言うすくなつてゆく
方言が市民権を取る芥川

はるみ

昌

川柳塔わかやま吟社

川上

大輪報

スマイルひとつ私を守る武器にする

残り火と守る大きな夢がある

こころ一番守り固めて切り抜ける

了見の狭い男も守る羽目

九条をしかつと守る母の責

子を守る強い女の羅針盤

亡き父の背に守られて今生きる

折り鶴の平和あの日を語り継ぐ

差別なく世界が集う五つの輪

平和憲法まずは九条守るべし

平和だなおばちゃん今日も飽配る

七十億三度殺せる核を持つ

借りつくり返しながらも今平和

幸福が溢れて笑みが零れ出す

満員の拍手に応え奏でます

あと一人乗ると小舟は沈みます

見てもないのにご盛会という祝電

人数に入っていないかも私

間違えて論吉を入れた募金箱

差し出口平凡な日を掻き回す

子育てに幾度も越えたいこつちや

盆休み体重計が跳ね上がる

徑子

寿子

准一

克子

めぐみ

弘子

まさみ

富美子

紀久子

よしこ

大輪

ダン吉

なる子

京子

ほのか

小雪

保州

知香

日出男

紀子

秀子

あかね

句会名	日時と題	会場と投句先
あかつき 川柳会	14日(金) 14時締切 熱い・朝・収穫・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳塔 みちのく	15日(土) 17時締切 軋む・もてもて・案山子	弘前市松森町73「レストラン・セーブル」TEL0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 ねやがわ	16日(日) 13時締切 旅行・オモチャ・催促・自由吟	産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川柳 藤井寺	16日(日) 14時締切 芸術・にじむ・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岸和田 川柳会	16日(日) 12時開場 岸和田市民川柳会	岸和田市立福祉総合センター 川柳塔誌8月号 43ページ参照 〒596-0067 岸和田市南町9-17-818 藤井康信
豊中 もくせい 川柳会	17日(月) 13時45分締切 苦手・ばやける・どっぶり 自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳 さんだ	18日(火) さんだ川柳大会	JR「三田」駅前 キッピーモール6階 〒669-1545 三田市扶間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳 たちばな	19日(水) 14時締切 席題・木(互選)	立花公民館 (尼崎市塚口町3-39-7) 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
和歌山 三幸 川柳会	22日(土) 12時30分開場 やむを得ないこと・冗談・色	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市川柳 会	23日(日) 14時締切 方言・真似る・チーム	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 社	23日(日) 13時30分開場 芯(しん)・チェック・しかし	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金洋
南大阪 川柳会	24日(月) 18時開場 すっきり・スロー・腹が立つ・飴	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔 すみよし	29日(土) 14時15分締切 他人・幕・脱ぐ	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂燕子
京都 塔の会	31日(月) 14時締切 クリア・ときめき・菜	京都ハートピア 地下鉄九太町駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

10月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
倉吉柳会	1日(土) 14時締切 操る・先祖・ケア	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔え社 まつ	1日(土) 13時30分締切 平凡・飛行機・平和・覗く	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
川柳塔ら な	6日(木) 14時締切 手作り・まるい・神	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
川柳塔さかい	7日(金) 13時開場 起きる・肌・折句・もみじ	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	8日(土) 14時締切 誤算・こっそり・支える	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪府都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
城北川柳会	8日(土) 14時締切 揺れる・常識・ひしひし 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線 千林大宮駅③番出口 〒536-0001 大阪府城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富柳会	8日(土) 14時締切 大・アバウト・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
川柳塔打吹	8日(土) 14時締切 トラブル・返す・ガラガラ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民川柳会	9日(日) 14時締切 鶏冠・きさんじ・崩す・雑詠	八尾市渋川町 安中町集会所 1F JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔わかやま 吟社	9日(日) 14時10分締切 兼題＝反対・ラベル・まだまだ 課題吟＝燃料	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺薬師森町東2-208-5 泉原道夫
西宮北口川柳会	10日(月) 14時締切 自然・震える・ぴんぴん 自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「ブレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる川柳同好会	11日(火) 13時30分締切 米・伝える・もともと	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳あまがさき	11日(火) 14時締切 越す・前・若い・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 阪急「武庫之荘」駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼

柳界展望

★加藤鏗追悼誌上句会。

応募者1026名。同人成績。

特選 小島 蘭幸

特選 跳ねていた輝いていた泣いていた

特選 川上 大輪

特選 まだ跳ねてますか桜は散ったのに

特選 跳ねてみるウルトラマンを超えてみる

特選 魂が跳ねて運命だと気づく

特選 栃尾 奏子

★第15回卑弥呼の里女流川柳大会は7月31日、吉野ヶ里公園駅ホールで開催。同人成績。

天位 木本 朱夏

幻を追う人込みを縫いながら

★16尼崎川柳大会は8月27日ビッコロシアターで開催。同人成績。

尼崎文化団体協議会会長賞

矢倉 五月

突き進みなさい亡母の声を聞く

★第17回四万十川川柳大会。同人成績。

国際ソロプチミスト幡多賞

水という美しきものの手に受ける

★竹原川柳会60周年記念大会は9月4日開催。同人成績。

天位 三宅 保州

地球という窓が曇っていませんか

天位 小島 蘭幸

樹齢千年もう美しくなるばかり

▽柳界動向△

★木本朱夏さん(副理事長)は『葦群38号』に、『梅崎流青小論』を執筆。

★西出楓楽相談役は『川柳えんぴつ』(富山県)八

月号巻頭言「熱風」に「カルチャーで教えることは学ぶこと」と題して執筆。

▽計 報△

■春城年代さん(同人・尼崎市)は、7月18日逝去。享年95。

■高島啓子さん(同人・京都市)は、8月22日逝去。享年78。

▽お詫びして訂正△

▼9月号P59下段4行目。選手権↓選挙権。

▽新誌友紹介△

豊中市 木藤 明子

紹介者 新築 完司

沖繩県 島尻 卓

紹介者 森山 文切

福井市 伊藤 良一

奈良市 小林すみれ

常任理事会 9月7日(金)

①新年度常任・理事について②川柳塔まつり準備担当確認③財務あれこれ④こうやさん合祀対象者⑤定例確認事項

新同人紹介

山 東 日出男

—大輪・保州推薦

村 田 博

—正和・哲男推薦

平 賀 国和

—楓楽・たもつ推薦

山 下 純子

—楓楽・たもつ推薦

大 浦 初音

—美籠・宏造推薦

第31回 渡辺銀雨賞 すずむし全国誌上川柳大会

課題 「望」

(2句詠・字結び・詠み込み可)

選者 十五名共選

岡崎 守・千島鉄男・島田駱舟
田辺進水・小島蘭幸・渡辺松風 他

投句料 1000円(郵便小為替)何口でも可

※ 参加者全員に参加賞呈

投句用紙 所定用紙・便箋用紙・原稿用紙
住所・氏名(雅号・本名)・郵便番号・電話明記

賞 大賞(一名) 楯・あきたこまち 20キロ
準賞(二名) 楯・あきたこまち 10キロ
4位～10位 あきたこまち 5キロ
11位～20位 あきたこまち 3キロ

締切 10月31日(消印有効)

発表 「川柳すずむし」誌 12月号

投句先・問合せ先

〒018-1724 秋田県南秋田郡五城目町東
磯ノ目1丁目7-11

すずむし全国誌上川柳大会係宛

TEL 018 (852) 2430

主催 川柳すずむし吟社

第68回 西日本川柳大会

とき 10月9日(日) 9時～16時

ところ 岡山県久米郡久米南町下弓削
久米南町文化センター

第2部(当日)各題2句・特別席題1句

兼題(大会当日11時締切)

「まつり」 西村みなみ 選

「意外」 森山 盛桜 選

「熱い」 小島 蘭幸 選

「恵み」 赤井 花城 選

特別席題(当日発表)

恒弘 衛山 選

参加費 2000円

主催 弓削川柳社

川柳奉行 三原川柳会全国誌上大会

課題 「築く」

(新作2句・下記の6名共選)

選者 小島 蘭幸・北川 拓治
大谷 慧水・河原 千壽
田辺 進水・長島 敏子

投句用紙 所定投句用紙あり。または便
箋大に楷書で郵便番号・住所・
氏名・電話番号明記

投句締切 10月31日(月)当日消印有効

投句料 1000円

(郵便小為替等・切手不可)

投句先 〒723-0044

三原市宗郷2-7-27

嶋田 昭紀 宛

TEL 0848-63-1096

第37回 桜井市民川柳大会

日時 10月16日(日) 10時開場

会場 桜井市まほろばセンター 2F
近鉄・JR桜井駅南出口すぐ

会費 1000円(発表誌・軽食)

宿題と選者

「始まる」 小林 和之 選

「落し穴」 五味 尚子 選

「しかし(連記)」 太田のりこ 選

「とんぼ」 仲村 周子 選

「誘う」 安土 理恵 選

「文句」 土田 欣之 選

連絡先 島岡美智子

TEL 0744-43-3064

主催 やまと番傘 桜井川柳会

編集後記

★一望の芒に女一人かな

薫風

★平成二十八年年度六賞が発表されました。受賞者の皆さん、おめでとうございませう。日々の研鑽の賜物を実感されたことと思います。今回惜しくも受賞されなかった方々には、「今後」というチャンスがあります。賞がすべてではありませんが、綺羅星の一つを目標として精進を重ねることは無駄ではないと思います。秋の夜長、虫の音に耳を澄ませながら、新たな気持ちで川柳を見直す良い機会かも知れません。

★熱い感動に湧いたりオの五輪に引き続いて9月7日から18日まで、バリリンピックが開催された。陸上、サッカー、柔道、自転車、水泳、その他、全

22種。日本代表は一二三名。卓球に出場した別所

キミエさんは兵庫県出身の六八歳。頼もしいではないか。出場者の一人一人の言葉。「人間は目標を持つとパワーが出てくる」。「ハンデキャップを個性的だと思う」。

★ポケモンGOで遂に交通事故の死者が出た。痛ましいといしか言いようがない。以前に見たレストランでの光景。若いカップルがそれぞれ注文をしてお互いにスマホをいじり出した。女性の料理がきいて彼女は黙って食べる。その間、男性の目はスマホに。次に男性の料理がお互いに黙って食べ黙って席を立った。お互いの目はスマホに釘付けのまま。何なんだ、これは！

★歩きスマホ、ながらスマホの弊害はとうに言われて来た。車の運転中に

ひとこと

（これから）よろしく

古稀を過ぎ、偶然出会った川柳師のやさしく、的確な指導をうけて、一年後初めて句会の場に参加「全没を覚悟の上の初句会」と詠んだ句が入選。その時の感動が、本格的に学んでみようという気になつています。先人、諸先輩の思いに一歩でも近付ければと励む毎

日です。「川柳とは」と問われても、季語が無くて良しの五七五の短文としか認識の無かった私ですが、数々の柳友、様々な句に出会い、心情や、情景、日目の政治等に対する関心等等。句にする事に、自分自身、随分成長した様に思っています。

（磯島福貴子）

スマホを見ているなんて「ゆうメール」に変更し尋常ではない。それほど送部の考案で発送経費のう。1分1秒を争う大変なことが情報として発信されているのか？二つのことを同時にすると二つとも疎かになるという。諺にもいう。「二兎を追う者は一兎をも得ず」。

（朱夏）
□お気づきでしょうか
「川柳塔」七月号から郵送方法が第三種郵便から

□「川柳塔」S41年2月号から、麻生霞乃先生の寸評「（課題）感じの出てくるのを佳作に、すでに詠まれているようなものは平拔でおとしました」と述べていた。選のワン

人間のよろさを知った日の暮し
闘病の夢に白馬の騎士が来る
マンションの窓ひとつづつ孤独
僕は郵便屋さん日焼けの跡もくつきりと

（勝弘）

檸檬抄投句用紙

「無心」(10月15日締切)

12月号発表

安土 理恵 選 — 共選 — 北野 哲男 選

B

A

B

A

地名

市都
道府
姓
雅号

地名

市都
道府
姓
雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

12月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (2句)
檸檬抄 (2句)
インスレーションナヒ (2句)
一路集 (2句)
初歩教室 (平) [「ドライブ」]
均 (3句)
山藤山大
口井本西
光宏昌泰
久造代世
担当選選選

小島蘭
西出楓
新家完
北野哲
安土理
恵男司
共選選選

1月号
檸檬抄「価値」
一路集「古い」「人気」
初歩教室「仲間」

第22回 川柳塔まつり

日時 10月1日(土) 開場: 11時
出句締切: 正午 開会: 午後1時
場所 ホテル アウイーナ大阪 4階 金剛の間
〒543-0031 大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12
TEL 06-6772-1441

会費 2,000円 (記念品呈)
おはなし 「老いを詠む」 木本 朱夏
兼題 (各題2句・欠席投句拝辞)
「芸」 居谷真理子 選
「マニア」 竹治ちかし 選
「うっかり」 三宅 保州 選
「届く」 山本希久子 選
「ぶらり」 新家 完司 選
事前投句 「みどり」 小島 蘭幸 選
《懇親宴》 午後5時～7時
アウイーナ大阪3階 葛城の間

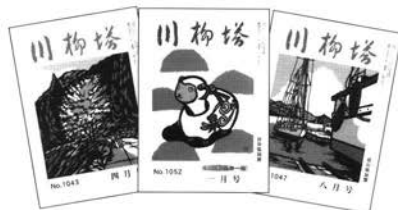
会費 7,000円
主催 川柳塔社
〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-14-17
花野ビル201号室
電話 06-6779-3490

本社 11月句会
7日(月) 午後1時から
兼題 「橋」「打席」「脱ぐ」
「ボン」「未熟」

第35年度 夜市川柳募集

第5回「折れる」 池 森子 選
ハガキに3句 10月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372-1178
FAX (06) 6372-1196
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円 (送料86円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)
二〇一六年(平成二十八年)十月一日発行
発行人 小島 和幸
編集人 木本 朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 (06) 6779-1349 番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しっかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>